

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 発掘調査報告書Ⅱ

— 第22・30次発掘調査 —



2014

鳥取市教育委員会

平ヶ岡太附跡城取鳥跡史 Ⅱ 報告書 掘発

— 第22・30次掘発調査 —

序 文

この報告書は、国庫補助金及び県補助金を受けて、平成 21 年度および平成 24 年度に実施した史跡鳥取城跡発掘調査の記録です。

鳥取市の中心市街地にそびえる久松山に所在する鳥取城跡は、国の史跡であり、後世に継承していかなければならない市民の貴重な財産です。鳥取市では、現在『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存整備基本計画』を策定し、関係各機関・専門家の指導を得て長期的な保存整備事業に取り組んでいます。今回報告する発掘調査は、その一環として史跡整備に必要な情報を得るために実施したものです。

なお、この報告書は不十分なところも多くありますが、私たちの郷土の理解に役立てていただくと共に、今後の調査研究の一助となれば幸いです。

平成 26 年 3 月

鳥取市教育委員会
教育長 木下法広

例 言

1. 本書は、鳥取市東町2丁目・円護寺・栗谷町・百谷・小西谷に所在する国指定史跡鳥取城跡附太閤ヶ平において実施した、国庫補助事業「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平復元保存修理事業」に伴う発掘調査報告書である。
2. 本書は、平成21年度(第22次調査)・24年度(第30次調査)に実施した鳥取城保存修理事業に伴う発掘調査報告書である。
3. 本書で報告する発掘調査は、鳥取城跡復元整備計画に伴い、鳥取市教育委員会文化財課が実施した。
4. 遺構写真および遺物写真は調査担当者が撮影した。
5. 第30次調査区の三次元測量・図化・オルソ図作成については、株式会社四航コンサルタントに委託した。
6. 本書の執筆は鳥取市教育委員会文化財課が行った。
7. 本書で使用した標高は東京湾平均海面高を基とし、方位は世界測地系座標V系の座標北を用いた。
8. 出土遺物ならびに図面類は鳥取市教育委員会文化財課で保管している。
9. 本報告書において使用する25,000分の1地形図は、鳥取市発行の「鳥取市管内図」を使用し、調査区周辺の地形図については鳥取市発行の都市計画図、史跡指定地範囲については鳥取市教育委員会作成の地形図を使用した。
10. 発掘調査および出土品整理の整理に際しては、下記の機関並びに個人から指導・ご教示をいただいた。記して深甚の謝意を表す。

文化庁記念物課、鳥取県教育委員会、鳥取県立博物館、鳥取市歴史博物館、鳥取市埋蔵文化財センター、田中哲雄、浅川滋男、麓和善、吉村元男、錦織勤、北垣聰一郎、谷本進、八峠興、中森祥、湯村功、鳥取県立鳥取西高等学校、(公財)鳥取市公園・スポーツ施設協会(順不同、敬称略)

目次

第Ⅰ章 調査の経緯と目的

1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
(1)発掘調査	1
(2)報告書作成	2
3 指定の詳細	4

第Ⅱ章 立地と環境

1 位置と地形	5
2 歴史	5
3 構造	7
(1)山上ノ丸	8
(2)山下ノ丸	8
(3)山腹の遺構群	8
4 鳥取城関連略年表	12

第Ⅲ章 調査の成果

Ⅲ-1 第22次発掘調査	13
1 調査の概要	13
2 調査の結果	13
(1)遺構面	15
(2)落ち込み状遺構	15
(3)第1トレンチ(Tr-1)	15
(4)第2トレンチ(Tr-2)	17
(5)第3トレンチ(Tr-3)	17
(6)ピット状遺構1(P1)	17
(7)ピット状遺構2(P2)	18
(8)石垣	18
3 出土遺物	18
(1)土器	18
(2)瓦	18
(3)その他の遺物	20
第30次発掘調査	21
Ⅲ-2 第30次発掘調査 第1調査区	21
1 調査の概要	21
2 調査の結果	26
(1)北西側(A・B・H・I面)	26
(2)土塀基礎状遺構	26
(3)武者走りおよび石囲い状遺構	26
(4)第1トレンチ(Tr-1)	28
(5)北東側(C・D・E・F面)	28

(6)第3トレンチ(Tr-3)	29
(7)第6トレンチ(Tr-6)	31
(8)瓦廃棄層	31
(9)階段	31
(10)階段状遺構	31
3 出土遺物	32
(1)土器	32
(2)瓦	32
(3)その他の遺物	50
III-3 第30次発掘調査 第2調査区	51
1 調査の概要	51
2 調査の結果	51
(1)第1トレンチ(Tr-1)	51
(2)第2トレンチ(Tr-2)	52
(3)第3トレンチ(Tr-3)	52
(4)第4トレンチ(Tr-4)	52
(5)第5トレンチ(Tr-5)	52
(6)第6トレンチ(Tr-6)	52
(7)第7トレンチ(Tr-7)	52
(8)階段状遺構	58
(9)修理範囲	58
3 まとめ	58
4 出土遺物	60
(1)土器	60
(2)瓦	62
(3)その他の遺物	66
III-4 第30次発掘調査 第3調査区	69
1 調査の概要	69
2 調査の結果	69
(1)第1トレンチ(Tr-1)	69
(2)第2トレンチ(Tr-2)	70
(3)第3トレンチ(Tr-3)	70
(4)溝状遺構	70
(5)控柱根巻き	70
(6)近世最終面	74
(7)石垣	74
3 まとめ	74
4 出土遺物	75
(1)土器	75
(2)瓦	75
(3)その他の遺物	75
III-5 第30次発掘調査 第4調査区	85

1	調査の概要	85
2	調査の結果	85
	(1)第1トレンチ(Tr-1)	85
	(2)第2トレンチ(Tr-2)	89
3	まとめ	89
4	出土遺物	91
	(1)土器・その他の遺物	91
	(2)瓦	91
IV 考察		
1	太鼓御門周辺	97
	(1)周辺状況	97
	(2)第22次発掘調査	100
	(3)第30次発掘調査第4調査区	100
2	中ノ御門周辺	103
	(1)第30次発掘調査第1調査区	103
	(2)第30次発掘調査第2調査区	106
3	登城路沿い	106

挿図目次

第1図	大手登城路復元整備イメージ図	3
第2図	鳥取城跡附太閤ヶ平指定範囲	4
第3図	調査区周辺遺跡分布図(S=1/50,000)	6
第4図	大手登城路周辺調査位置図(S=1/800)	9
第5図	既往の発掘調査区位置図(S=1/2500)	10
第6図	第22次調査区平面図(S=1/50)	14
第7図	第22次調査トレンチ土層図(S=1/50)	16
第8図	第22次調査ピット状遺構実測図(S=1/20)	17
第9図	第22次調査石垣実測図(S=1/50)	18
第10図	第22次調査出土遺物実測図1(上S=1/3、下S=1/4)	19
第11図	第22次調査出土瓦拓影(S=1/1)	20
第12図	第22次調査出土遺物実測図2(S=1/4)	20
第13図	第30次調査第1調査区平面図1(S=1/60)	22
第14図	第30次調査第1調査区平面図2(S=1/60)	23・24
第15図	第30次調査第1調査区オルソ図(S=1/120)	25
第16図	土塀基礎状・石囲い状遺構平面図(S=1/60)	27
第17図	第1調査区第1トレンチ土層図(S=1/50)	28
第18図	第1調査区第3・6トレンチ土層図(S=1/50)	29
第19図	第1・2調査区瓦分布状況(S=1/80)	30
第20図	第1調査区出土遺物実測図1(S=1/3)	33
第21図	第1調査区出土遺物実測図2(S=1/3)	34
第22図	第1調査区出土遺物実測図3(S=1/3)	35

第23図	第1調査区出土遺物実測図4 (S=1/3)	36
第24図	第1調査区出土遺物実測図5 (S=1/4)	37
第25図	第1調査区出土遺物実測図6 (S=1/4)	38
第26図	第1調査区出土遺物実測図7 (S=1/4)	39
第27図	第1調査区出土遺物実測図8 (S=1/4)	40
第28図	第1調査区出土遺物実測図9 (S=1/4)	41
第29図	第1調査区出土遺物実測図10 (S=1/4)	42
第30図	第1調査区出土遺物実測図11 (S=1/4)	43
第31図	第1調査区出土遺物実測図12 (S=1/4)	44
第32図	第1調査区出土遺物実測図13 (S=1/4)	45
第33図	第1調査区出土遺物実測図14 (S=1/4)	46
第34図	第1調査区出土刻印瓦拓影 (S=1/1)	46
第35図	第1調査区出土刻印瓦・銭貨拓影 (S=1/1)	48
第36図	第1調査区出土遺物実測図15 (S=1/3)	49
第37図	第1調査区出土遺物実測図16 (S=1/2)	50
第38図	第30次調査第2調査区平面図 (S=1/60)	53・54
第39図	第2調査区オルソ図 (S=1/100)	55
第40図	第2調査区第1・2・3トレンチ土層図 (S=1/50)	56
第41図	第2調査区第4・5・6・7トレンチ土層図 (S=1/50)	57
第42図	第2調査区出土遺物実測図1 (S=1/3)	59
第43図	第2調査区出土遺物実測図2 (S=1/3)	60
第44図	第2調査区出土遺物実測図3 (S=1/3)	61
第45図	第2調査区出土遺物実測図4 (S=1/3)	62
第46図	第2調査区出土遺物実測図5 (S=1/4)	63
第47図	第2調査区出土遺物実測図6 (S=1/4)	64
第48図	第2調査区出土遺物実測図7 (S=1/4)	65
第49図	第2調査区出土刻印瓦拓影 (S=1/1)	66
第50図	第2調査区出土遺物実測図8 (S=1/2・S=1/3)	67
第51図	第30次調査第3調査区平面図 (S=1/50)	71・72
第52図	第3調査区オルソ図 (S=1/80)	73
第53図	第3調査区第1・3トレンチ土層図 (S=1/50)	74
第54図	第3調査区出土遺物実測図1 (S=1/3)	76
第55図	第3調査区出土遺物実測図2 (S=1/3)	77
第56図	第3調査区出土遺物実測図3 (S=1/4)	78
第57図	第3調査区出土遺物実測図4 (S=1/4)	79
第58図	第3調査区出土遺物実測図5 (S=1/4)	80
第59図	第3調査区出土遺物実測図6 (S=1/4)	81
第60図	第3調査区出土遺物実測図7 (S=1/4)	82
第61図	第3調査区出土刻印瓦拓影 (S=1/1)	82
第62図	第3調査区出土遺物実測図8 (S=1/3)	83
第63図	第4調査区オルソ図 (S=1/80)	86
第64図	第30次調査第4調査区平面図 (S=1/50)	87・88

第65図	第4調査区第1・2トレンチ土層図(S=1/50)	89
第66図	第4調査区出土遺物実測図(上S=1/3、下S=1/4)	90
第67図	太鼓御門周辺遺構図(S=1/150)、土層断面図(S=1/80)	98
第68図	太鼓御門周辺絵図	99
第69図	中ノ御門周辺遺構図(S=1/150)	101・102
第70図	中ノ御門周辺絵図	105
第71図	第30次調査第3調査区周辺状況	107

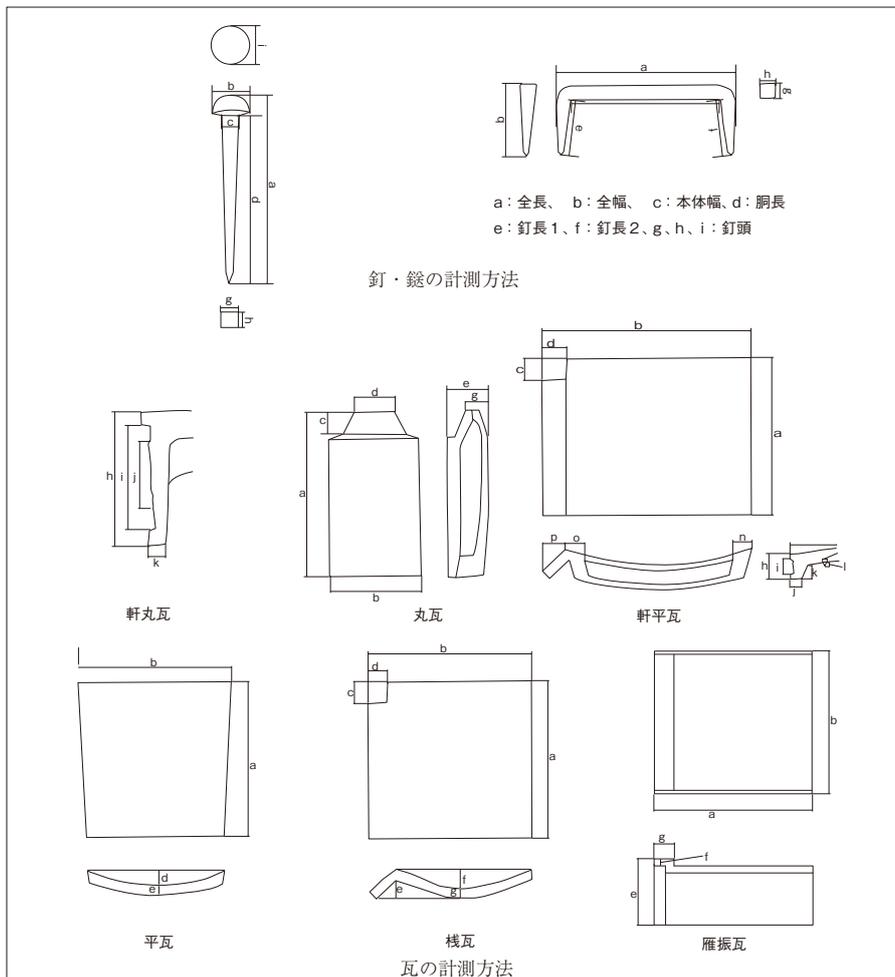
写真目次

写真1	鳥取城跡空中写真(南から、背後が久松山)	68
写真2	解体前の鳥取城(正面が中ノ御門)	68
写真3	地震による崩落状況(第1調査区)	84
写真4	地震による崩落状況(第4調査区)	84

図版目次

図版1	第22次発掘調査1 第22次調査区全景(南西から)、Tr-1 E面土層(北西から)、Tr-1 F面土層(北東から)、 Tr-2 落ち込み状遺構断面(北から)、Tr-1 落ち込み状遺構検出状況(南西から)
図版2	第22次発掘調査2 Tr-1 F面土層(北東から)、調査区遠景(北から)、P1完掘状況(南西から)、 旧石垣検出状況(南西から)、P2検出状況(南から)、石垣検出状況(南東から)
図版3	第30次発掘調査第1調査区1 大手登城路空中写真(南から)、第1調査区遠景(南から)
図版4	第30次発掘調査第1調査区2 Tr-1全景(北東から)、Tr-1南東面土層(北西から)
図版5	第30次発掘調査第1調査区3 Tr-3 A面土層(南西から)、Tr-3全景(北西から)、Tr-6 北東面土層(南西から)
図版6	第30次発掘調査第1調査区4 Tr-5瓦検出状況(南西から)、階段検出状況(北東から)、階段検出状況2(北西から)
図版7	第30次発掘調査第1調査区5 Tr-4・6瓦廃棄状況(北西から)、Tr-3・4間瓦廃棄状況(北西から)
図版8	第30次発掘調査第1調査区6 土塀基礎状遺構(北西から)、階段状遺構(南西から)
図版9	第30次発掘調査第2調査区1 第2調査区全景(西から)、第2調査区H面(北東から)
図版10	第30次発掘調査第2調査区2 石垣修理状況A面上面(北東から)、Tr-1 C面土層(北東から)、 Tr-4 A面土層(北西から)
図版11	第30次発掘調査第2調査区3 Tr-2 A面土層(北西から)、Tr-3 A面土層(北西から)、Tr-5 A面土層(北東から)

- 図版12 第30次発掘調査第2調査区4
階段状遺構検出状況(南西から)、J面石垣検出状況(南西から)、Tr-7全景(北西から)
- 図版13 第30次発掘調査第2調査区5
E面石垣上瓦廃棄状況(北西から)、E面石垣上廃棄瓦除去後状況(北西から)
- 図版14 第30次発掘調査第3調査区1
第3調査区全景(北西より)、第3調査区全景(南東より)
- 図版15 第30次発掘調査第3調査区2
溝状遺構検出状況(北西から)、Tr-3全景(北から)
- 図版16 第30次発掘調査第3調査区3
Tr-1南東面土層(北西から)、G面石垣検出状況(南東から)、控柱根巻き検出状況(東から)
- 図版17 第30次発掘調査第3調査区4
控柱根巻き1設置状況(北東から)、控柱根巻き3設置状況(北東から)、
控柱根巻き8設置状況(南東から)
- 図版18 第30次発掘調査第4調査区1
第4調査区遠景(北西から)、第4調査区北西半遠景(東から)
- 図版19 第30次発掘調査第4調査区2
第4調査区南東半遠景(北から)、Tr-1西壁(東から)、Tr-2西壁(東から)
- 図版20 出土遺物写真1
- 図版21 出土遺物写真2



I 章 調査の経緯と目的

1 調査に至る経緯

保存整備計画の概要

鳥取市は、昭和32年の指定以来、国史跡である鳥取城跡附太閤ヶ平の保存と活用に取り組んできており、市民と専門家からなる検討委員会の検討と、パブリックコメントの実施を経て平成17年度に『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存整備基本計画』、平成18年度に『史跡鳥取城跡保存整備実施計画』を策定し、鳥取城跡の保存整備と調査研究を長期計画に基づいて推進している。

計画では、現在不明瞭になっている近世城郭部分の全体プランの顕在化を大きなテーマとしており、可能な範囲での建造物復元等も含め、江戸時代末期の姿を顕在化するための整備を段階的に進めることとしている。

整備対象の第一段階として位置づけられたのが城のメインルートにあたる「大手登城路」である。この範囲については、遺構の保存状態が比較的良好と考えられ、顕在化による効果も高いため建造物を含む復元整備を視野に入れた整備計画としている。

この大手登城路は、大きく分けて堀を渡る擬宝珠橋、正門にあたる中ノ御門、本丸にあたる三ノ丸入口にある太鼓御門で構成されており、計画ではこれらの建物を復元予定としている。平成計画に基づき順次発掘調査を実施しており、平成20年度にはそれまでの調査成果をまとめた太鼓御門跡発掘調査報告書を刊行した。また、中ノ御門跡・擬宝珠橋跡は、復元整備計画の中心をなすものとして、建造物遺構の遺存状況と、調査成果と遺構の関係の確認を目的として平成21年度より調査を実施し、4次に亘る調査成果を平成24年度に発掘調査報告書として刊行した。

大手登城路は、現在、鳥取県立鳥取西高等学校の主導線となっているが、建築後50年を経過した校舎は耐震化工事が計画されており、この際に史跡整備に必要な範囲を学校の使用範囲から除外し、大手登城路の整備を高等学校の改築と一体的に行うこととしている。復元整備範囲は、現在、通学する生徒・学校関係者が使用している状態であり、自家用車や物品搬入トラックなども通行していることから、鳥取県教育委員会及び高校と協議し、調査区を複数個所に分割して、通行に支障のない道幅を確保するとともに、学校の夏期休暇期間を中心に調査期間を設定するなどして調査を実施した。

なお、鳥取城跡内には、他にも、鳥取県立博物館が所在するほか、明治40年建築の仁風閣が現存しているが、現在の計画では、これらの併存を当面許容しつつ、史跡の価値を向上するための整備を実施することとしている。

2 調査体制

各年度の調査体制等は以下のとおりである。

調査区の所在地はいずれも鳥取市東町2丁目地内である。

(1)発掘調査

平成21年度

第22次発掘調査 太鼓御門跡周辺

期 間 平成21年9月8日～10月1日

面 積 35㎡

事務局 鳥取市教育委員会

I 章 調査の経緯と目的

教育長 中川俊隆

文化財課

課長 平川誠

課長補佐兼保存整備係長 谷岡陽一

鳥取城整備推進係

係長兼文化財専門員 佐々木孝文

主幹 松原雅彦

主事兼文化財専門員 坂田邦彦(調査担当)

主事兼文化財専門員 細田隆博(調査担当)

保存整備係

主査 津川ひとみ

主幹 森佳樹

主任 加川崇

主任 城市索

平成24年度

第30次発掘調査

期 間 平成24年 6月28日～10月 1日

面 積 425㎡

事務局 鳥取市教育委員会

教育長 中川俊隆(～10月)、木下法広(11月～)

文化財課

課長 林佳史

課長補佐兼保存整備係長 谷岡陽一

鳥取城整備推進係

係長兼文化財専門員 佐々木孝文

主任 城市索

主事兼文化財専門員 細田隆博

保存整備係

主幹 森佳樹

主幹 中野弘昭

主任兼文化財専門員 加川崇

主任兼文化財専門員 坂田邦彦(調査担当)

(2)報告書作成

平成25年度

事務局 鳥取市教育委員会

教育長 木下法広

文化財課

課長 林佳史

参事兼保存整備係長 中道秀俊

課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員 佐々木孝文

鳥取城整備推進係

主任 中島泉

主事兼文化財専門員 細田隆博

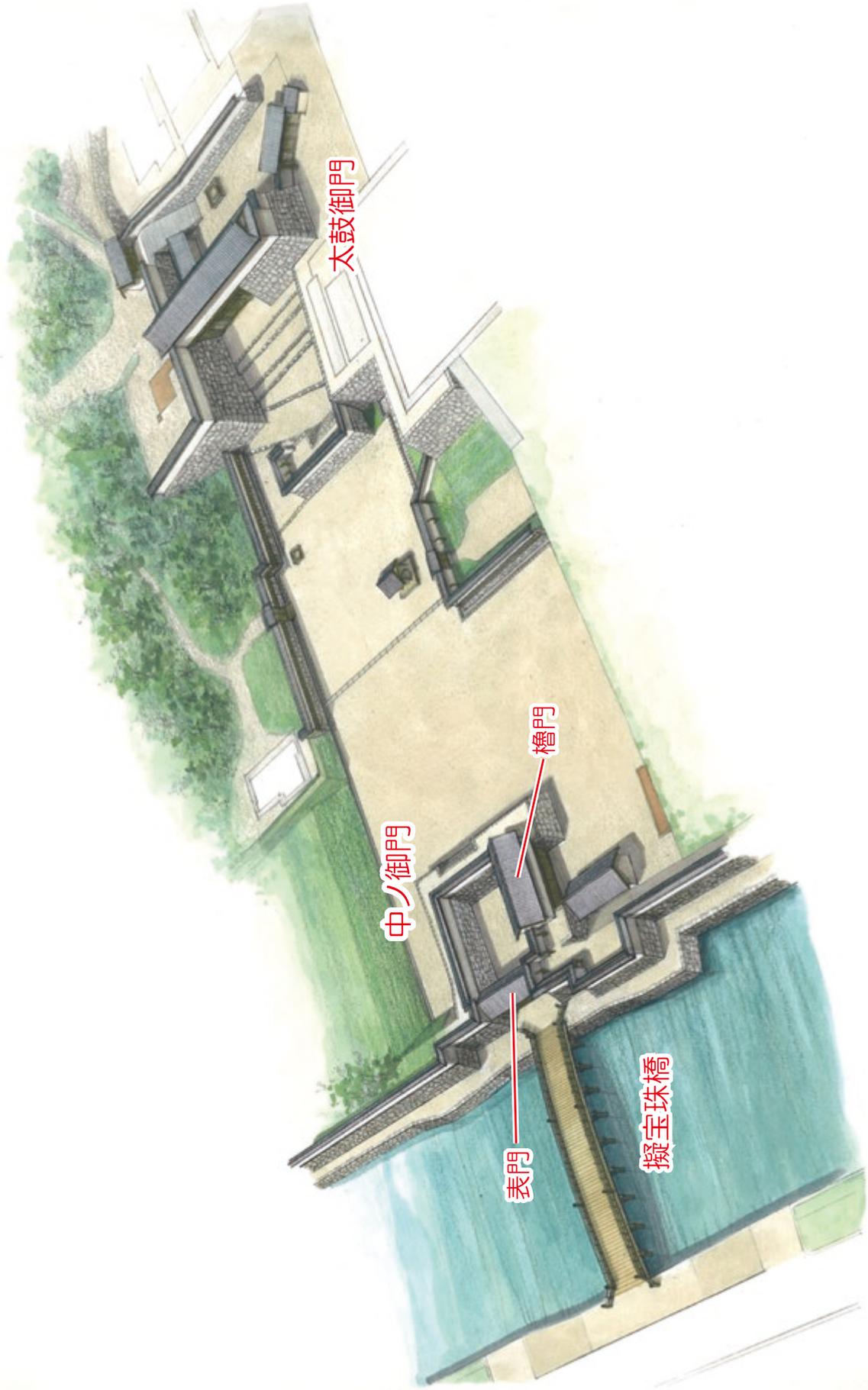
保存整備係

主幹 中野弘昭

主任兼文化財専門員 加川崇

主任兼文化財専門員 坂田邦彦(報告担当)

主事 谷岡陽一



第1図 大手登城路復元整備イメージ図

3 指定の詳細

指定名称 国指定史跡 鳥取城跡附太閤ヶ平(とっとりじょうあつけたりたいこうがなる)

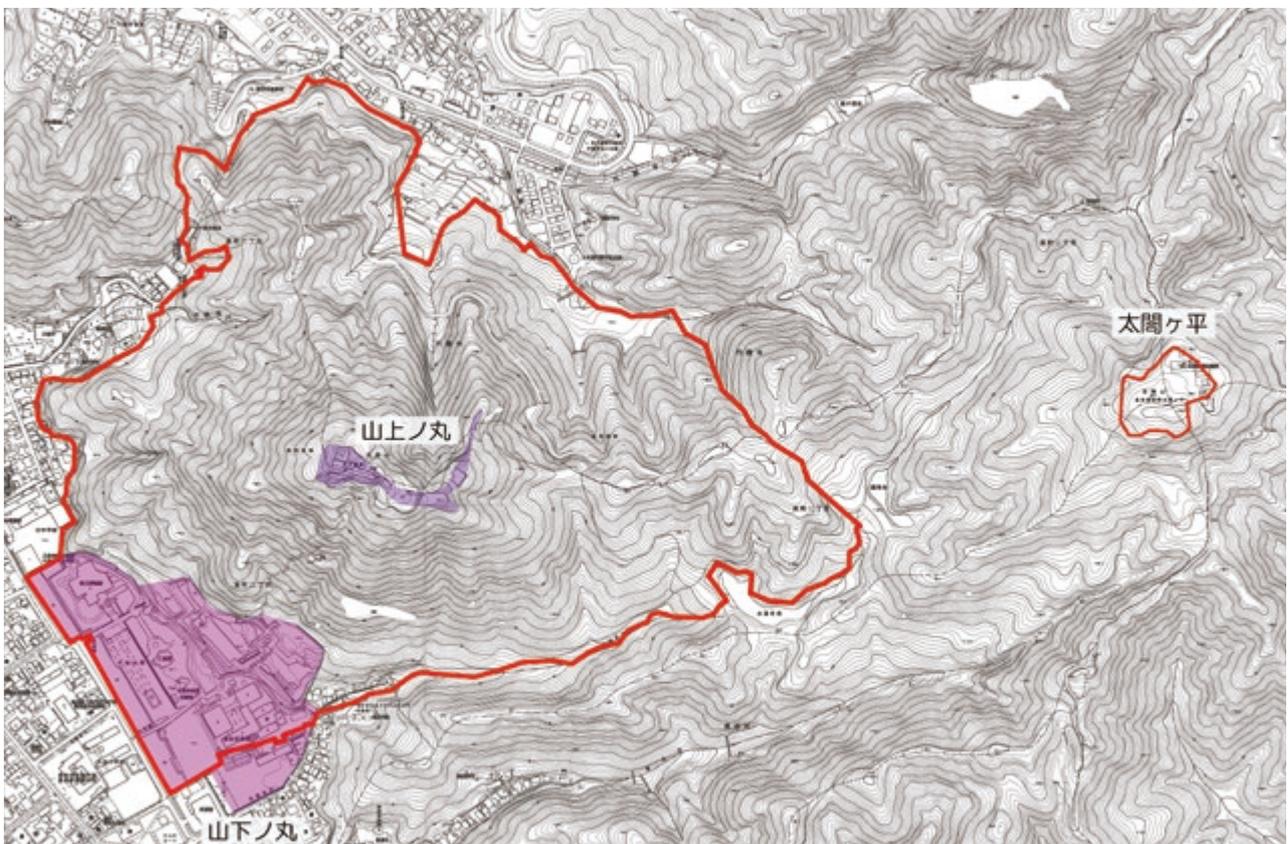
地 番 鳥取市東町2丁目、円護寺、栗谷、百谷、小西谷

指定面積 968,324㎡

- ・昭和32年12月18日 東町地内を中心とした668,663㎡が国指定史跡
久松山の南面(市街地側)と太閤ヶ平の2ヶ所を指定
- ・昭和62年8月10日 円護寺側299,611㎡が追加指定
久松山北面(円護寺側)を追加し、山全体が指定地となる

指定理由

- ・織豊時代から近世徳川時代に移行する転換期の歴史に深い関係を持つ史跡であること。
- ・城跡の構成が、山城的形式を残す山上ノ丸と中腹の砦群等の古い城跡遺構に対し、近世的城郭形式を残す山下ノ丸を中心とする新しい城跡遺構が新旧重層して併存すること等が学術的に評価されること。



第2図 鳥取城跡附太閤ヶ平指定範囲図

第二章 立地と環境

1 位置と地形

鳥取県東部に位置する鳥取市は、平成16年に実施された8町村との合併により、面積765.66km²、人口19.4万人を要する県庁所在地である。鳥取平野は、中国山地に水源を持つ千代川及びその支流によって形成された沖積平野である。鳥取城は、扇状に広がった鳥取市街地背後、平野の東北端にそびえる久松山(標高263m)に占地する。久松山は中生代末の花崗岩からなる孤立峰で、山頂は鮮新世火山岩類の玄武岩が覆う。鳥取平野は因幡国に所在し、山陰諸国を貫く東西交通と、山陽地方とを結ぶ南北交通との結節点にあたる要衝の地であった。鳥取城はまさにその平野を掌握する場に立地し、山上ノ丸からは、鳥取平野の大部分を見渡すことができ、千代川の河口や西の伯耆、東の但馬へ続く海岸線なども望むことができる。鳥取城を扇の要として鳥取市街地が広がるのも、その起源が鳥取城下町であることを如実に示している。

久松山は南西面とその背面が急峻な地形である。一方、北西は標高100m付近で尾根伝いに丸山方面の山塊と繋がり、他方、東側に横たわる山塊とは標高150m付近で尾根伝いに繋がっている。久松山麓の西面はかつて日本海へと注ぐ袋川の旧河川が蛇行して、低湿地を形成していたと言われ、鳥取の城下町は惣構の開削などで低湿地帯を克服しながら形成された。また、古代の中心地であった国府周辺へと続く古道が山麓を通過していたと考えられ、久松山麓は古くから河川交通と陸上交通の要衝であったと言われている。

2 歴史

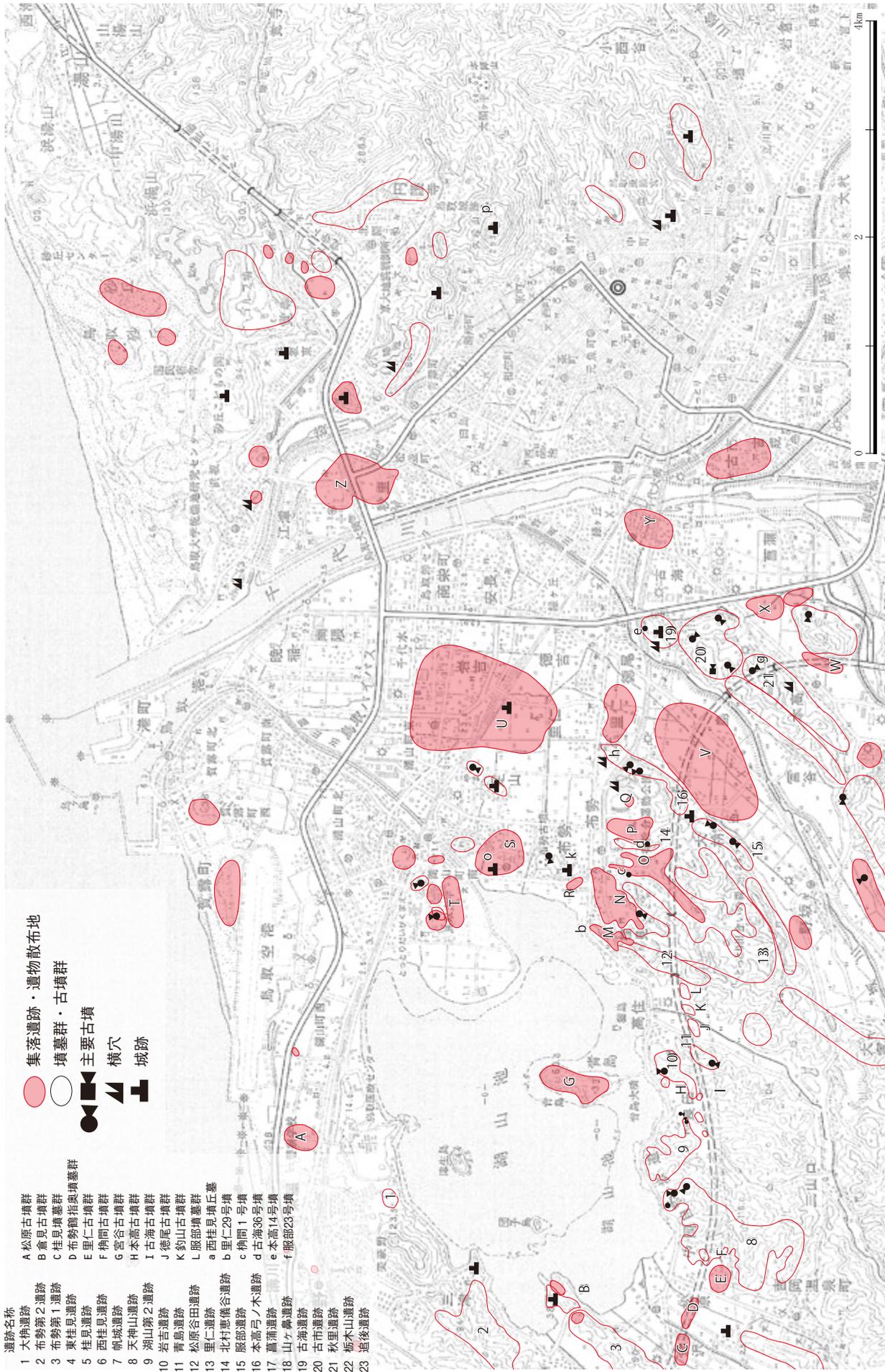
鳥取城の起源は天文年間(16世紀中頃)に遡る。鳥取城の所在する因幡は、西の伯耆、東の但馬と共に南北朝期以来、代々山名一族が守護職を継承してきた。しかし、天文12年(1543)頃までには伯耆が出雲尼子氏の傘下となり、尼子氏を背景に自国支配の強化を狙う因幡守護山名久通もまたその支配下となった。これに対し、但馬山名守護山名祐豊は惣領家として先祖伝来の領国支配の回復などを目指し、山名久通と因幡の支配権を巡り鋭く対立。この過程で但馬山名氏の戦略的拠点として鳥取城は誕生したと考えられている。

まもなく因幡山名氏は滅亡し、以後因幡国内は、かつて因幡山名氏の本拠であった湖山池湖畔の布施天神山城を中心に但馬山名氏による支配が進められる。一方、鳥取城は天神山城の山城としての役割を負った。ところが、これを守る武田高信が永禄6年(1563)に主家山名氏に対して反旗を翻す。これに対し、因幡守護山名豊国は諸勢力の協力を得て武田高信を鳥取城から退け、天正元年(1573)、守護所であった天神山城から因幡の本拠を鳥取城に遷す。

同じ頃、鳥取城は中国地方を勢力圏とする毛利氏の傘下となる。一方、天下統一を目指す織田信長は覇権を因幡に接する但馬や播磨に広げつつあった。両国からの交通の結節点であり、毛利方の最前線となった鳥取城。ここに織田・毛利軍の攻防戦が開始される。

天正8年(1580)、信長に命を受けた羽柴秀吉が因幡に侵攻する。秀吉の巧みな戦略の前に山名豊国は降伏を余儀なくなされたが、秀吉が姫路に帰陣すると俄かに情勢が転化する。毛利勢力が因幡まで勢力を盛り返すと、豊国の決定を不服とする重臣たちは山名豊国を追放し、代わって迎えた毛利方の吉川経家と共に、再び秀吉に徹底抗戦し因幡国内を奪還する道を選ぶ。なお、豊国はその後、豊臣秀吉、徳川家康・秀忠のお伽衆として活躍した人物である。

天正9年(1581)、再び因幡に入った秀吉は、周辺の山々に大陣城群を巡らせ、鳥取城を嚴重に包囲し



第3図 調査区周辺遺跡分布図(S=1/50,000)

た。いわゆる兵糧攻めである。城兵はおよそ4ヶ月の間、飢餓状態で奮戦したが経家の自決をもって降伏した。この時に構築された秀吉側の陣城群は鳥取城を取り囲む山並みに今でも残る。特に本陣山(標高252m)には秀吉が在陣した太閤ヶ平を中心に“秀吉の長城”とも言うべき長大な防衛ラインがほぼ完存し、織田政権の軍事力の威力をまざまざと伝えている。

織田方に屈した鳥取城には新たに秀吉の有力家臣である宮部継潤が城代として入る。天正17年(1589)に至り豊臣秀吉から正式に知行を宛がわれ、継潤は因幡国7郡の内、4郡の5万石(但馬の一部を含む)を領し、名実ともに鳥取城主となった。宮部氏は息子・長熙の時に関ヶ原の合戦で西軍に属し改易となったため、その業績は不明な部分が多いが、宮部継潤父子は因幡における織豊政権の最重要拠点として、鳥取城を大改築したと思われる。それまでの鳥取城は自然地形利用した土造りの中世城郭であった。一方、宮部氏は装いも新たに石垣などを構築し、織豊系城郭としての鳥取城を築いたと考えられる。

慶長5年(1600)の関ヶ原合戦で徳川政権は樹立されたが、大坂城には豊臣家が健在で豊臣恩顧の大名に対する支配強化のため、徳川家康は厚遇する池田家を西国境に配置したとも言われる。この時、姫路城に池田輝政、岡山城に忠継(輝政の次男)が入り、鳥取城には長吉(輝政の弟)が因幡7郡の内4郡6万石の知行を得て入城した。ここに西国境の瀬戸内から日本海を縦断する徳川政権の拠点城郭網が構築され、鳥取城はその一翼を担った。なお、江戸時代の地誌を根拠に、これまで鳥取城の現存遺構のほとんどは池田長吉が構築したと信じられてきた。しかし、根拠となる『因幡民談記』(17世紀後半成立)には、局所的な普請の様子が詳述してあるが、現存遺構のほとんどを池田長吉が構築したという記載はない。

元和元年(1615)、大坂夏の陣で豊臣家が滅亡すると、池田家への処遇は転機を迎えた。元和3年、姫路城主池田光政は所領減封の上、因幡伯耆32万石の領主として鳥取へ転封となり、池田家が構築した姫路城は譜代大名のものとなる。光政入封に伴い小大名に分割統治されていた因幡と伯耆は統合され、現在の鳥取県域とほぼ同じ鳥取藩が誕生した。しかし、鳥取城は宮部時代から5、6万石規模のものに過ぎず手狭であったため、光政は城の大拡張を行なう。『因幡国鳥取絵図』(岡山大学附属図書館蔵)には、当時、最新鋭であった層塔型と想定される白亜の三階櫓が描かれるなどしており、二ノ丸や天球丸といった現存する遺構の大部分は、この時に構築された蓋然性が極めて高い。また、光政は城下町も拡張し、武家地には上水道を完備した。その町割や延長1.6kmの惣構、上水道の水源地はいずれも現存し、鳥取の中心市街地には光政の土木遺産が色濃く残っている。

寛永9年(1632)、岡山城主池田忠雄の死去に伴い、幼少の光仲が家督を継ぐと幕府は従兄弟の光政との国替を命じた。以後、鳥取城は光仲を藩祖とする鳥取池田家32万石12代の居城となり、国内有数の大藩の政庁として改修や拡張が繰り返された。特に幕末には、二ノ丸や三ノ丸の拡張などの大規模な増改築が行なわれ、現存する遺構の姿が整えられた。

明治維新後の鳥取城は、陸軍省の所管となり明治12年(1879)には二ノ丸三階櫓の解体をもって全建物は撤去された。昭和18年(1943)の鳥取大震災により城内の至る所で石垣崩壊という甚大な被害を受ける。その後、昭和32年(1957)には、織豊時代から近世徳川時代に移行する転換期の歴史に深い関係をもつ史跡であること、城跡の構成が前記の歴史的推移と対応し山城的型式を残す山上ノ丸と中腹の砦跡等の古い城跡遺構に対し、近世的城郭形式を残す山下ノ丸を中心とする新しい城跡遺構が新旧重層して併存することが学術的に高く評価され、鳥取城は太閤ヶ平と共に国の史跡指定を受ける。昭和34年からは、山下ノ丸を中心に鳥取大地震で崩壊した石垣の復元事業が開始され現在も実施中である。

3 構造

鳥取城は久松山の全域を城郭とし、各時期の遺構が残る。ここでは、山頂部分の山上ノ丸、山麓部分の山下ノ丸、その他山腹部分の3区に分けて概観したい。

(1)山上ノ丸

本丸を最高地として、二ノ丸、三ノ丸が階段状に配され、それを巡る帯曲輪から構成される。本丸、二ノ丸の全域、及び帯曲輪の内のうち城下側の部分(出丸)が総石垣化されている。本丸の北西角には天守台がある。宮部期の三層の天守を池田長吉が二層に改築したと考えられ、その改修痕跡と思われる石垣の継ぎ目が天守台の南西角に見られる。その後天守は元禄5年(1692)落雷により焼失し、以後再建されることは無かった。鳥取城内において最古相の石垣が本丸南面を構成するなど、山上ノ丸一帯は、宮部時代に大部分が構築され池田長吉以降において局所的な改修が行なわれたと思われる。三ノ丸から東坂へ続く尾根筋には登り石垣状の遺構も見られ、倭城との関連性が指摘されている。

(2)山下ノ丸

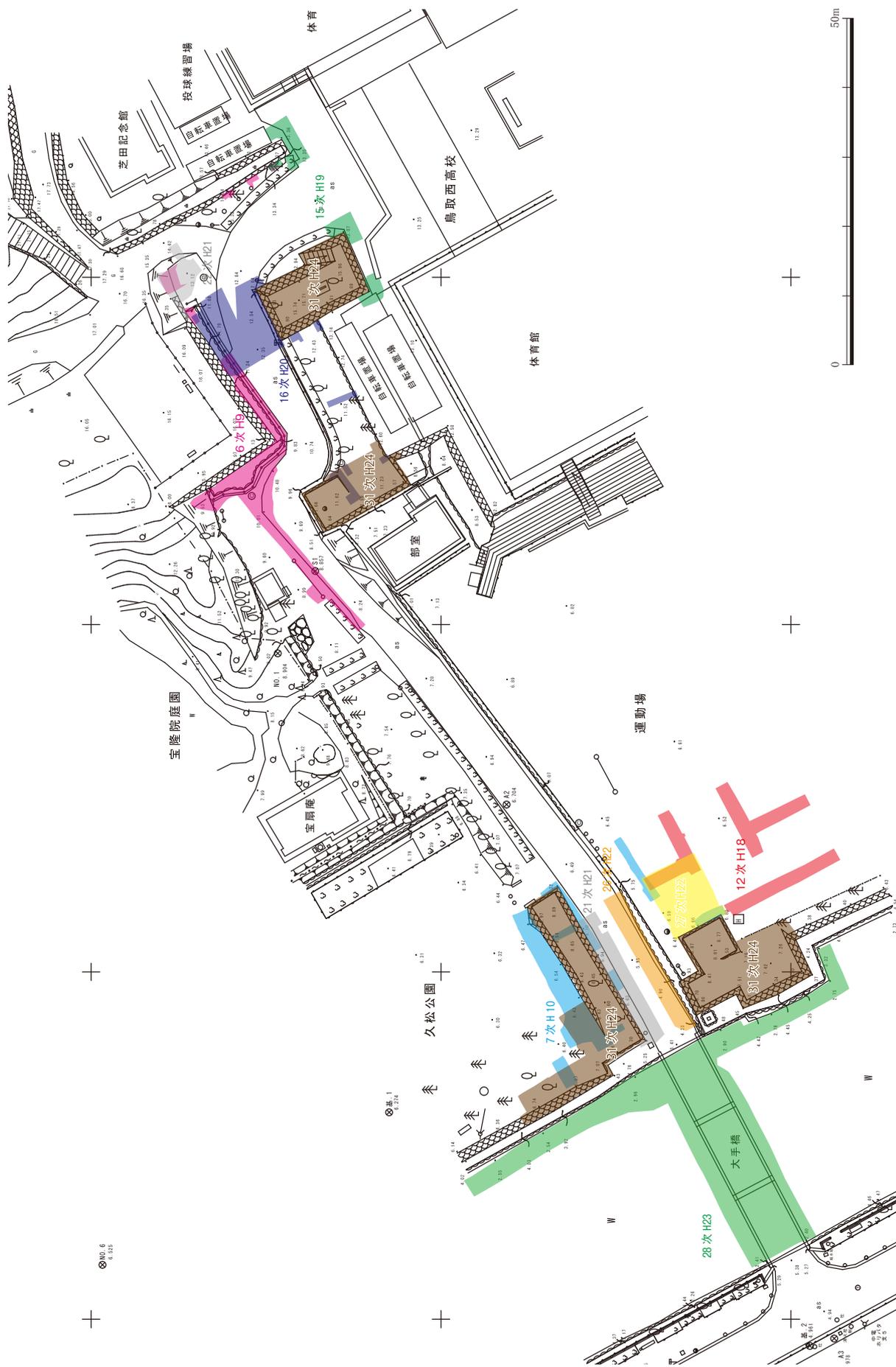
山下ノ丸は主に高石垣で構成される天球丸、二ノ丸と最大面積を有する三ノ丸などからなる。山下ノ丸は幅約30mの水堀が南西側を巡り、三つの門で外部と繋がっていた。天球丸の南東端と二ノ丸の北西端は巨大な塹堀で防御される。幕末の増改築を除くと、『因州鳥取之城之図』、『因幡国鳥取絵図』(いずれも岡山大学附属図書館蔵)などから、天球丸、二ノ丸は池田光政期を中心に構築されたと考えられる。天球丸は池田光政の伯母天球院の居所があった場所で、平成4年(1992)から続く石垣の保存修理事業で織豊期と思われる石垣が出土し、平成13年(2001)の楯蔵跡発掘調査では関ヶ原合戦時と想定できる焼土面が出土しており、天球丸周辺が織豊期の中心域であった可能性が高まっている。二ノ丸は池田光政期以降、江戸時代中期まで藩政の中心となった場所である。二ノ丸は、中腹の太鼓ヶ平から三ノ丸入口の太鼓御門に至る尾根を削平して構築したようで、二ノ丸背後には石垣石を切り出した痕跡が残る。昭和55年(1980)の石垣解体に伴って現状の高石垣の下層から、池田光政期以前の曲輪を構成した石垣が出土している。三ノ丸は江戸中期以降、藩政の中心になった場所である。幕末にも大規模な拡張がなされ、城内最大の面積を有する曲輪として整備された。現在その全てが県立高校の敷地となっている。その他、お堀端沿いの丸ノ内には、馬場や米蔵が存在した。一段高い所には、明治40年(1907)、皇太子(後の大正天皇)の行啓宿舎として旧鳥取池田家が建てた仁風閣(国重文)があり、その北西には県立博物館が立地する。いずれもかつての城内に存在し、山下ノ丸は北西―南東方向に約550m、北東―南西方向に約350mの規模を誇っていた。

(3)山腹の遺構群

久松山本体では、山頂から派生する主要な尾根部分と山上ノ丸直下の削平地群と区分できる。主要な尾根に派生する曲輪群は、鳥取城創建期から秀吉の鳥取城攻めまでの中世段階の遺構と考えられる。太鼓ヶ平から山下ノ丸へ派生する尾根は、江戸時代前期の大規模な曲輪造成によって削平されたと考えられ、西坂が旧態を良く残している。松ノ丸では石垣が見られることから織豊期になっても一部利用されたようである。山上ノ丸直下にみられる削平地群は、尾根の主要曲輪群とは独立した一群である。部分的に矢穴による半裁途中の転石が遺存しており、石取場と考えられる。

参考文献

- 大阪城天守閣2007『秀吉お伽衆―天下人をとりまく達人たち―』
- 鳥取県立博物館1989『久松山鳥取城―その歴史と遺構―』
- 鳥取県2007『鳥取県史ブックレット1 織田vs毛利―鳥取をめぐる攻防―』
- 鳥取市教育委員会1997『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平天球丸保存整備事業報告書』
- 鳥取市歴史博物館2001『大名池田家のひろがり―信長・秀吉そして徳川の時代へ―』
- 細田隆博2008『鳥取城』『決定版鳥取・岩美・八頭ふるさと大百科』



第4図 大手登城路周辺調査位置図 (S=1/800)



第5図 既往の発掘調査区位置図(S=1/2500)

表1 既往の調査

次数	調査場所	調査期間	面積 (㎡)	報告書名	発行
1	二ノ丸走櫓跡	昭和55年11月14日～12月24日	250	里仁1号墳発掘調査報告書 ・鳥取城二ノ丸走櫓跡 1981(*1)	鳥取市教育委員会
2	二ノ丸走櫓跡	昭和56年5月26日～7月27日	130	里仁1号墳発掘調査報告書 ・鳥取城二ノ丸走櫓跡 1981(*1)	鳥取市教育委員会
3	天球丸跡	平成2年5月1日～7月31日	320	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 天球丸発掘調査概報告書 1992(*2)	鳥取市教育委員会
4	天球丸跡	平成3年8月1日～12月20日	530	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 天球丸発掘調査概報告書 1992(*2)	鳥取市教育委員会
5	天球丸跡	平成7年10月1日～12月12日	164	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 天球丸保存整備事業報告書 1997	鳥取市教育委員会
6	太鼓御門跡	平成9年8月1日～10年2月28日	170	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 太鼓御門発掘調査報告書 1998	鳥取市教育委員会
7	中ノ御門跡	平成10年10月20日～11年2月28日	135	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 中ノ御門発掘調査報告書 1999	鳥取市教育委員会
8	桶蔵跡	平成12年10月2日～13年2月23日	340	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 桶蔵跡発掘調査報告書 2001	鳥取市教育委員会
9	糶蔵跡周辺試掘	平成15年7月22日～9月30日	80	「鳥取城関連遺跡」『平成15年(2003)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』 2004	鳥取市教育委員会
10	天球丸跡	平成17年6月15日～12月27日	73.6	未報告	鳥取市教育委員会
11	三ノ丸跡試掘	平成17年8月22日～10月26日	40	「鳥取城三ノ丸跡」『平成17年(2005)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』 2006	鳥取市教育委員会
12	中ノ御門周辺試掘	平成18年10月30日～19年1月29日	100.6	「鳥取城跡」『平成19年(2007)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』 2008	鳥取市教育委員会
13	天球丸跡	平成18年10月30日～11月2日	15	未報告	鳥取市教育委員会
14	天球丸跡試掘	平成19年6月28日～7月31日	9.1	未報告	鳥取市教育委員会
15	太鼓御門周辺試掘	平成19年7月21日～11月7日	53.4	「鳥取城跡」『平成19年(2007)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』 2008	鳥取市教育委員会
16	三ノ丸跡	平成20年5月7日～27日	21.4	「鳥取城跡」『平成20年(2008)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』 2009	鳥取市教育委員会
17	天球丸跡	平成20年7月16日～8月8日	10.1	未報告	鳥取市教育委員会
18	太鼓御門跡	平成20年7月20日～11月21日	110.0	『史跡鳥取城跡太鼓御門跡発掘調査報告書』 2009	鳥取市教育委員会
19	桶蔵跡	平成20年10月31日～12月2日	22.9	未報告	鳥取市教育委員会
20	糶蔵跡	平成21年4月1日～22年3月12日	2,771.7	鳥取城跡糶蔵跡(第20次調査)	財団法人鳥取市文化財団
21	中ノ御門跡	平成21年7月1日～8月31日	60.3	鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書-第21・26 ・27・28次発掘調査- 2013	鳥取市教育委員会
22	太鼓御門跡周辺	平成21年9月8日～10月1日	35.0	本報告	鳥取市教育委員会
23	天球丸跡	平成21年12月2日～12月10日	35.0	未報告	鳥取市教育委員会
24	堀端	平成22年1月25日～1月29日	10.5	「鳥取城跡」『平成22年(2010)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』 2011	鳥取市教育委員会
25	桶蔵跡周辺	平成22年2月22日～3月26日	69.2	未報告	鳥取市教育委員会
26	中ノ御門跡	平成22年7月1日～8月31日	59.5	鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書-第21・26 ・27・28次発掘調査- 2013	鳥取市教育委員会
27	中ノ御門跡	平成22年11月1日～23年2月25日	76.7	鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書-第21・26 ・27・28次発掘調査- 2013	鳥取市教育委員会
28	擬宝珠橋跡	平成23年10月5日～24年3月30日	480.0	鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書-第21・26 ・27・28次発掘調査- 2013	鳥取市教育委員会
29	天球丸跡	平成24年6月3日～25年3月15日	200.0	未報告	鳥取市教育委員会
30	①②中ノ御門跡周辺 ③登城路跡④太鼓御門跡	平成24年6月28日～10月1日	425.0	本報告	鳥取市教育委員会

*1 鳥取市教育委員会『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存修理概要報告書』1987 に再録

*2 鳥取市教育委員会『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平天球丸保存整備事業報告書』1997 に再録

4 鳥取城関連略年表

良好な立地条件を備える久松山に築かれた鳥取城の成立には諸説ある。

正確な築造年代はわからないものの砦的な中世城館が前身にあったと想定される。

- 永禄6年(1563) 布施から鳥取城に定番として入った武田高信、布施山名氏と対立
- 天正1年(1573) 山名豊国、高信を攻める。居城を布施天神山城から鳥取城へ遷す
- 天正8年(1580) 羽柴(後に豊臣)秀吉の第1次因幡進攻
城下を焼き払い、2・3町の間隔で15の付城を築いた
→ 山名豊国降伏 鳥取城は織田方へ 後に豊国は家臣により追放される
- 天正9年(1581) 石見国福光城主の吉川経家が城主として入城。秀吉の第2次因幡進攻
経家自刃、鳥取城は再び織田方へ → 宮部継潤が城主となる
- 慶長5年(1600) 関ヶ原の戦いで西軍についた宮部氏は没落、城下焼払い
- 慶長6年(1601) 池田長吉が入城し、翌年から城の大改修を行う
→ 城の骨格部分が造られる
- 元和3年(1617) 池田光政が姫路より移封。城廓の整備が進む
→ 幕末へと続く城の基本形態が整う
- 寛永3年(1632) 光政、岡山へ移封となり、代わりに岡山の池田光仲が藩主となる
→ 鳥取池田家の成立
- 元禄5年(1692) 山上ノ丸の天守閣、落雷により焼失。以後再建されず
- 享保元年(1716) 三代藩主池田吉泰、三ノ丸を中心に大改修
- 享保5年(1720) 石黒火事で鳥取城延焼
→ 楯蔵、いくつかの門、山上の櫓を除き城の大部分は焼失。中ノ御門表門は同年中に再建
- 享保8年(1723) 擬宝珠橋再建
- 享保20年(1735) 三階櫓完成
- 享保13年(1728) 二ノ丸三階櫓再建
- 文政8年(1825) 幕府より葵文の使用が許可される
- 弘化3年(1846) 二ノ丸御殿再建
- 弘化4年(1847) 二ノ丸西側を拡張
- 嘉永2年(1849) 二ノ丸拡張完成
- 万延元年(1860) 三ノ丸内を改修、東側へ拡張、登城路を付け替え
→ 鳥取城としての最終形態となる
- 明治1年(1869) 版籍奉還、三ノ丸走櫓が政庁となる
- 明治8年(1875) 陸軍により多くの建物が解体される
- 明治12年(1879) この頃までにすべての建物解体される
- 明治22年(1889) 尋常中学校移転開学
- 明治半～後半 柵形石垣解体、擬宝珠橋は近世アーチ橋から近代フラット橋へ変更
- 昭和18年(1943) 鳥取大地震 → 各所で石垣崩落
- 昭和32年(1957) 国史跡指定
- 昭和62年(1987) 追加指定

Ⅲ章 調査の成果

Ⅲ - 1 第22次発掘調査

1 調査の概要

調査期間 平成21年(2009)9月8日～10月1日

調査面積 35.0㎡

第22次調査は、平成21年度に発掘調査を実施した。昨年度報告(註1)の第21次調査「中ノ御門跡」に引き続き実施した発掘調査であり、太鼓御門裏側の施設や登城路の状況を確認する目的で設定した調査区である。前年度に調査を行った太鼓御門跡(註2)に隣接する位置にある。周辺での調査例には、調査区の東側の石垣裾部で行った第16次調査があり、石垣の積み替え跡などが見つかった。また、同じ石垣沿いは平成9年に第6次調査(註4)が実施されており、その際、本調査区内の北西側に築かれた石垣沿いにも2箇所にてレンチが設定され、当時土中に埋没していた現石垣を検出している。

調査区は本丸である三ノ丸入口に当たる太鼓御門を抜けた、正面左手側にあり通門者が右折する地点にあたる。大手登城路は内堀に掛かる大手橋である擬宝珠橋、大手門である中ノ御門を抜け、坂道を登り太鼓御門を通ると三ノ丸へ至る道筋であるが、登城路はこの先でルートを変えることとなる。元来城の奥へ進むには、太鼓御門を抜けた後、右折し三ノ丸手前を進んでいたが、幕末期の万延元年(1860)に三ノ丸拡張によってルートが変更され、左折し調査区北東沿いを登る形となった。現在、コンクリートのスロープとなっているが、下部には緑色凝灰岩製の階段が築かれており、幕末の短期間については、登城者は調査区を眼下にして登城路を進んでいた。

調査区周辺は、現在鳥取県立鳥取西高等学校へのアクセス道となっており、アスファルト舗装となっている。調査区の設定については、この道路部分とカーブミラーを避ける形で行った。規模は北-東方向に6m、北-西方向に5mで三角形状を呈し、北東側の階段へ向け長さ2.5mほど拡張した。周辺の現状は、鳥取城跡石垣修理工事に伴う、資材の搬入場所と重機の進入口となっており、調査範囲および旧階段には遺構保護のための土砂と碎石が厚く敷かれている。また、修理工事以前は長い間、植栽や高木があったことが分かっている。北西側に築かれた石垣は、昭和18年の鳥取大震災時、大規模に崩壊しており、平成の修理で復元されたものである。

註1 2013 鳥取市教育委員会『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書』-第21・26・27・28次発掘調査-

註2 2009 鳥取市教育委員会『史跡鳥取城跡太鼓御門跡発掘調査報告書』

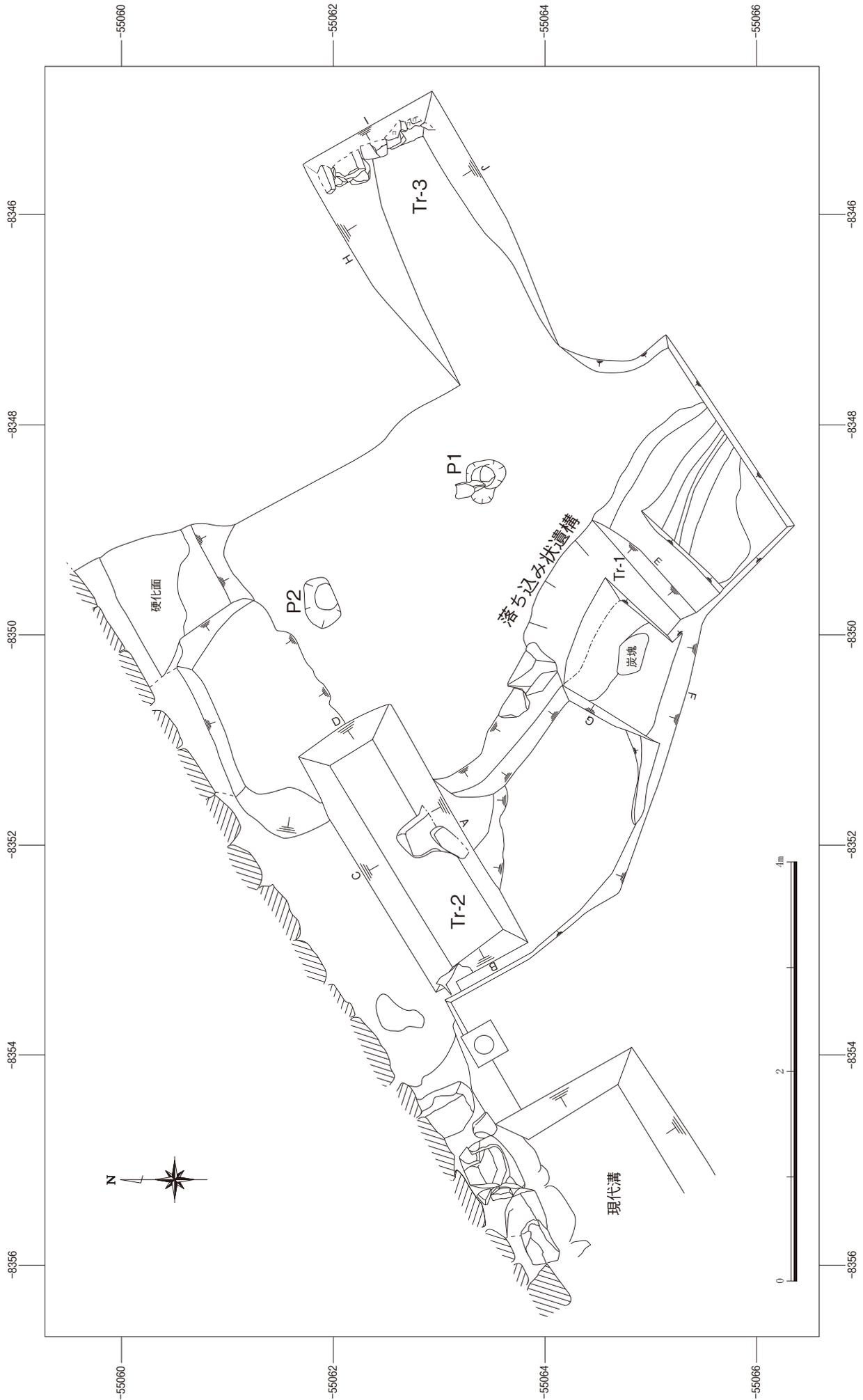
註3 2009 鳥取市教育委員会『平成20(2008)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』

註4 1998 鳥取市教育委員会『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平太鼓御門発掘調査報告書』

2 調査の結果

調査に際しては、まず厚く敷かれた碎石の除去を行った。碎石上面の標高は13.0～13.2m付近であり、その厚さは30cm程度であった。また、石垣の前面については傾斜をつけた土砂で覆われており、併せてこれらも除去し、石垣全体を顕わにした。

灰白色の碎石を除去すると、下層には褐色を帯びた碎石層がわずかに見られる。この上下2つの碎石層は先述のとおり、近代の層である。これらの層を除去すると土の状況は一変し、黄橙色系の硬化面が調査区全面に広がる。地山の上面であるこの硬化面は、樹根とみられる攪乱の影響で全体的に凹凸がみ



第6図 第22次調査区平面図(S=1/50)

られるものの同一の面が続き、この面を掘り込む形でいくつかの遺構が存在していたことから、遺構面として捉えた。

(1)遺構面

遺構面の大部分は黄橙色系の色調を呈す砂礫層である。灰白色の軟岩を多く含み、一見して地山と想定される土質である。Tr-1の調査の結果、この土は地山であることが確認された。

また、Tr-1と石垣との間、地山の上面には、地山由来の土である厚さ7cm程度の硬化層がみられ、旧地盤面であったとみられる。地山が剥き出しになる部分は、直上まで碎石や樹根の影響により、本来の生活面は削平されているとみられるが、広義の遺構面として捉えた。

(2)落ち込み状遺構[第6図 図版1]

調査区の北西側にみられる落ち込み状の遺構で、現状で幅1.5m、長さ6mを測る。現在のアスファルト道路に並行するように緩やかに弧を描いており、内部は何層もの重なり合う土で埋まっている。この掘り込み状遺構は、さらに調査区外へ続いており、大規模な遺構であることが推定される。

遺構内には褐色系の土がみられるが、いずれの層にも灰白色系の軟岩が多く含まれており、色調こそ違いがあるものの、地山由来の土であると考えられる。

調査区南側に顕著であるが、これらの土は平面上、掘り込み肩部に並行するように縞状に連続する。土質、色調も異なるこれら縞状の層は、トレンチ調査の結果、落ち込みの傾斜に沿って敷かれた整地層の端部が現れたものであることがわかった。

(3)第1トレンチ(Tr-1)[第7図 図版1]

調査区の南側、落ち込み状遺構の状況を確認するために設定した1.4m四方程度のトレンチである。

E面は比較的良好な状況で遺構が残存しているが、F・G面については、地表面付近を中心に樹根によるとみられる攪乱が広範囲に及んでおり、遺構の埋土は3層以下である。

落ち込みの傾斜角はE面側で35°と緩やかであるのに対し、G面は樹根による攪乱があるが65°以上とやや急である。傾斜は15層のある標高11.68mまで確認したが、南西側の調査区外へと傾斜をつけながら下降するとみられる。

1・2層は樹根による攪乱土である。G面の空白部分については、樹根片を取り除いたためである。3層以下は遺構埋土であり、Tr-1同様、地山由来とみられる灰白色の軟岩を多く含む土が主体となって構成された層である。埋土のうち大半が所謂整地土といわれるブロック状に混ざり合う硬く締まった土質であり、傾斜に沿って重なった層は、下層へ行くにつれ色調が濃くなる。

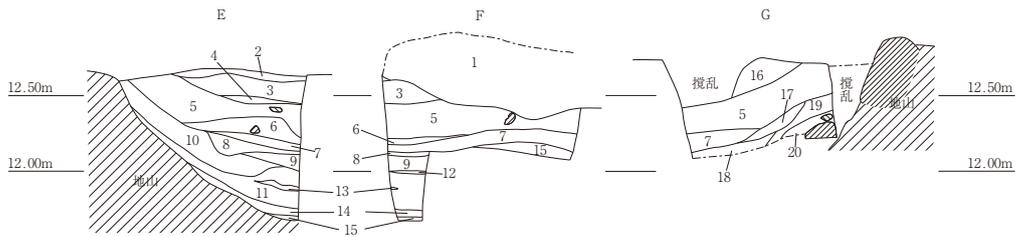
3層と16層は同一とみられ黄褐色系を呈す。5層もほぼ同質であるが、よりブロック状に混ざり合っ厚く敷かれている。これらの間にわずかにみられる4層までを含めて非常に良く似た土質である。地山由来の土が大半である中、標高12.2m付近に広がる7層はシルト状の細砂層であり、他層とは異なる。

9層以下14層までは色調が暗くなり、層中に炭片を含むようになる。9・10層には1cm程度の炭片を多く確認した。11層は下層になるにつれ厚くなり、内部に12・13層のような炭片の塊がみられる。続く14層は硬化しており、それ自体が被熱した焼土層のような状況を呈している。さらにその下、一番下層にある15層は土質が変わり、砂層となる。

17～19層は黄色系の色調を呈しており、8・9層に、20層については11層に対応するとみられる。

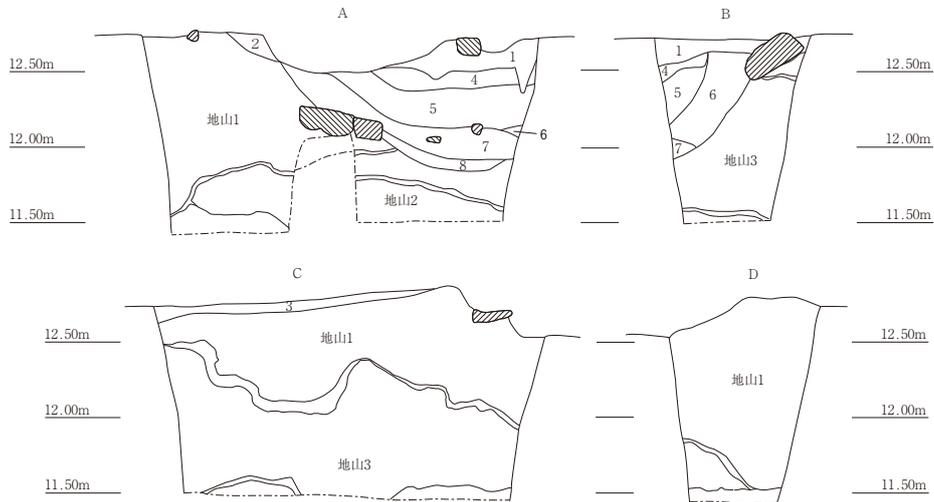
遺物は、7層より土器4が、11層から瓦1が出土した。

第1トレンチ(Tr-1)



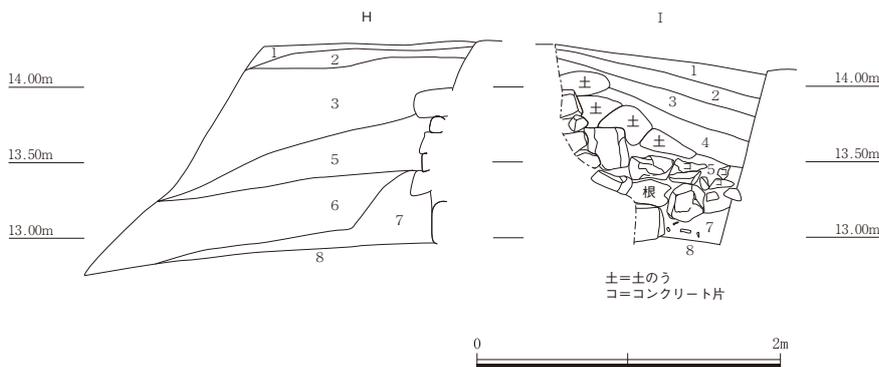
- 地山 黄橙色砂礫土 10YR7/8(灰白色礫(風化した軟岩)を多く含)
1. 黒褐色土 10YR3/1 (樹根による攪乱)
 2. 褐灰色土 10YR6/1 (工事土)
 3. にぶい黄褐色土 10YR5/4
 4. にぶい黄褐色砂 10YR7/1
 5. 明黄褐色土 10YR6/5(黄褐色土ブロックを多く含む、埋めた土)
 6. にぶい黄褐色土 10YR4/3
 7. 灰黄褐色細砂 10YR6/2
 8. 明黄褐色土 10YR6/8(土はブロック状に混ざる)
 9. 暗褐色土 10YR3/3(Φ1cmの炭片を多く含)
 10. 褐灰色土 10YR4/1(Φ1cmの炭片をやや含)
 11. 黒褐色土 10YR3/1(炭片を多く含)
 12. 黒色炭 10YR2/1(11層内に含まれる炭片の1つ)
 13. 黒色炭 10YR2/1(11層内に含まれる炭片の1つ)
 14. 暗褐色土 10YR3/3(炭片を多く含、焼けたような土)
 15. にぶい黄褐色砂 10YR6/4
 16. 暗褐色土 10YR3/4(Φ1cm白色礫を多く含、3層と同一か)
 17. 明黄褐色土 10YR6/6
 18. 明黄褐色土 2.5Y6/6(ブロック状、17層と同一か)
 19. 黄褐色土 10YR5/6(ブロック状)
 20. 褐灰色土 10YR5/1
 21. 黄橙色砂礫(地山) 10YR7/8

第2トレンチ(Tr-2)



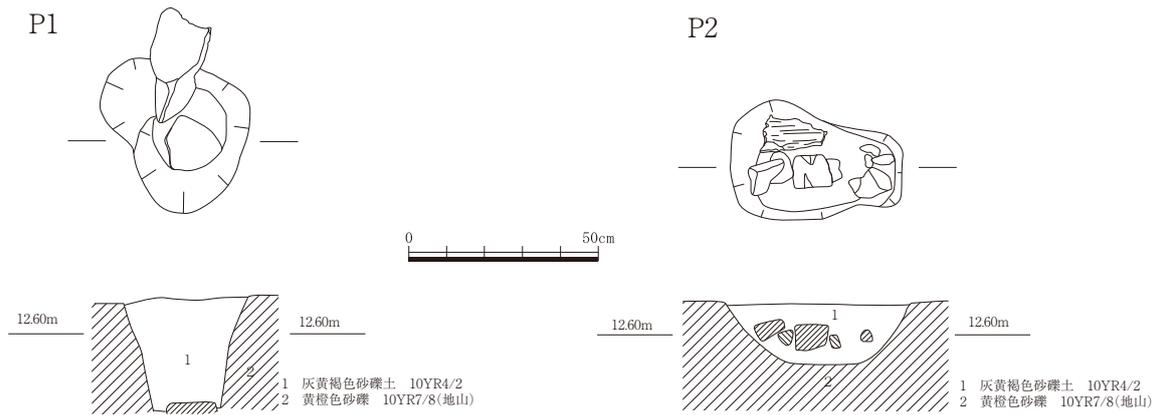
1. 黒褐色土 10YR3/3(樹根による攪乱)
 2. 灰黄褐色土 10YR5/3(灰白色軟岩(地山由来)を多く含)
 3. にぶい黄褐色土 10YR5/3(灰白色ブロックを多く含、旧地盤面と考えられる)
 4. 明黄褐色土 10YR6/8(黄褐色土ブロックを多く含(Tr1.5層と対応))
 5. 灰黄褐色土 10YR6/2
 6. にぶい黄褐色土 10YR5/3(灰白色軟岩ブロック(地山由来)を多く含)
 7. にぶい黄褐色砂土 10YR6/3
 8. にぶい黄褐色砂土 10YR6/4(混ざりの少ない)
- 地山1 黄橙色砂礫 10YR8/8(灰白色軟岩を多く含)
 地山2 黄褐色砂礫 7.5YR8/8(ブロック少)
 地山3 黄褐色砂礫 7.5YR7/8

第3トレンチ(Tr-3)



1. 碎石(工事盛土)
2. 黄褐色粘質土 7.5YR8/8(工事盛土)
3. 暗褐色粘質土 10YR3/3(工事盛土)
4. にぶい黄色砂質土 2.5Y6/4(工事盛土)
5. 明黄褐色砂土 2.5Y7/6(工事盛土)
6. 暗灰黄粘土 2.5Y4/2(工事盛土、栗石を多数含む)
7. にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4(瓦片多く含む)
8. 黄褐色砂礫 10YR7/8(地山)

第7図 第22次調査トレンチ土層図(S=1/50)



第8図 第22次調査ピット状遺構実測図(S=1/20)

(4)第2トレンチ(Tr-2)[第7図 図版1]

調査区の北西側、地山の状況を確認する目的で石垣と並行方向に設定した幅1m、長さ2.6mのトレンチである。

A面とB面では落ち込み状遺構を確認した。落ち込みは40～50°の傾斜を持ち標高11.84m付近で一応の底部に達するが、調査区外へ向かいさらに下降するようである。

旧地盤面と考えられる3層はC面側にわずかに残存する。地山由来の土が若干濁った色調で、にぶい黄褐色を呈す。上面の標高は大鼓御門(南西)側で12.7m、久松山(北東)側で12.9mと、わずかな傾斜を持つ。A・B面に亘る1層は樹根による攪乱層、2層も後世の攪乱土である可能性があり、落ち込み状遺構の埋土とみられるのは4層以下である。

傾斜に沿って敷かれた各層は色調の違いこそあるが、地山由来の砂礫土が混ざり合っていてできており、土質はほぼ同じである。4～8層は特に似ており、8層については、他層より比較的混ざりの少ない土質である。

また、確認のため標高11.4m付近まで掘り下げを行った結果、上下層で若干の色調の違いが認められたが、ほぼ同質の花崗岩由来の地山であった。

(5)第3トレンチ(Tr-3)[第7図]

調査区北東側、石段の状況を確認するため設定した幅1.5m、長さ2.5mのトレンチである。石段は土の養生をした上に土盛をしており、1～6層までがその土である。

石段は樹根による攪乱や、昭和18年の地震とみられる影響で石抜けや、位置の移動がみられるものの5段程度を確認することができた。

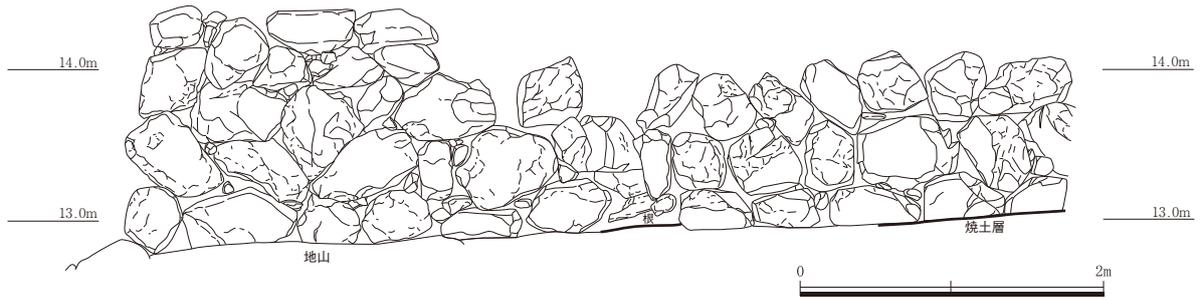
石段は標高12.9～13.0m付近にある遺構面である地山面上に、一辺20cm程度の断面方形形状の石材を用いて築かれている。石のみで築かれているのではなく、最下部には瓦片を含む7層などの土がみられることから裾部については緩やかに傾斜をつけた盛土があったとみられる。

出土遺物は3～6の瓦片である。

(6)ピット状遺構1(P1)[第8図 図版2]

調査区中央より若干東側に位置する直径40cm、深さ28cm程のピット状遺構である。平面形こそ不定形であるが、中心部分はほぼ円形の掘り方を持つ。標高12.7m付近より掘り込まれており、表面付近には20cm程度の石材がみられるが、これは地山に含まれる軟岩である。

標高12.4m付近の底面は直径15cm程度の上面が平らな礎石状の石材があるが、これも地山に含まれ



第9図 第22次調査石垣実測図(S=1/50)

る軟岩の一部であり、本体部分は土中にある。しかし、平らな表面は何らかの加工を受けて成形されているとみられ、位置と形状から柱の礎石であった可能性がある。このことから、当ピット状遺構は柱穴であり掘立式の柱が立っていたと想定される。

遺物は土器5が出土した。

(7)ピット状遺構2(P2)[第8図 図版2]

調査区中央より北側、P1の北西側1.9mほどに位置する32cm×45cmの楕円形ピット状遺構である。緩やかな傾斜で地山を掘り込んでおり、深さは20cm程度である。

遺物は、覆土中で多数の緑色凝灰岩片と木材片を確認した。岩片はすべて接合することを確認しており、一固体であったものが破碎されていることがわかる。木材片は、小片ながら面を持っているため、元は角材であったことがわかり、柱材の可能性はある。

遺物は緑色凝灰岩片と、木材片が出土した。

(8)石垣[第8図 図版2]

調査区の北西面に積まれた近代石垣である。12.9～13.1mにかけて緩やかに登る地山面上に積まれており、最も残りのよい所で高さは1.6mほどである。北東側にかけて最上段は石が抜け落ちているようである。地山面上には広範囲に焼土が残るが、性格は不明である。

絵図ではこの石垣の奥にかけて番所が描かれており(第68図)、古写真でもより背後に石垣面がみえる旧石垣は昭和18年の地震により大規模に崩落しているようであり、現在のものは戦後に積み直されたものである。

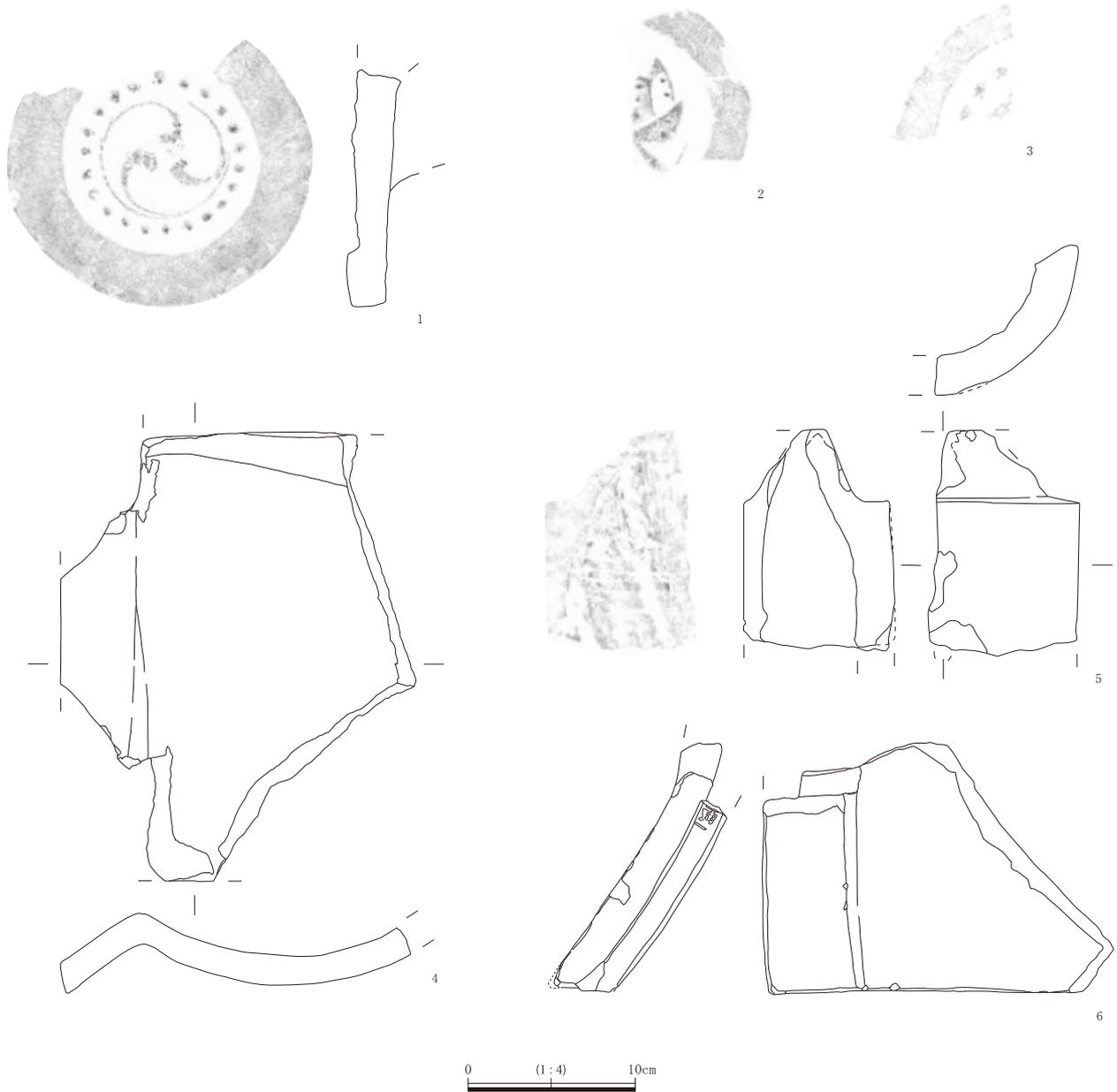
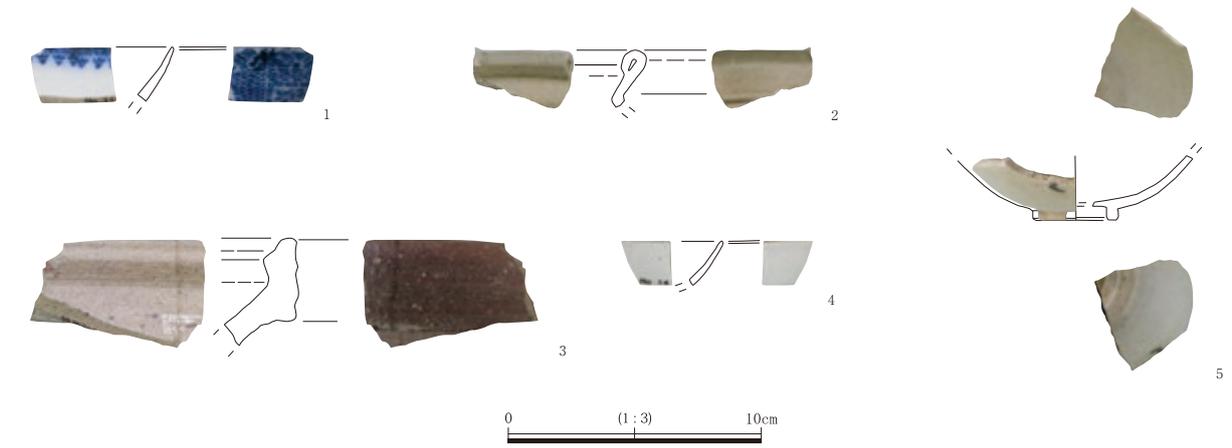
3 出土遺物

(1)土器[第10図]

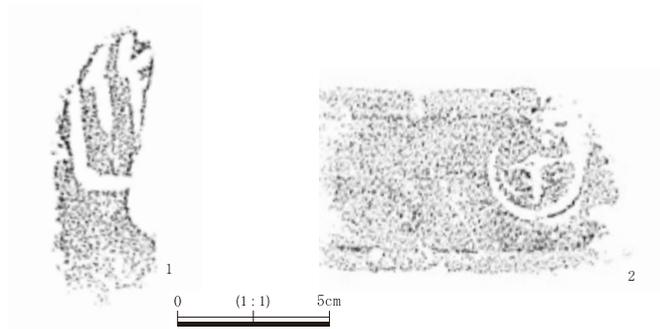
1～3は表土からの出土。1は磁器で型紙摺り。2は陶器の鍋片とみられる。3は播鉢であるが摺目はみられないことから、間隔の開く種類であろうか。4はTr-1の7層出土の白磁。5はP1内より出土した陶器碗の底部。

(2)瓦[第10・11図 図版20]

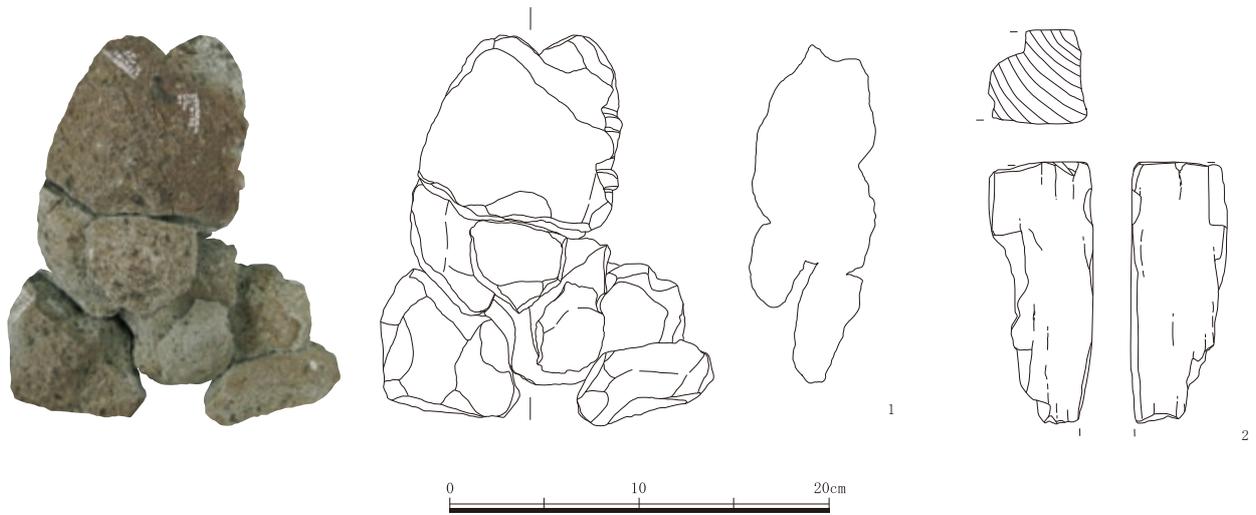
1はTr-1出土の軒丸瓦。巴文を持ち、珠文は22個を数える。2は表土出土。B類の軒丸瓦である。3～6はTr-3地山面上出土。3は巴文片。4は棧瓦で表面には釉が掛かる。5は丸瓦。6は雁振瓦であり。正面には「○寅」の刻印がみられる。刻印瓦には他にも第11図のとおり「作」や○に十などがある。



第10図 第22次調査出土遺物実測図1 (上S=1/3、下S=1/4)



第11図 第22次調査出土刻印瓦拓影(S=1/1)



第12図 第22次調査出土遺物実測図2(S=1/4)

(3)その他の遺物[第12図]

両者ともP 2よりの出土である。1はピット内に散乱していた緑色凝灰岩片であり、図のように接合した。2は柱材とみられる木材片である。残存部分の断面形から推測すると一辺は5cm程度である。

第30次発掘調査（Ⅲ - 2 ～ 5）

調査期間 平成24年(2012)6月28日～10月1日

調査面積 第1調査区 150㎡
 第2調査区 130㎡
 第3調査区 75㎡
 第4調査区 70㎡

平成24年度に実施した、第30次調査は4区の調査区に分けて発掘調査を実施した。前年度までに太鼓御門・中ノ御門・擬宝珠橋等の施設部分についての発掘調査の大部分が終了したため、周辺部分の調査を実施する運びとなった。4つの調査区のうち、第1・2調査区は対となる位置にあり、第3・4調査区はそれぞれ異なった位置にある。調査目的は第1～3調査区が塀の基礎構造、第4調査区は太鼓御門渡櫓の基礎構造の確認である。

近世当時、大手橋である擬宝珠橋を渡ると正面には中ノ御門表門が位置していた。第1・2調査区はこの門の左右部分にあたり、城解体以前の古写真をみる瓦葺の塀が写されている。第3調査区は、門を通り城内へ進み坂を上がる途中、本丸である三ノ丸入口にあたる太鼓御門の手前右手側に位置しており、近世当時は城内唯一の切石積み石垣上に塀がめぐらされていた。この塀は城解体時にも解体されず、古写真で確認できる限り大正期までは瓦葺の塀が残存していたようである。第4調査区は太鼓御門に向かって右手側に位置する。渡櫓門であった門の櫓部分が置かれており、戦時中は奉安殿が建てられていた場所である。

調査は第1調査区より着手し、第2調査区へと続いた。両調査区は門を挟み左右対となる場所であるため、並行して調査を行い、その後、第3調査区、第4調査区の順に実施した。

報告にあたっては4つの調査地点が離れており、遺跡の性格も異なることから別調査として捉え、調査区毎にまとめて報告することとする。

Ⅲ - 2 第30次発掘調査 第1調査区

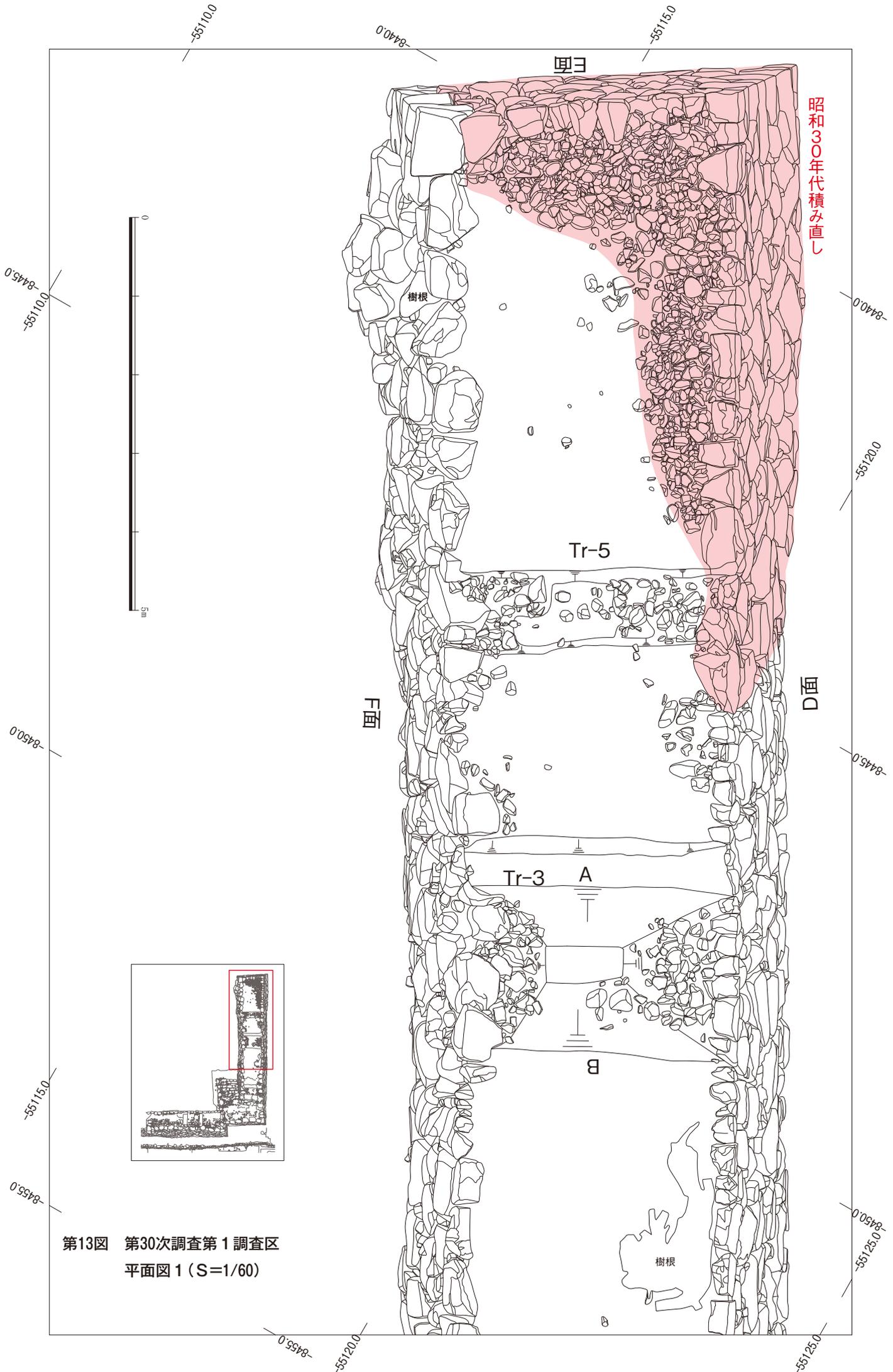
1 調査の概要

調査面積 150㎡

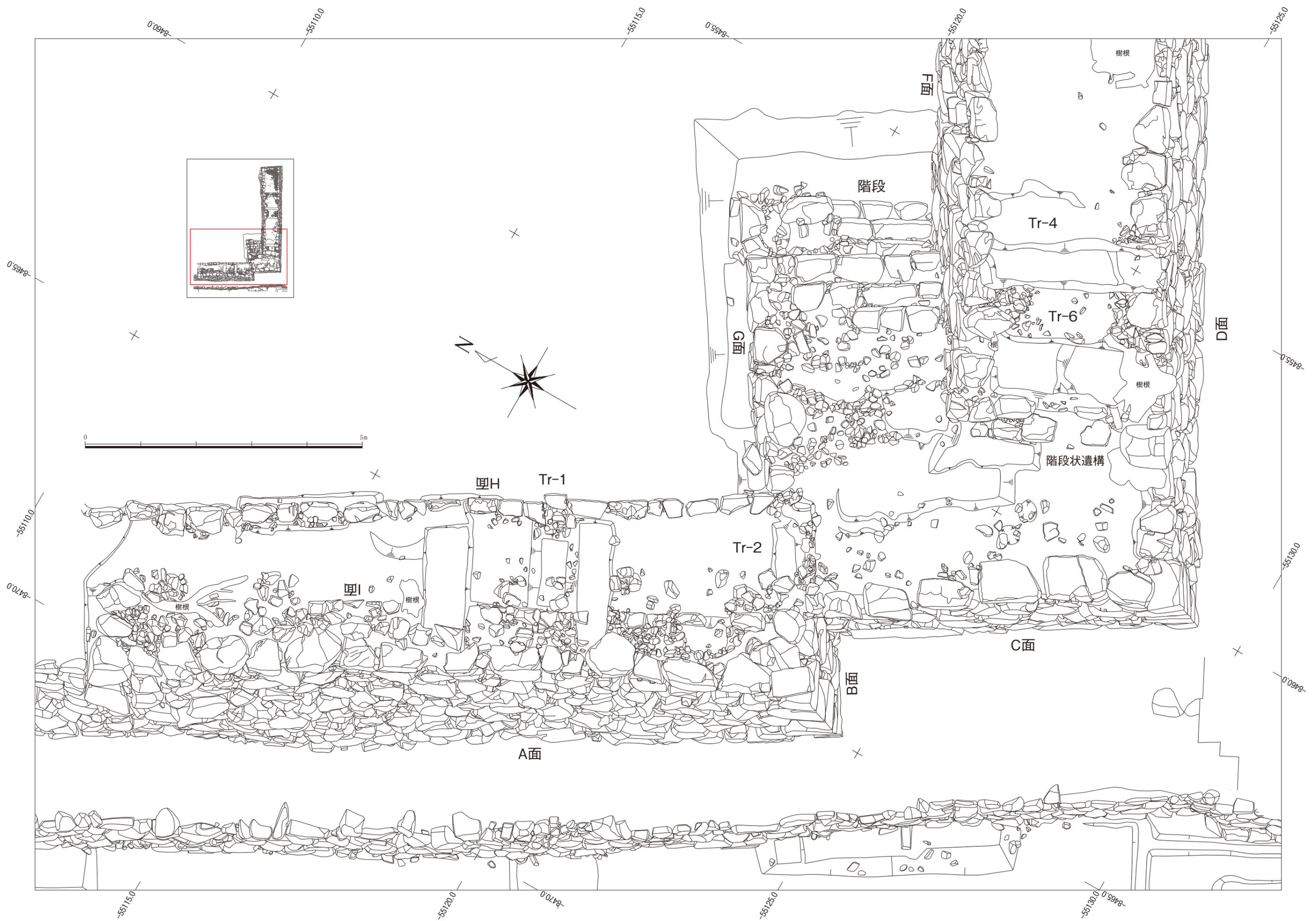
周辺状況および調査の経過

中ノ御門の左側に位置する石垣上に設定した調査区で、北西(堀沿い)側へ向かって20m、北東(道沿い)側へ向かって25mの範囲を対象とした。北東側に伸びる石垣は本来、逆L字形をした枳形石垣の一部であったが、道を横断していた石垣は明治期には取り壊されており、道路面下に根石がわずかに残るのみである。端部付近の石垣はその際、積み直しが行われているが、それらも昭和18年の鳥取大地震の際に崩壊しており、現在見ることのできる部分については、昭和30年代後半の修理時に再び積み直された(第15図赤色範囲)ものである。報告にあたり、石垣面および石列については便宜的にA～Hの番号を付けて記述する。

道路部分については、第21・26次調査によりその大部分が調査され、アスファルト下50～100cmに近世当時の遺構面があり、解体された枳形石垣などの石材で埋め立てて現在の高さまで嵩上げしていることが明らかとなった。公園側については、大正期以来、昭和50年度まで、民家や動物園などがあり、移転後は整地され現状の標高付近まで嵩上げされている。



第13図 第30次調査第1調査区
 平面図1 (S=1/60)



第14図 第30次調査第1調査区平面図2 (S=1/60)

調査では、発掘作業に先立ち、不要な石材の撤去を行った。石垣の南端からのD面、角石の上部2石をはじめとする数石は現代に積み足された石材であることが、古写真との比較にて明らかとなっており、これらを重機にて取り外した。後述するが、もともとあった石垣の段差をなくすために積まれたものであったと思われる。その他については人力にて掘削をおこなった。

石垣上には北西側にTr-1・2の2本、北東側にTr-3～6の4本、計6本のトレンチを設定し、以前の調査でその存在が明らかとなっていた階段部分については再掘削により、その姿を明らかとした。

2 調査の結果

石垣がL字形をしているため、北西(堀沿い)側と北東(道沿い)側との2方向に分けて報告を行う。平面図中にあるトレンチ(Tr-2・4・5)については図面を載せていない。Tr-2は掘削後すぐに樹根にあたり、Tr-4はTr-6と同じ堆積状況、Tr-5は平成10年度実施の発掘調査トレンチであるため報告を行わないこととした。

(1)北西側(A・B・H・I面)

石垣は角石から6.5mで折れ、堀側へ1.4m(B面)ほど張り出す。A面は下段の石垣と併せ堀沿いの面を構成しており、経年による歪みは見られるものの直線状に続く。A面の角石から13m程までの天端石は70～100cmほどと比較的大きな石が使用されている。復元整備範囲もこの区間内であり、境界付近には大型の松も存在するため、ここまでを調査の対象とした。

A面の裏(公園)側に3m控えた位置には横長の石列(H面)が並列しており、これまでの調査により、石垣の天端であることがわかっている。天端の標高はA面が6.9m前後であり、H面は6.6mと緩やかな傾斜がついている。A面下部の犬走り部分と天端との比高差は2.8～3.0mである。調査前はA・H両天端石間には土砂が堆積しており、H面については、部分的に露出する程度であった。ビニールなどのゴミが多く混ざる厚さ10cm程度のこれら堆積土を除去するとH面の全体が明らかとなった。また、A面の裏側1.1m程にはH面側に面を揃える石列であるI面も現れる。

(2)土塀基礎状遺構[第16図 図版8]

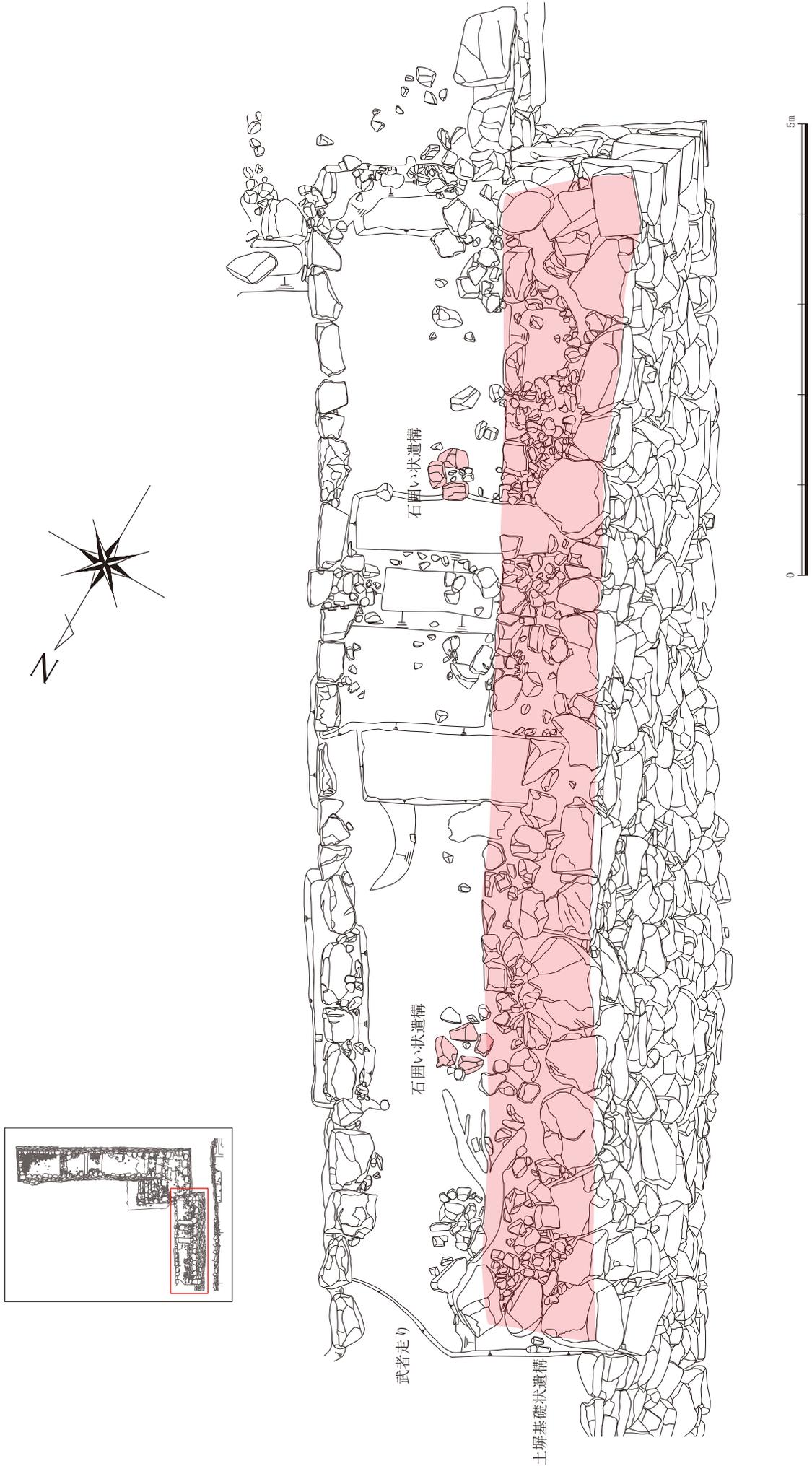
A面とI面間で構成される。I面は上面標高が6.8m前後にあり、A面よりは10数センチほど低い位置にある。横長の石材を中心にして直線状に並べており、H面側に面を揃える。北西側については大型の松の樹根により攪乱されており残存していない。A面は隅角から13mでI面側に折れる形となり、天端石についてはここを境にして堀側は小型化し、上面標高も20～30cm程低くなることから、I面もこの折れ部分で一旦途切れるものと考えられる。

I面はTr-1の調査から、表出している1石のみで構成された石列であり、下部に石積みはみられない。A-H間は20～30cm程度の栗石状の石材が全面にみられる。一見A面石垣の裏栗石にも見えるが、他地点の状況をもみても栗石は天端石の石尻より下部にあり、上部に広がる当地点は状況が異なる。H-I間の整地面からも一段高い状況はここに構造物があったと想定でき、土塀の可能性が考えられる。I面はC面の延長にありこの場合、B面上までを覆う厚さ1.1m程の土塀であったとみられる。

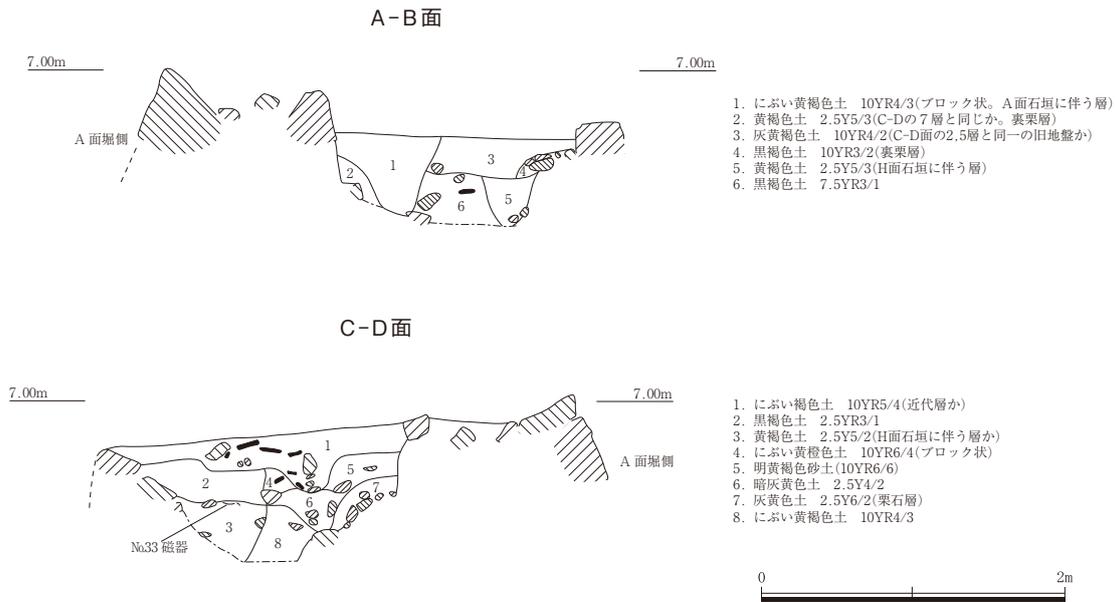
(3)武者走りおよび石囲い状遺構[第16図]

H-I面間が相当する。塀部分にあたるA-I間の裏手にあたり、幅1.7～2.0mの幅を持つ。褐色系の整地土であり上面の標高は6.5～6.7m程である。

この整地面上、B面およびA面折れ部分から測り3.2m、I面と向かい合う場所には自然石を四角く囲った石組みが2ヶ所ある。中央に20cm四方の空間があり、ここを取り囲むように四方(三方)に石を配したものである。中央が方形に空くことから本来ここには柱が立ち土塀を支えていた可能性がある。城内各所では塀支え柱の根元を加工石で囲う方法が一般的であるため、形態こそ違っても同様の役割を担っ



第16図 土塀基礎状・石圍い状遺構平面図(S=1/60)



第17図 第1調査区第1トレンチ土層図(S=1/50)

ていたとも想定される。しかしながら、厚みが1mにもなる堀に支えが必要であったのかどうかについては若干の疑問が残る。

(4)第1トレンチ(Tr-1)[第17図、図版4]

H・I面の築造状況を確認するために設定した1.0×1.7mのトレンチである。C-D面土層H・I面を覆う1層は表土であり瓦片を多く含み中央付近で落ち込み状に窪む。2・6層の上面6.6m前後が幕末期の生活面であったとみられる。3層は8層を切り込むように掘られた層であり、A-B面土層の5層と一連であるとみられるが、8層と質的にも共通点があることから時期差ではなく工程差の可能性もある。4～7層もまたA面石垣に伴う層と考えられるが整地の工程差である可能性がある。また、7層には裏栗石とみられる拳大の石を多数確認した。

一方、A-B面土層の1層はブロック状の土が混ざり合う土であり、土質の異なる1・6層を掘り込んでいることがわかる。

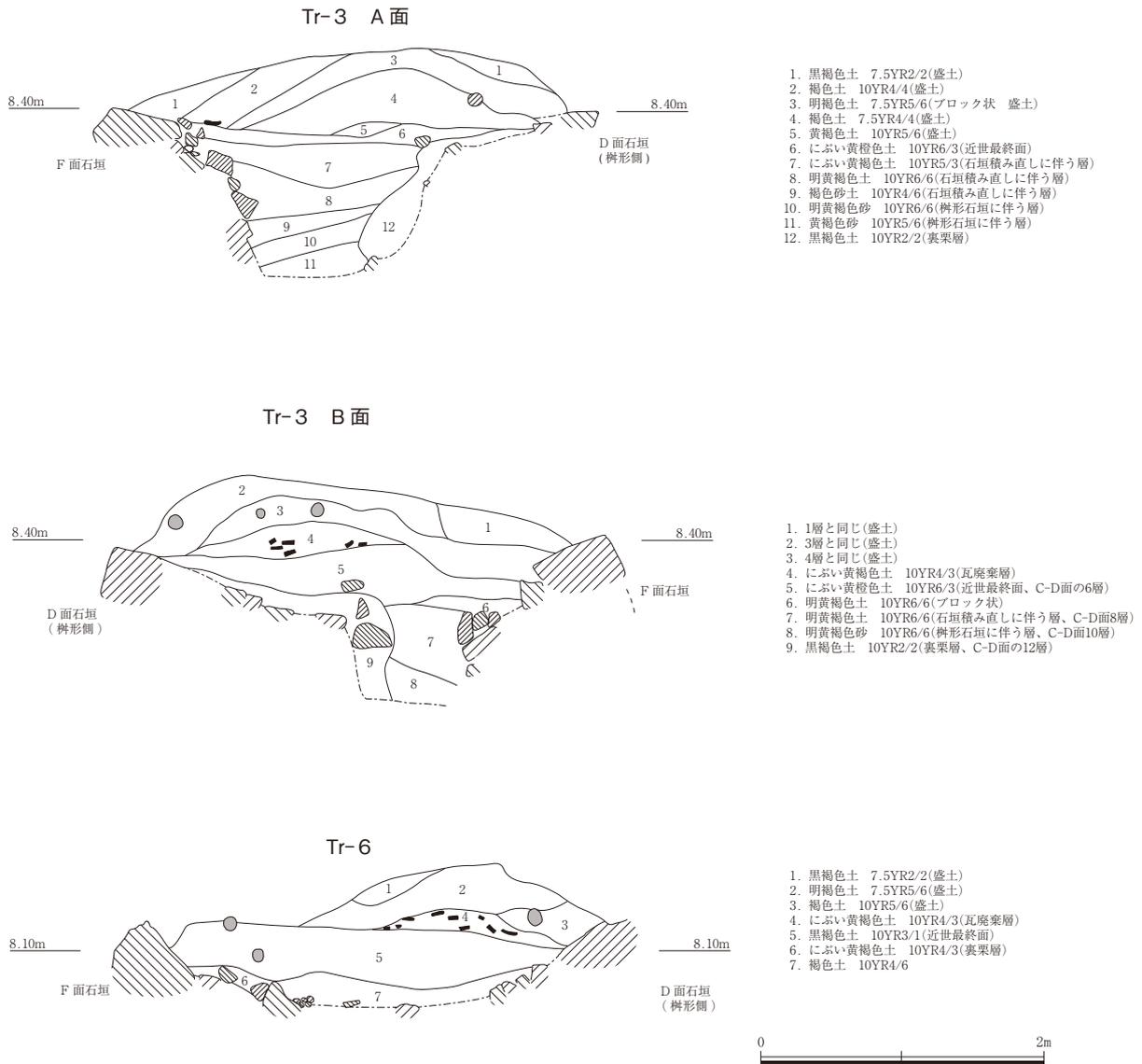
3層中の上部、標高7.32m付近には17世紀後半とみられる磁器片が2片確認しており、I面石垣はこの頃の構築あるいは修理が想定される。

(5)北東側(C・D・E・F面)

C面石垣の天端面高はBとの角部付近で7.1m程であるがD面との角部では7.6mと50cmほども高くなる。また角部付近に近づくにつれ石材も大型のものとなる。C面裏の幕末生活面の標高はB面側で7.0m、D面側は7.4mと石垣同様傾斜を持つ。先述のとおり、C-D面の角から2.5m程度には近代以降2段の石垣が積み足されており、B面付近よりこの石垣上面までスロープ状に土が盛られていた。その厚さはD面側で60cmとかなり多量の土砂であった。この付近にはもともと、明治8年頃とみられる中ノ御門周辺の施設解体の際に出たと考えられる破碎瓦が大量に廃棄された場所でもあり、盛土中に混在していた。対面する第2調査区でも同様の位置に多量の瓦の堆積がみられた。

これらの土砂を撤去すると北東側へ向かい2段の石積みを確認した。石抜けはあるものの階段であり、標高7.4mの幕末面から1段目上面が7.5m、2段目が7.8mとなりD～F面側に上がる

この階段と場所同じくして、D面石垣にも段差が付く。大きな切株があるため本来の位置から若干動いているが、石垣天端高は7.5mから8.1mへと上がる。この段差は中ノ御門を写した古写真にもしっかりと写っており(写真2)、低い部分に門屋根の端部が接する形であったとみられる。また、段差上面に



第18図 第1調査区第3・6トレンチ土層図(S=1/50)

はD面に沿いながら塀が建てられており、塀が門より高い位置にあることがわかる。

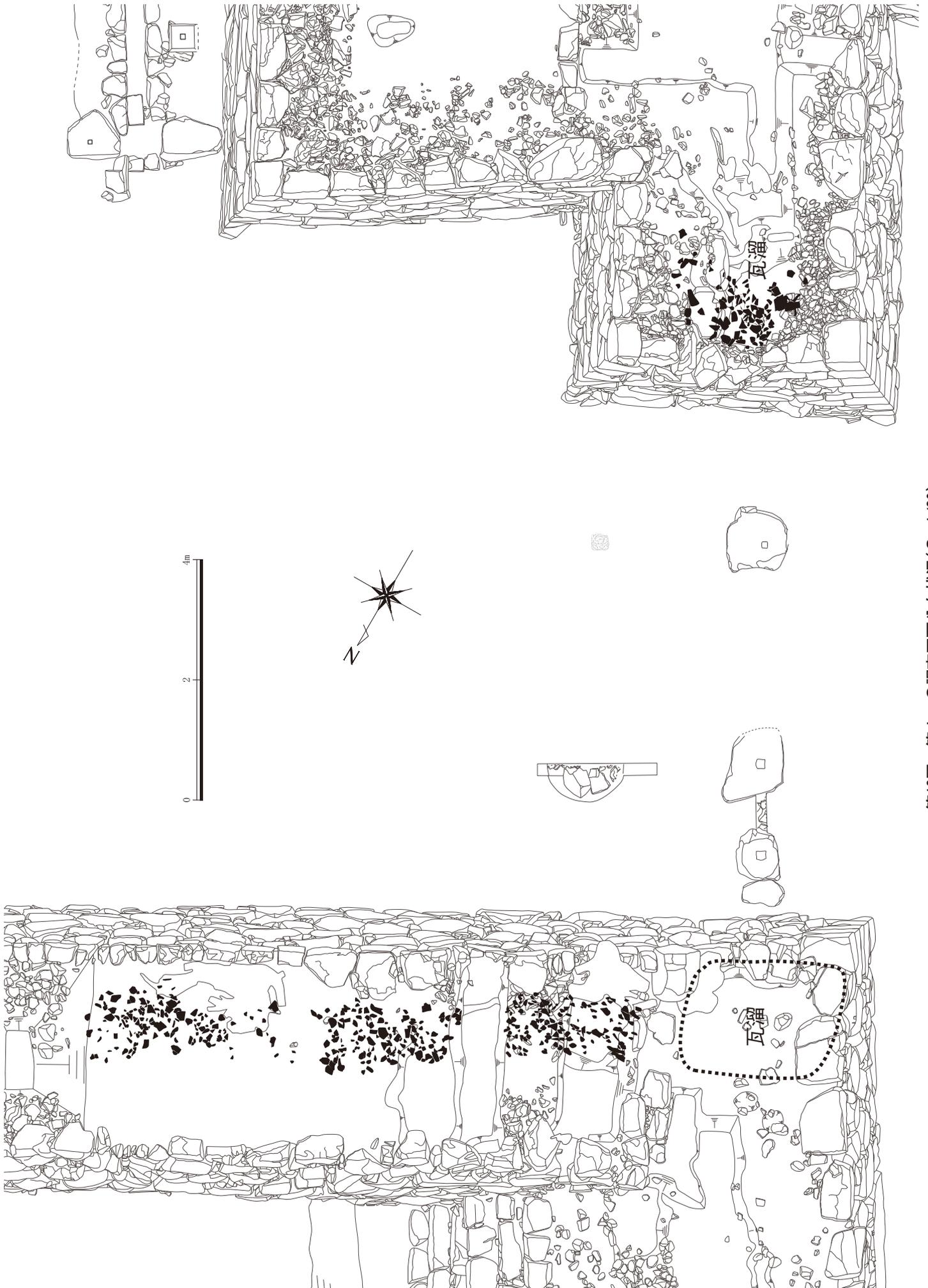
中ノ御門礎石上面高は4.8mであり、段差下との比高差は2.7mである。D面段差上の天端石のうち小型のものは近代の積み直し分であるが、堀側で8.1m、山側で8.5mと緩やかに上る。柵形内の登城路に近い勾配である。

D・E面角から6.0m程とE面(第14図赤色範囲)は昭和30年代後半の積み直しである。本来D面石垣はこの6.0m手前の地点で南東方向へ折れて柵形石垣を形成していたが近代に入り、現在のような直線の道を作るために解体され、取り外し部分を積み直したものの、昭和18年の地震でその部分のみ崩壊したことから、再積み直しが行われた箇所である。この石垣の裏側には多量の裏栗石が充填されており、平面図でL字形にみられる石群がそれである。

段差の上面からE面にかけての石垣上には近代以降の土砂がマウンド状に厚く盛られている。また、かつて大型の木が2本立っていた影響であらゆる方向へ樹根が伸びて周辺を攪乱していた。

(6)第3トレンチ(Tr-3)[第18図、図版5]

D・F面石垣の内部状況を確認するため、石垣面に直行する形で設定した幅3.5m、長さ2.0mのトレンチである。C-D側の土層断面図によると、標高8.8mの表面から下へ50cm、標高8.3m付近までみら



第19図 第1・2調査区瓦分布状況(S=1/80)

れる1～4層は近代の盛土である。石垣天端面よりも上にあり、山なりに重なった土層から確認することができる。対面A-B面土層の1～3層も同様の層である。これらを除いた標高8.3m付近に平らに敷かれたのが6層である。D・F面天端石の石尻付近より水平方向へ伸びるこの層が幕末期の生活面であったと考えられる。対面A-B面では3層に一部切られるが、5層が同一層である。この層の上面は、後述するがかなり広範囲に瓦廃棄が確認できる。C-D面では顕著でないが5層が、A-B面では4層がそれに対応する。多量の瓦片が散乱している状況は、他の調査地点でも確認してきたとおり、城解体時の廃棄層である可能性が高い。

さらに掘り下げて行くとD・F面それぞれの石垣の裏栗石が現れる。F面(公園)側は裏栗石の入っている幅が50cm程度であるがD面(榊形)側は1.4m以上にもなる。A-B面の6・7層、C-D面の7～9層はF側に伴う層であるが、A-B面の6・7層、C-D面の10～12層は色調や土質からもD面に伴う層である。後者については、D面側から傾斜をつけながらF面石垣中にある積み足しラインにつながる可能性がある。つまり、当初D面裏側は土羽であったものが、ある時期F面に石垣が積み足された結果、両面がほぼ同じ高さとなったと推定される。

(7)第6トレンチ(Tr-6)[第18図、図版5]

D・F面石垣の内部状況を確認するため、石垣面に直行する形で設定した幅3.5m、長さ1.0mのトレンチである。土層の状況はTr-3とほぼ同様であり、標高8.7mの表面から下へ40cmほどは山なりの盛土(1～3層)がみられる。その下、標高8.3mの両石垣天端と同じ高さには、幕末期生活面とみられる5層が40cm程の厚みを持って敷かれている。また5層上面には瓦廃棄層である4層が広がる。

(8)瓦廃棄層[第19図、図版7]

調査区全体で、幕末期とみられる面の上面に散見される。なかでも特徴的なのはC・D面の角部上面付近の集積(瓦溜)と、D面沿いの部分である。後者はTr-3・6の土層断面でも明らかであるが、D面の石垣から1.5mほどの範囲内に集中しており、南西側の段差上から石垣積み替えがみられるところまでの15mに亘って帯状に続く。相当量の瓦片が廃棄されており、おそらくこの場所に建っていた塀の瓦や表門瓦であったと考えられる。F面側へは及ばずD面側に集中する点が特徴的である。

(9)階段[図版6]

F面とH面との間に位置し、幅3.5m、長さ2.5m、6段で構成されており、比高差は1.6mである。平成10年度の発掘調査の際に検出されているものを今回再検出した。石垣石のような大型の石材を用いているが、4段目以外は抜石がみられ、2段目の石垣は一部前面へ倒れこんでいる。石段の正面からみて右端部はG面石垣の上に乗れ、左端部はF面に接する。

階段の下、標高4.9m付近には硬化面がみられる。部分的な確認でしかないため、明確ではないが近世前期頃の古段階の生活面であった可能性が考えられる。この面に根元を埋め込み築かれた石段はおおよそ一段約30cmの高さを持つ。

6段続きの階段に見えるが、上3段と下3段との石段には築造年代に差があるとみられる。下3段は石尻が上段の下部へ入り込んでおり、踏面の奥行が12cm程度であるのに対し、上3段の奥行は20cm以上にもなり、断面(図版6)からも傾斜が強い下段と緩い上段との違いが明らかである。上3段についてはある時期の積み直し、もしくは積み足しの可能性が考えられる。

(10)階段状遺構[図版8]

Tr-6付近にはD面とF面との間に北東側へ向かい2段の石積みを確認した。石抜けはあるものの階段とみられ、標高7.4mの幕末面から1段目上面が7.5m、2段目が7.8mとなりD～F面側に上がる。門裏側で石垣高が急に上がる形となるが、古写真(写真2)をみても塀が一段高くなっていることが分かる。また、対面の第2調査区でも同様の状況を確認した。

3 出土遺物

(1)土器[第20～23図]

1～4は現地表付近からの出土である。1は在地系の鍋。2は肥前系の碗で外面は網目文。3・4は近代の所産である。

5～13は平成10年に階段部分を調査した際の埋土中での検出である。5は関西系とみられる播鉢で、口縁部のスリメは横ナデにより消される。6の播鉢は11本1単位のスリメが間隔を空けて施される。口縁部横ナデ後に施文されており、備前系の可能性がある。7は肥前系の碗。内外面ともに白化粧の刷毛がみられる。8も肥前系で、削り出しの高台と見込みには胎土目痕が4ヶ所残る。9は皿の底部片で陶胎施陶器である。10の植木鉢の高台内には「…氏天…」の墨書が残る。11の鍋は底部に煤が付着する。12・13は肥前系磁器。13は猪口であるが復元口径6.2cmとやや小型である。

14～21は表門脇の角石上面付近に大量に廃棄された瓦群とともに出土した。14は肥前系の碗。15は壺の底部片。内面にはナデによる圏線状の凹みがみられる。16は備前系とみられる脚付鉢の底部。17・18は越前甕であり前面に鉄泥が施される。城内から出土する甕の大半は越前系である。19～21は磁器。21は色絵で鶴が描かれている。22～24も付近の石垣天端上で検出した肥前系の磁器である。22は外面の全面に波文が見られ、内面は四方襷である。

25～32は門脇、大量の瓦廃棄層から階段付近にかけての場所からの出土である。ベルト解体に伴う検出であるが、14～21と同じく一連の廃棄に伴う層であると考えられる。25は在地系の鍋。26は徳利の頸部。27は関西系とみられる播鉢、スリメは横ナデにより消される。28は箱物の蓋。29は肥前系の碗で外面には人物が描かれる。30は肥前系の猪口で復元口径8.8cmである。31は近代磁器とみられる。

33はTr-1内部、石垣の裏3層から出土した17世紀後半代の肥前系の皿である。内面に芭蕉を描き外面には圏線がみられる。石垣構築に伴う層でありこの時期の築造あるいは改修が想定される。

34～37はTr-3出土。34は土師皿で復元口径12.6cm。35は在地系の碗。36は肥前系の角鉢である。37は直径4.7cm程のつまみ状の突起上に「福」の字を描く。

38～41はTr-5出土。38は在地系の鉢。39は肥前系の磁器碗であり、内外面に色絵を施す。40は型紙摺りの小花散らし文。41は在地系の蓋、呉須は鮮やかに発色する。42はTr-6出土の重箱で外面は市松文の中に小花を描く。

43～45はTr-3とTr-4との間からの出土である。43は関西系と見られる播鉢である。スリメは横ナデで消され、外面に残るヘラ削りは左方向である。44は薄作りの碗。45は碗で、外面は菊花文。

46～52はTr-5とTr-6との間からの出土である。46は在地系の壺。47は越前甕であり、鉄泥を施す。48は在地系の土瓶である。注口は同一固体であるが接合はしない。49は徳利の胴部外面には「品治」の文字が見られる。50は播鉢の底部。見込み部分のスリメは全面ではない。51・52は磁器の蓋。ともに在地系とみられる。

(2)瓦[第24～35図、図版20]

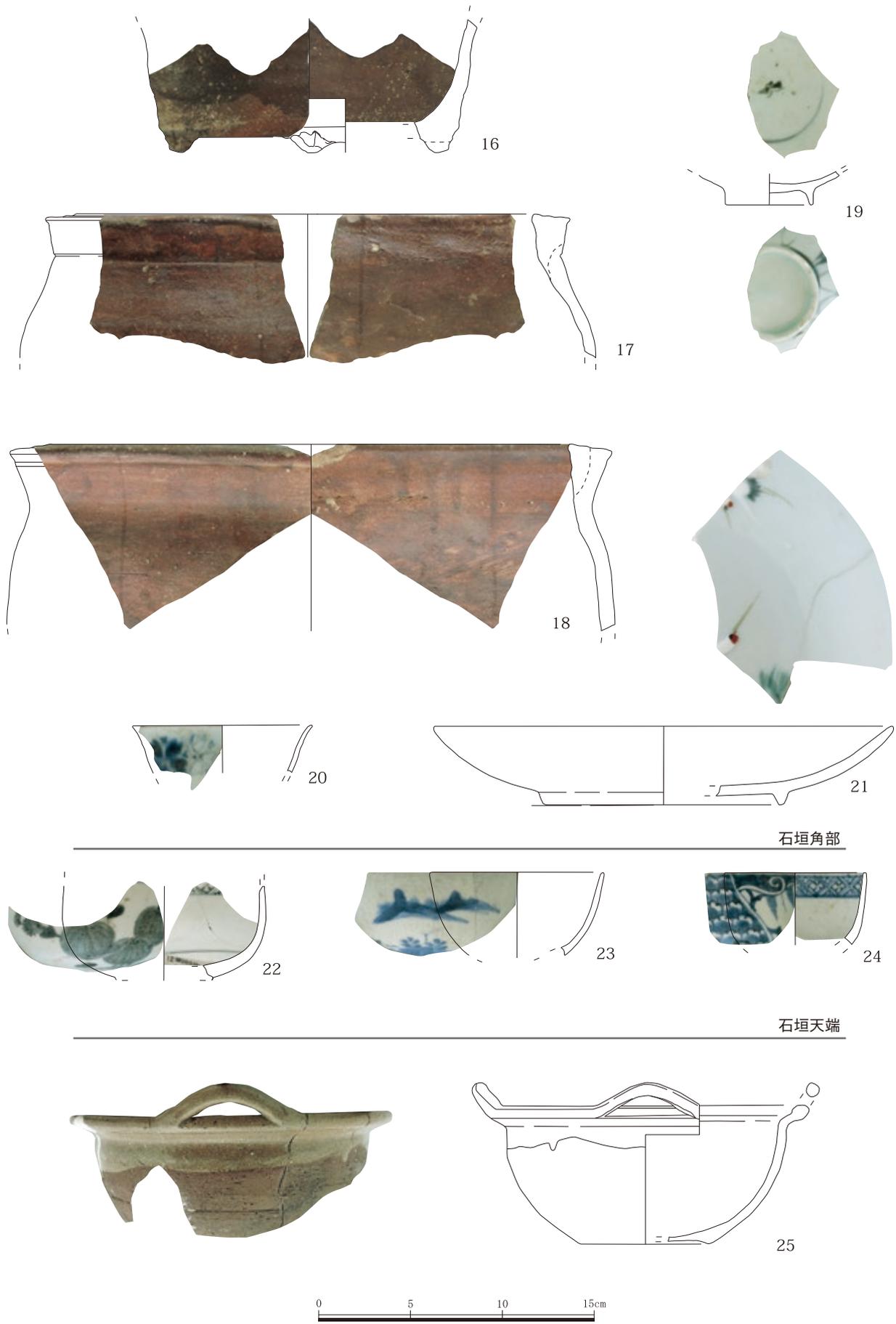
1～11は軒丸瓦である。1・2は蝶文のB類であり、10数種類ある蝶文の中で唯一、顔を正面右へ向ける形をとり、羽が尖る点や内巻きの触角が脚の前に出るという特徴を持つ。両者とも焼成は軟質であり、古相の蝶文である。3～6はD類である。いずれも小片であるが蝶の形が整っており、飛蝶である。1・2とは異なり逆Y字形の脚を持つ止蝶である。焼成はいずれも軟質である。8～11はI1類としたもので、蝶の形態はやや形骸化し、顔は抽象化する。黒色を呈する硬質な焼成が基本であり、幕末期に極めて多く見られる、I2類とともに最も出土例の多い種類である。円形スタンプ状の目が特徴的であり、目は顔の中と外とにひとつずつ置かれているが、10のように顔内の目がはっきりしない例が多い。



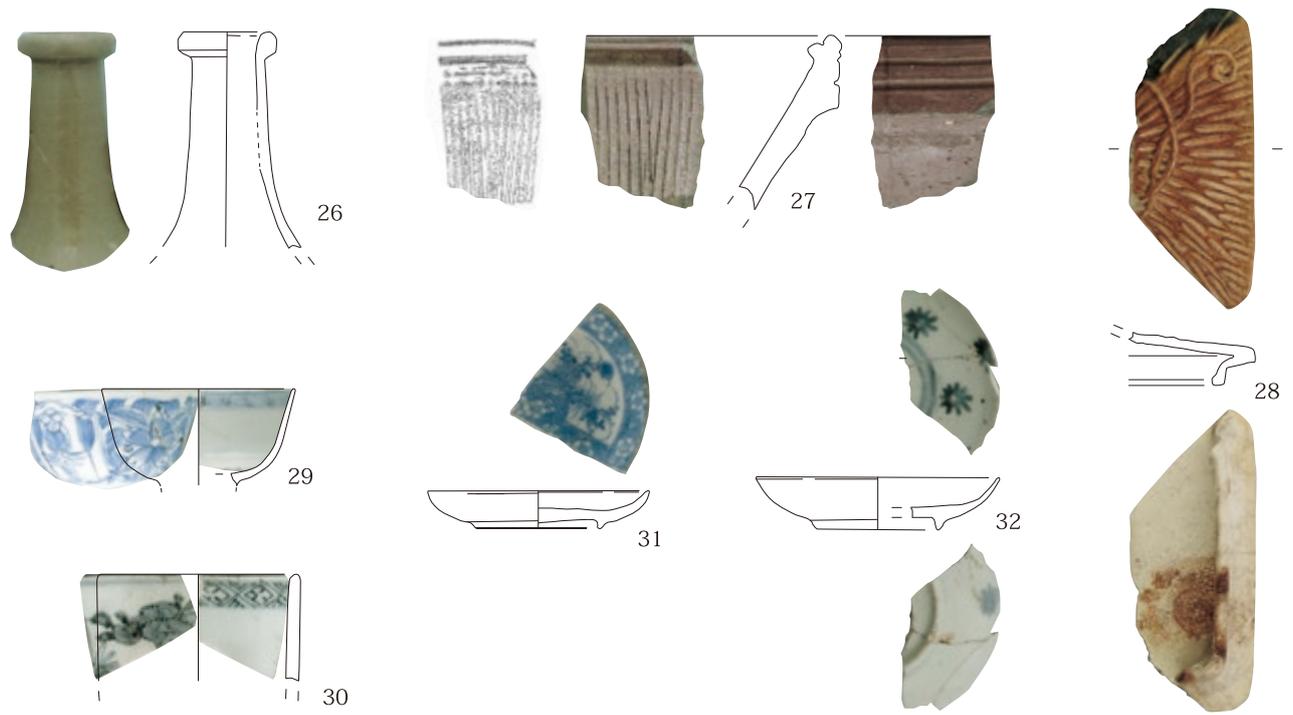
表土

H10 トレンチ再掘削

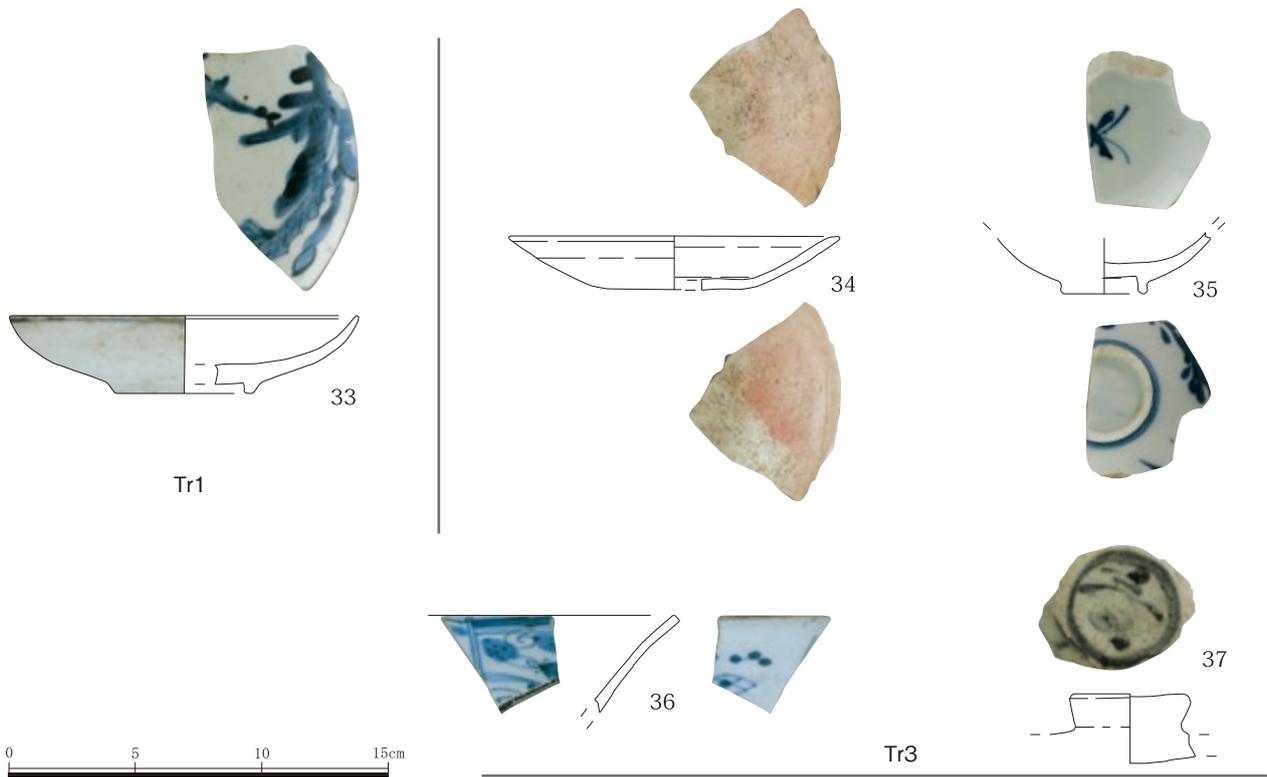
第20図 第1調査区出土遺物実測図1 (S=1/3)



第21図 第1調査区出土遺物実測図2 (S=1/3)

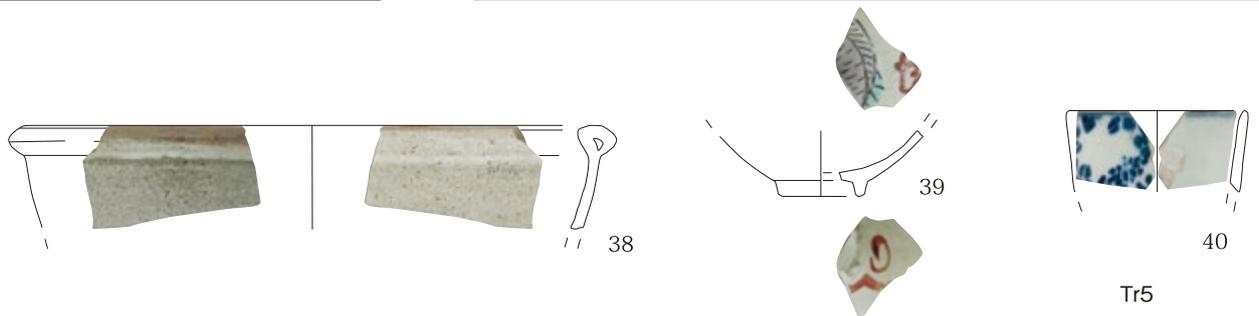


瓦溜



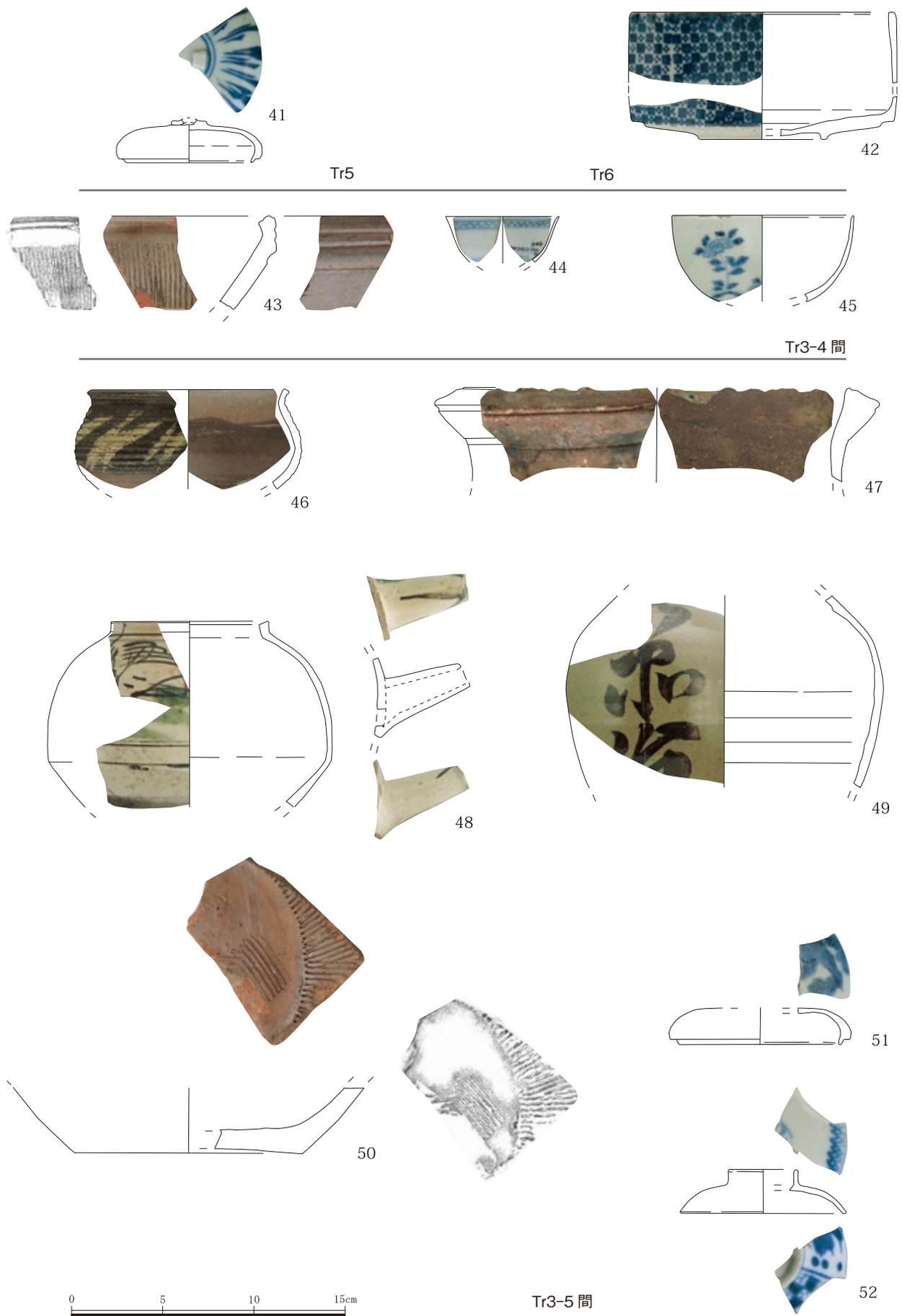
Tr1

Tr3

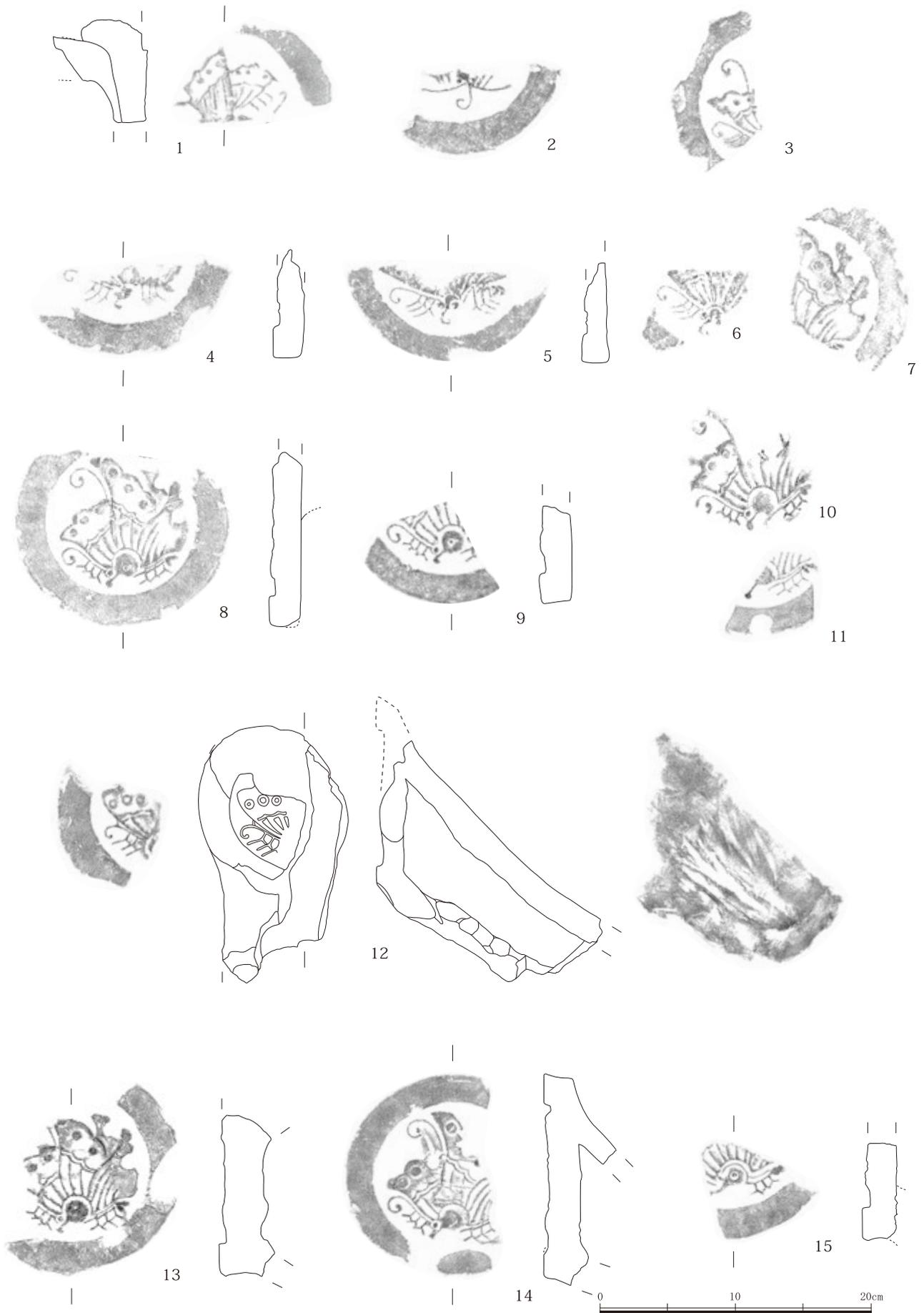


Tr5

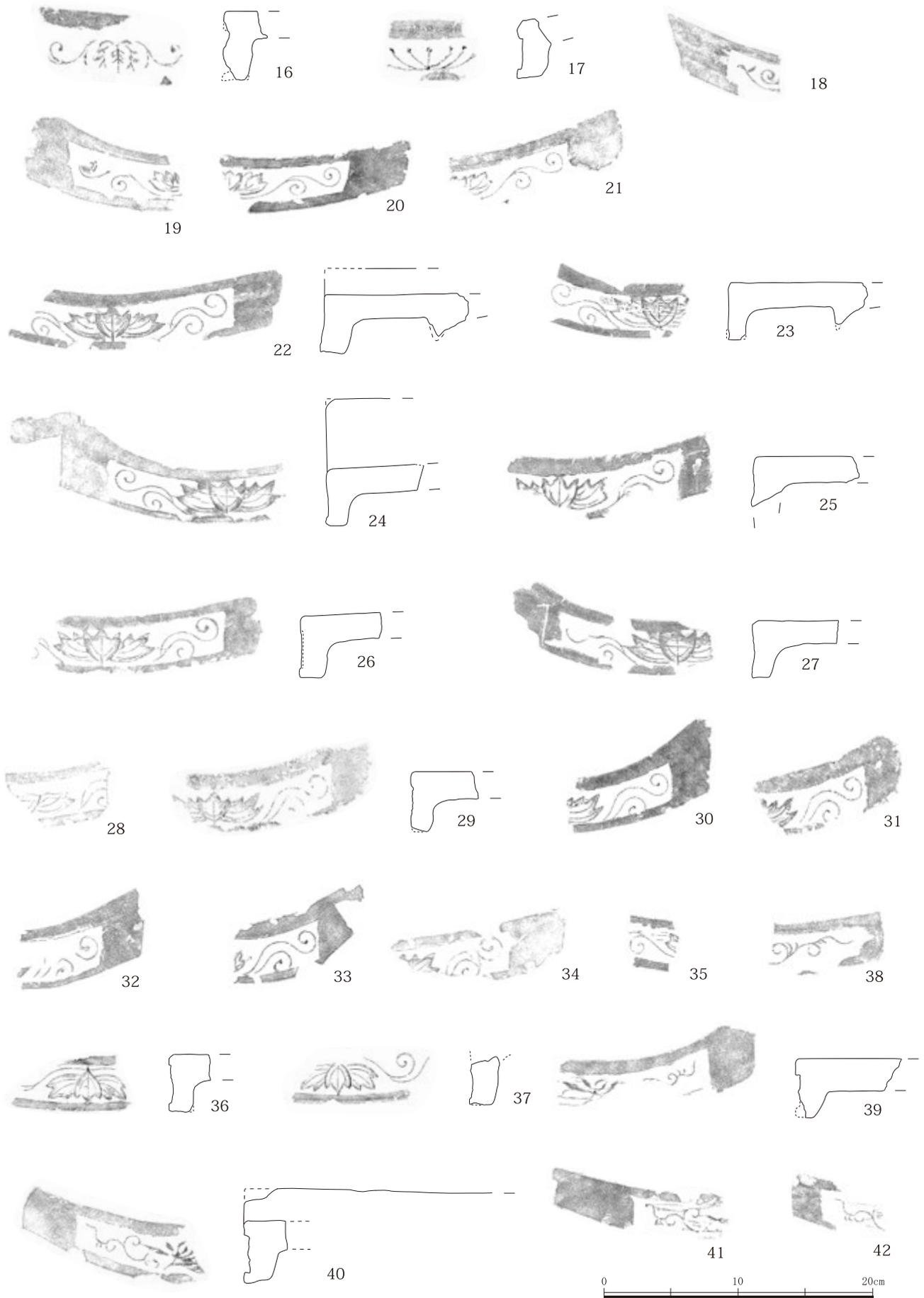
第22図 第1調査区出土遺物実測図3 (S=1/3)



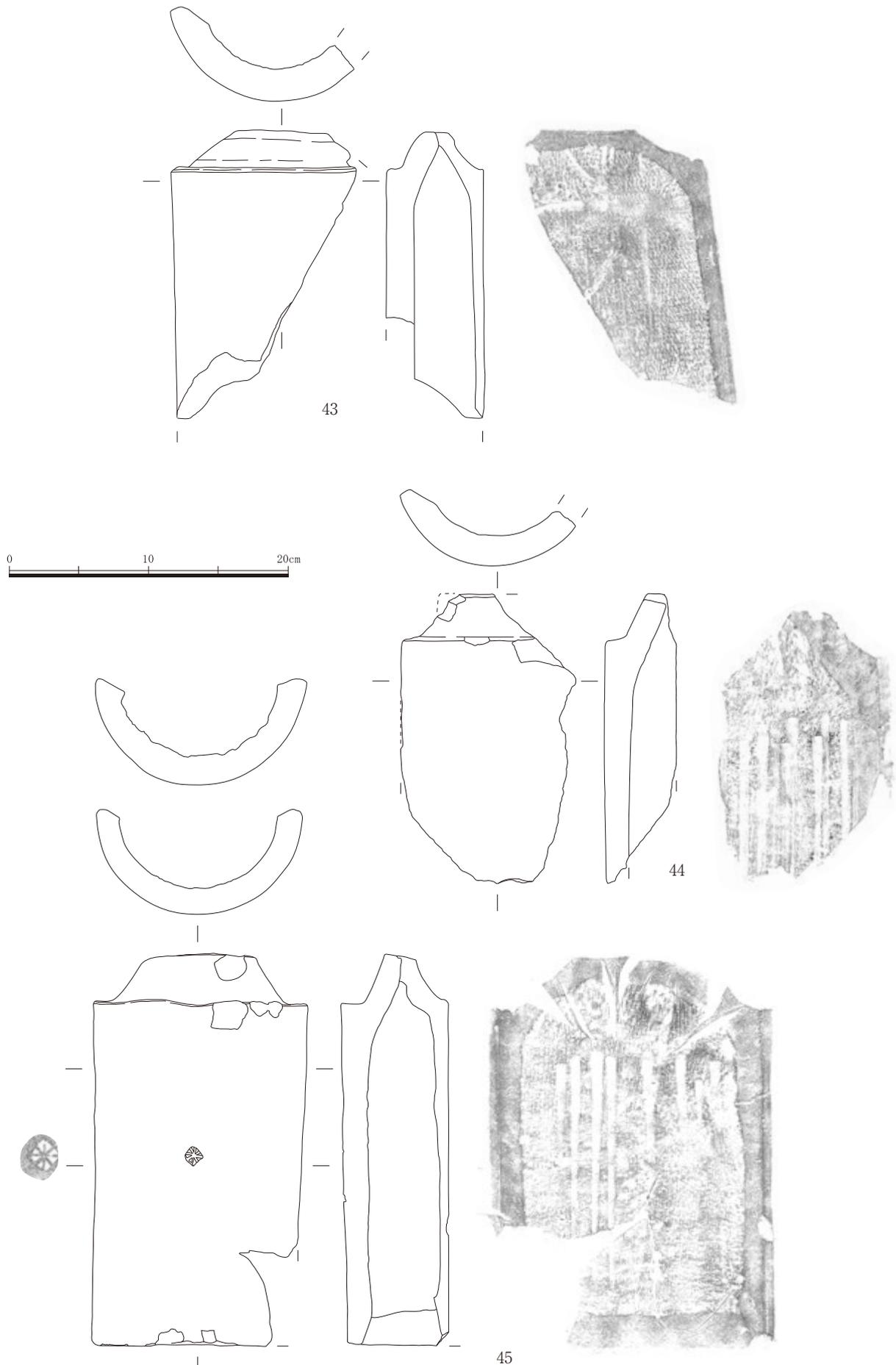
第23図 第1調査区出土遺物実測図4 (S=1/3)



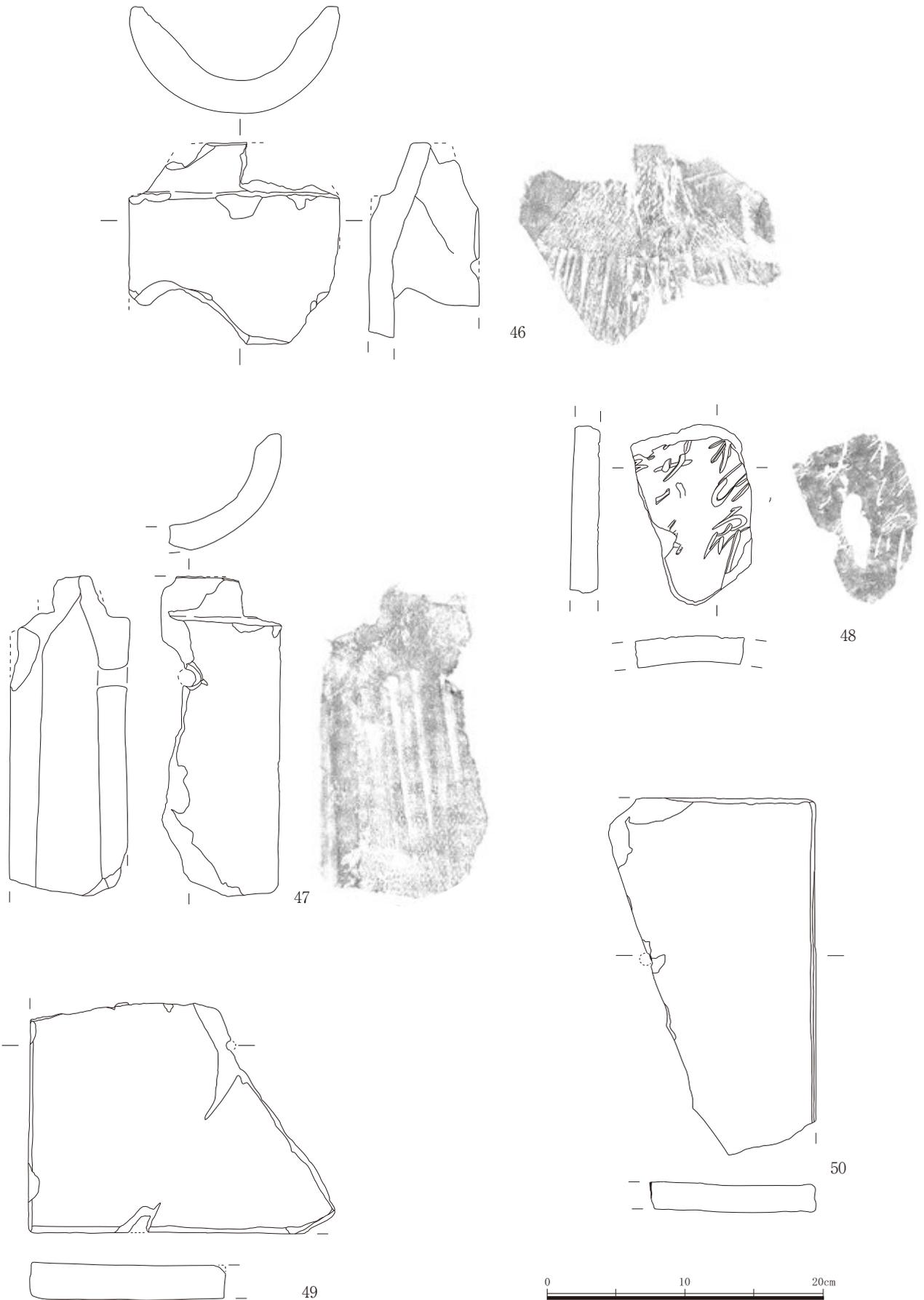
第24図 第1調査区出土遺物実測図5 (S=1/4)



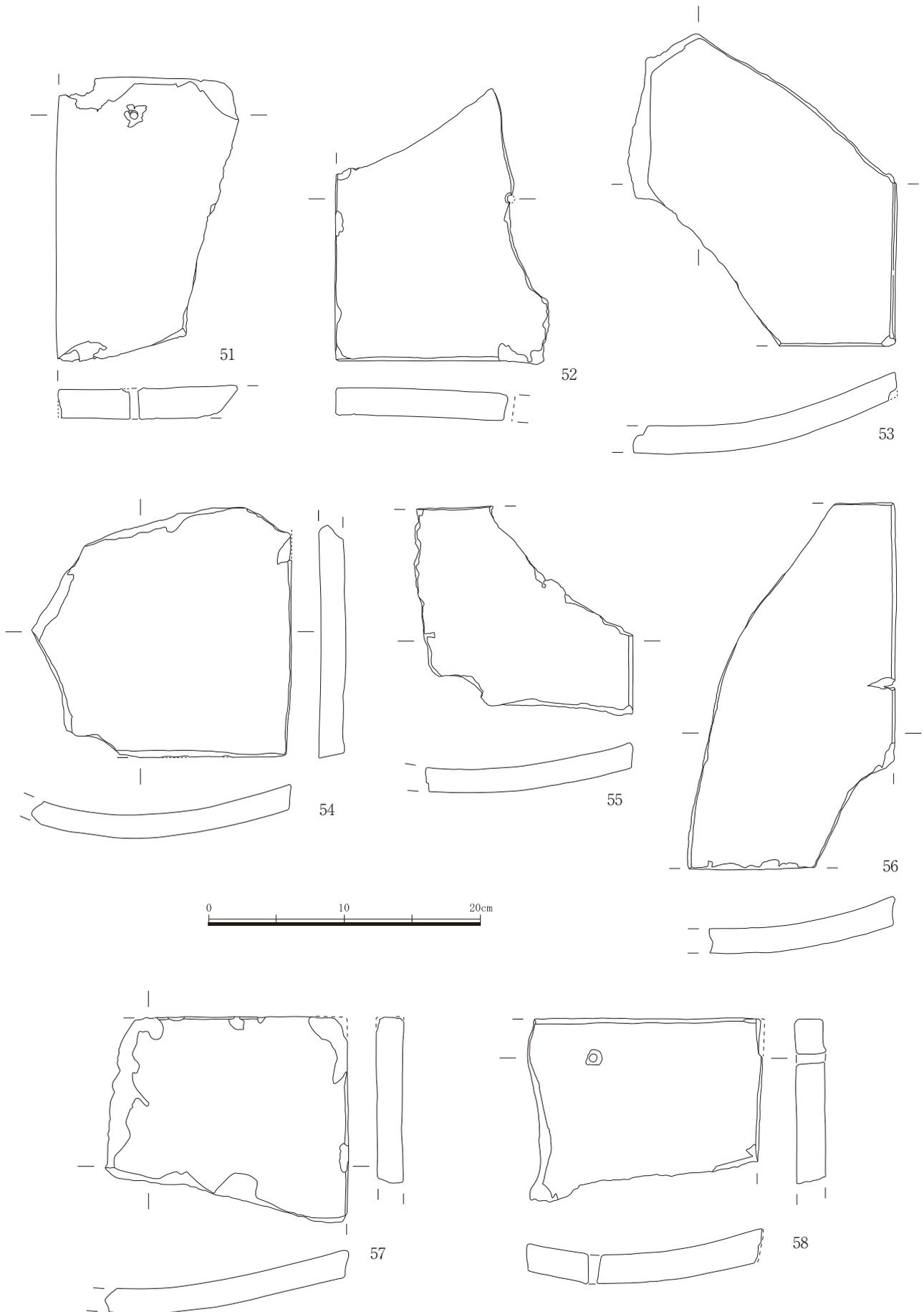
第25図 第1調査区出土遺物実測図6 (S=1/4)



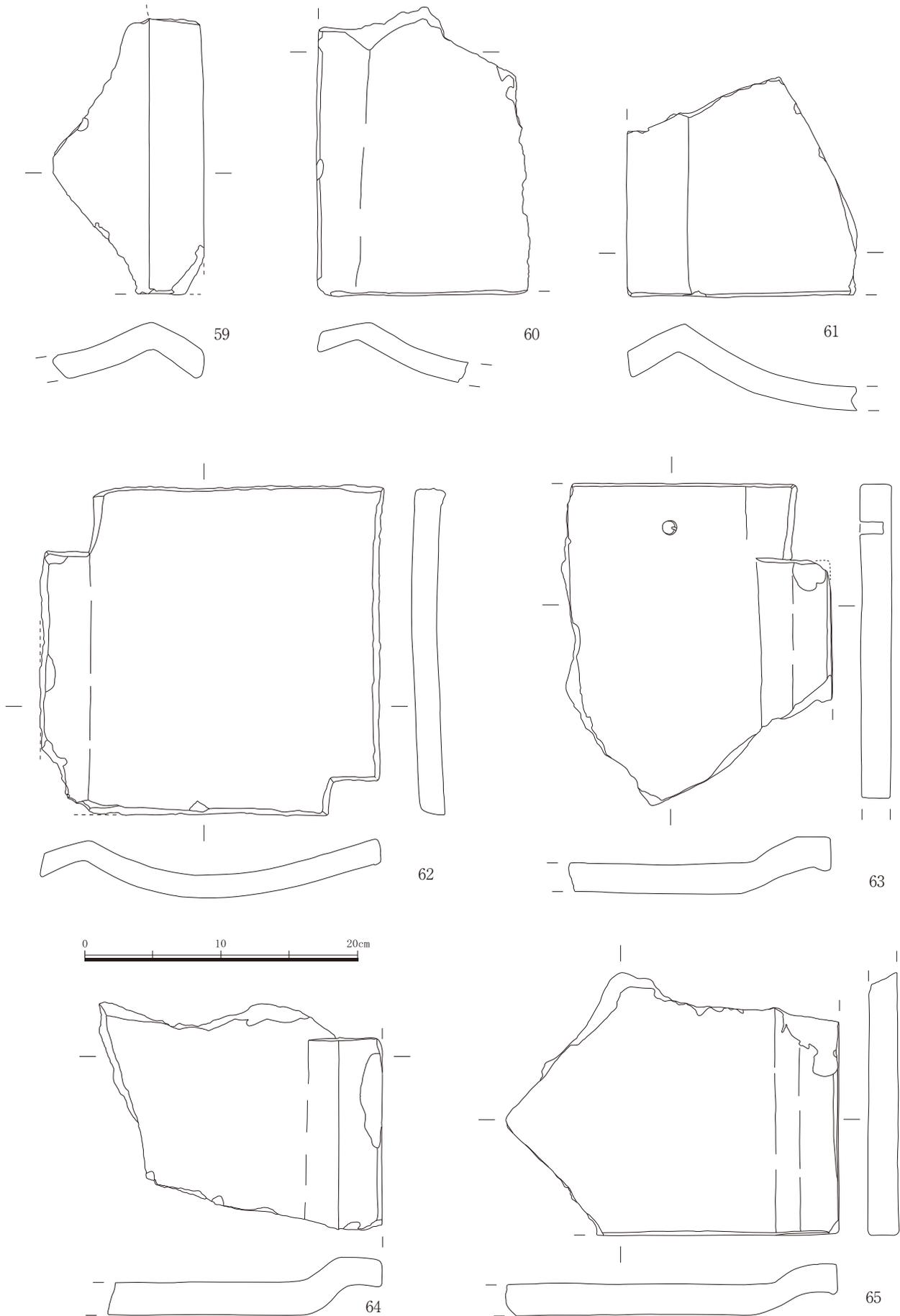
第26図 第1調査区出土遺物実測図7 (S=1/4)



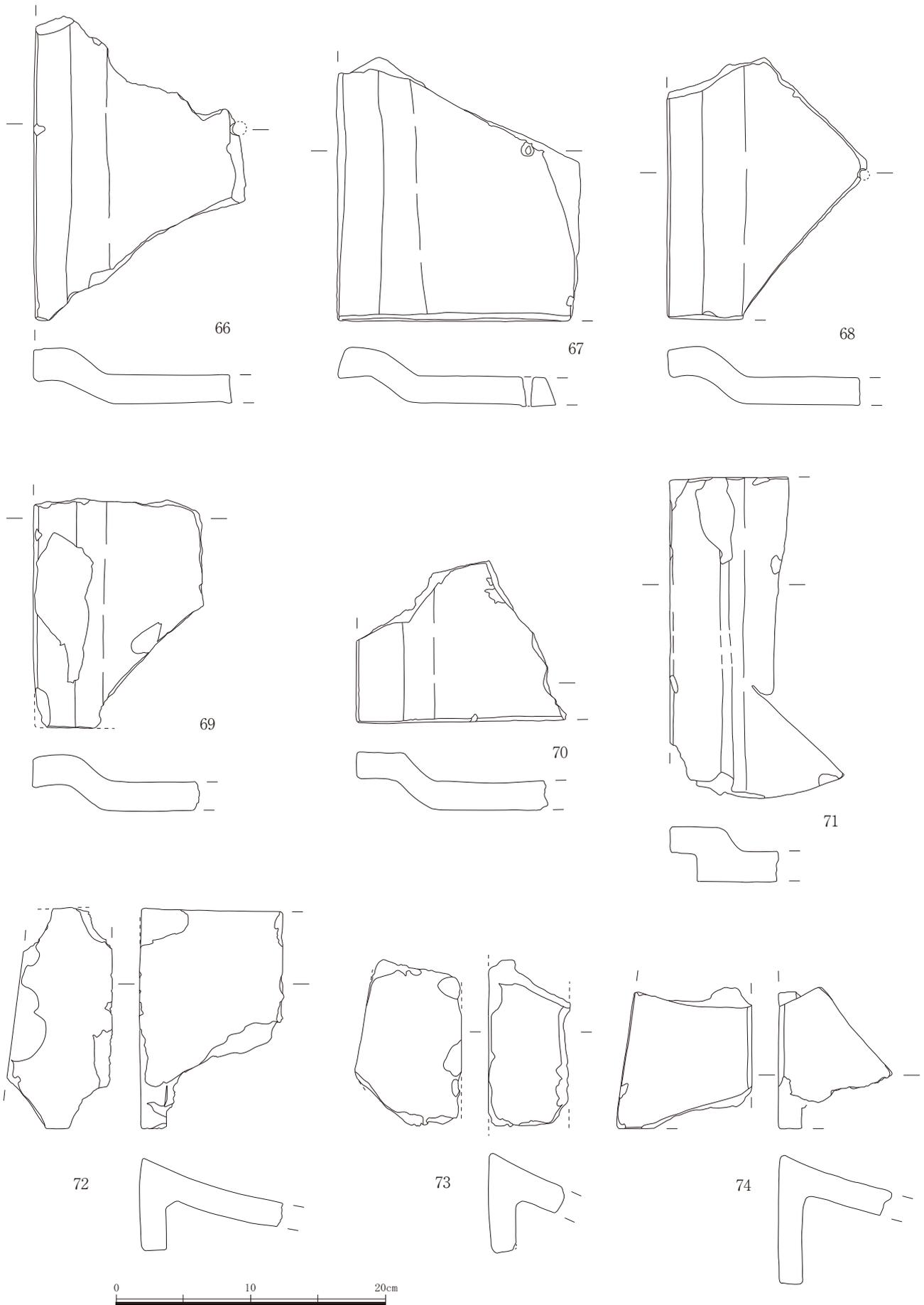
第27図 第1調査区出土遺物実測図8 (S=1/4)



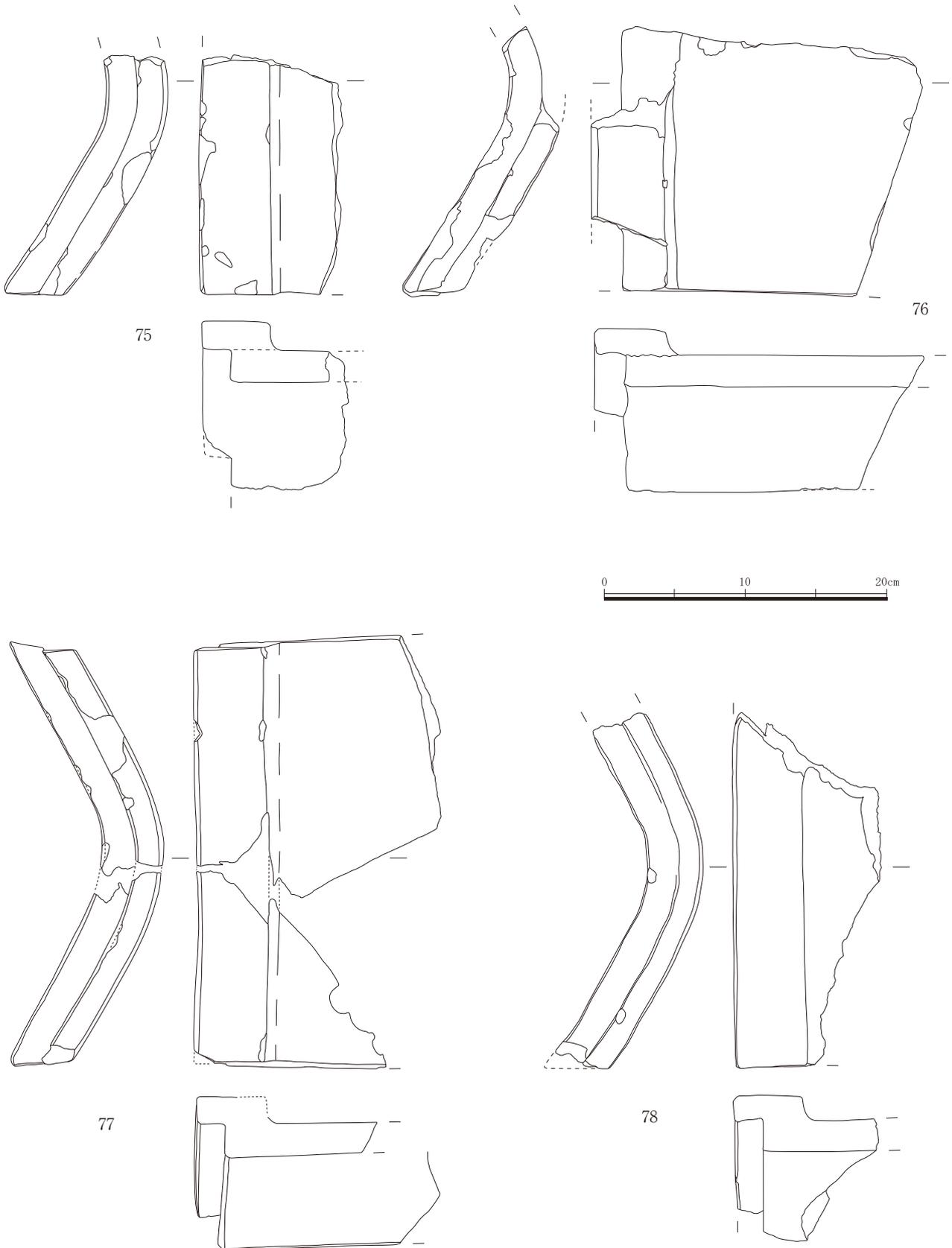
第28図 第1調査区出土遺物実測図9(S=1/4)



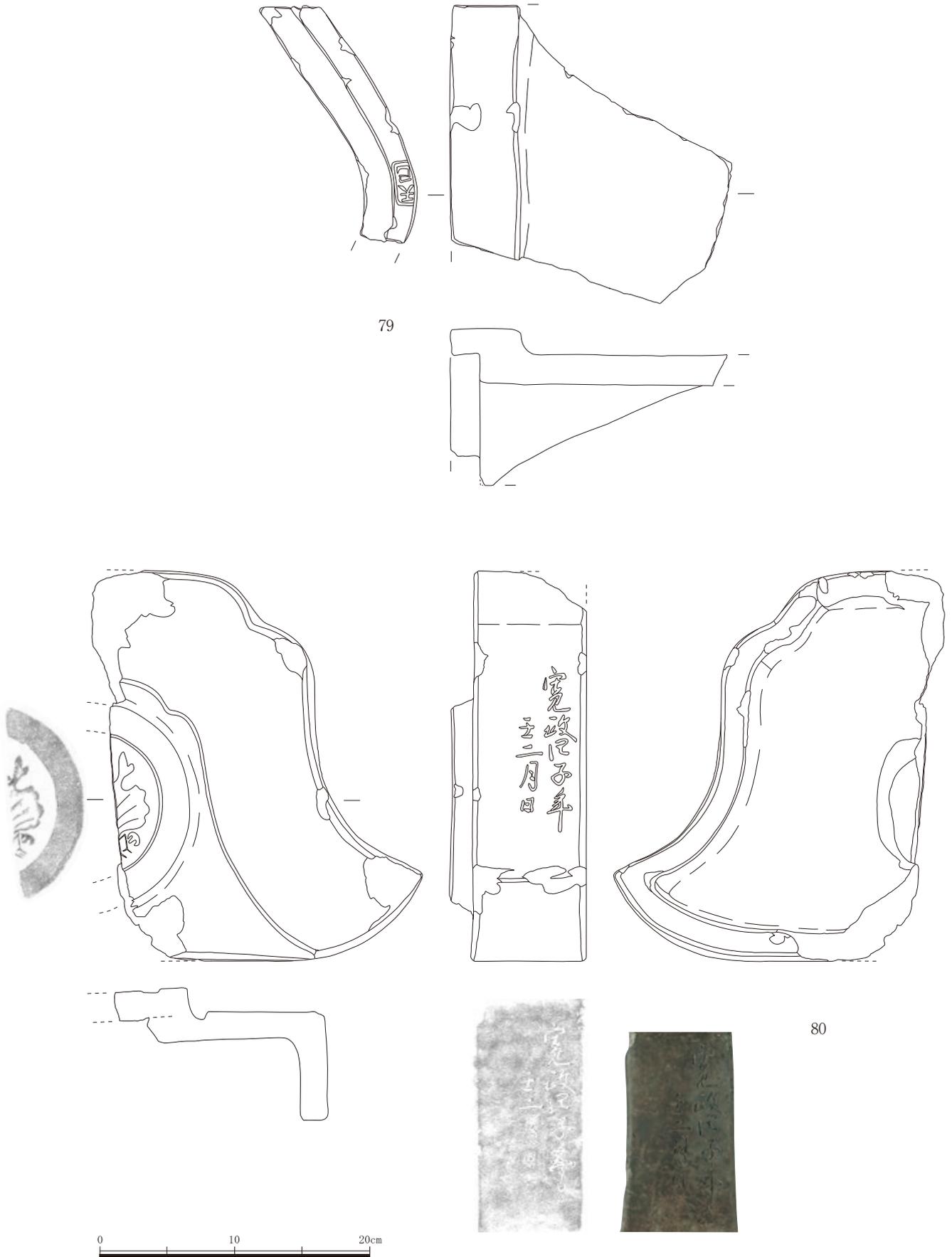
第29図 第1調査区出土遺物実測図10(S=1/4)



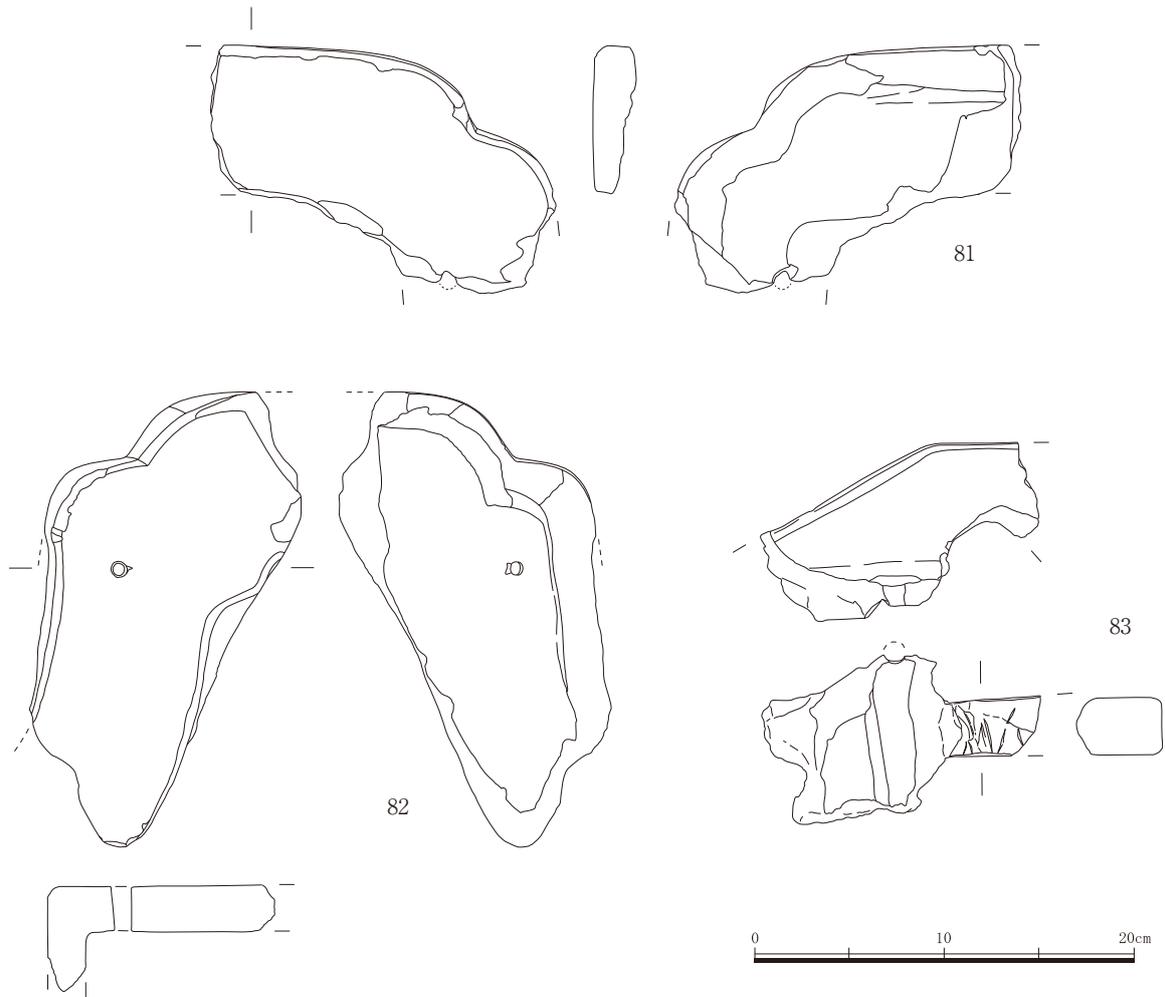
第30図 第1調査区出土遺物実測図11(S=1/4)



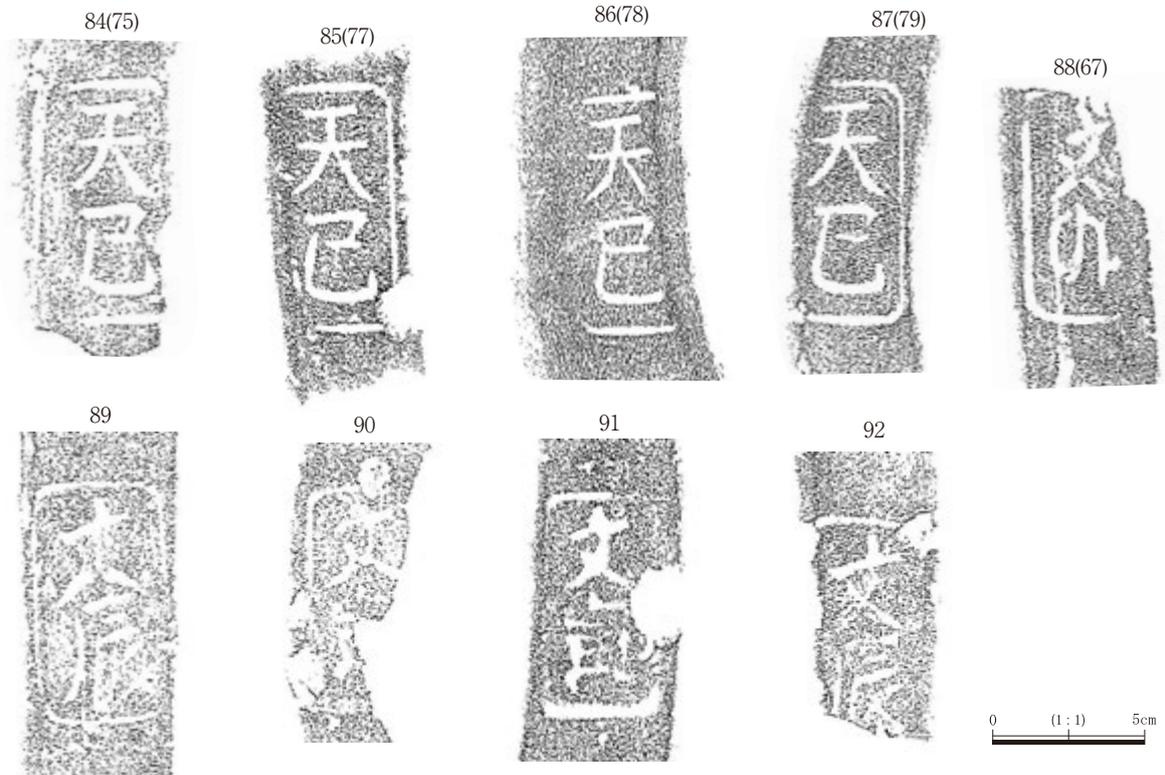
第31図 第1調査区出土遺物実測図12(S=1/4)



第32図 第1調査区出土遺物実測図13(S=1/4)



第33図 第1調査区出土遺物実測図14(S=1/4)



第34図 第1調査区出土刻印瓦拓影(S=1/1)

12～15は鳥衾瓦である。軒丸瓦と共通の瓦当を用い裏面に筒状の基部を接続しており、外縁部がやや窪むのがその特徴である。出土例の大半が瓦当面付近のみであるが、12は比較的后方までを遺す。円筒状に伸びた基部の根元付近には僅かではあるが切り込みがみられる。13・14はI 2類の瓦当を有する。13は他と比べても器壁が厚い。13・14とも同様の位置に范傷がみられることから、同范である可能性が高い。15はI 2類の瓦当を有する口吻は伸び、顔内の目は巨大化する。

16～42は軒平もしくは軒棧瓦である。16はe類であり、焼成は軟質。主文の葉は肉彫りされ立体的に盛り上がる。17も軟質焼成で主文は左右対称に伸びる五葉文である。この2点は古相を呈しており、16については初期の瓦である。

18以降は焼成が硬質化する。18はk類で、文様は太く幅広な形である。19以降は19世紀代の瓦である。19～21は1類の三葉文に唐草2転である。22～34はm類で最も出土例が多い種類である。三葉と唐草との文様配置は基本的に1類とほぼ同じであるが、左右の葉にみられる葉脈の形が異なり、中央から独立して3本延びる。また、2本の唐草が合流する位置が若干低い。m類は唐草の合流地点の違いで2群に分かれる。19～28までの主文の脇付近に位置する一群と、さらに下方、主文の下に位置する29～34との2群がある。35は小片であり、1類もしくはm類の可能性はある。36・37はn類であり、1類をそのまま上下反転させた形である。38はo類もしくはt類の可能性はある。39～42はt類。瓦の中で唯一左右非対称の主文であるという特徴を持つ。唐草から伸びる子葉に若干の違いがあり、上方向を向く39と下方向をむく40～42がある。

43～47は丸瓦である。43は軟質の焼成で、器壁も厚手である。内面には吊り紐痕が残る。44以降は内面に棒状の調整痕がみられる。44は高さが5.2cmであり、他よりも若干低い。45は一部を欠くものの大部分を残す。焼成は軟質であり、外面中央付近には“米”字状の刻印を持つ。全長は28cm、幅15cm、高さは7.8cmと高い。47は2.5cm程度の比較的大きな孔を持つ。

49～52は平瓦とみられる破片である。一辺すべてが残っていないため、規格は不明であるが、扁平であることから66～71のような目板瓦の可能性はある。

いずれも孔を持つが49・50・52は中央付近と考えられる位置に穿たれており、51は片側に寄る。厚さは49が2.0～2.5cm程度である。

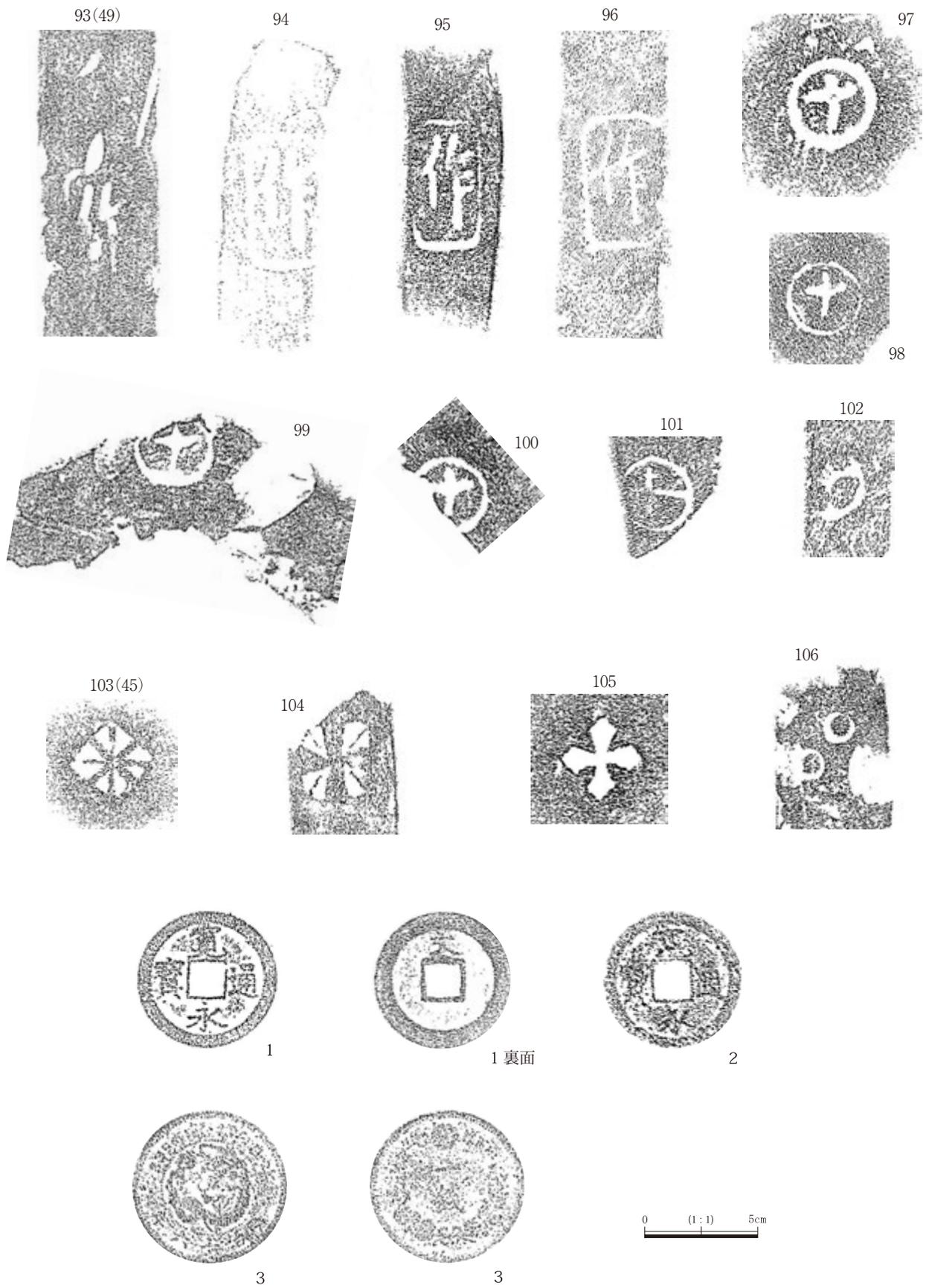
48・53～58も平瓦あるいは棧瓦とみられる断面形が弧を描く瓦である。48は文字瓦。3行の文字列が確認できるが、判読できるのは僅かに「…治郎…、…廿八…」という程度である。弧の深さは固体毎に異なる。長さが分かるのは56のみであり27cmを測る。

59～71は棧瓦である。59は左棧瓦である。棧部分の長さは20cm程度であり、その先は切り込みがみられる。60～62は右棧瓦である。62はほぼ完形であり、規格は24cm四方である。対角線上の2角に5cm程度の切り込みを持つ。63～71は棧瓦でも目板瓦である。棧部分の断面形は平瓦部からの続きで斜め方向に上がるもの(59～70)と上下2段重ねとなる71とがある。いずれも破片であり、全長は不明であるが、棧部分の幅は5.0～5.5cmほどである。63～65は左棧。それ以降は右棧である。66～68は中央付近に孔を持つ。70は棧部分に丸みを持たず扁平となる。71は若干形態が異なり、断面は2段重ねのような形で棧裏側の幅は短く1.5cm程である。雁振瓦と似た断面形状である。

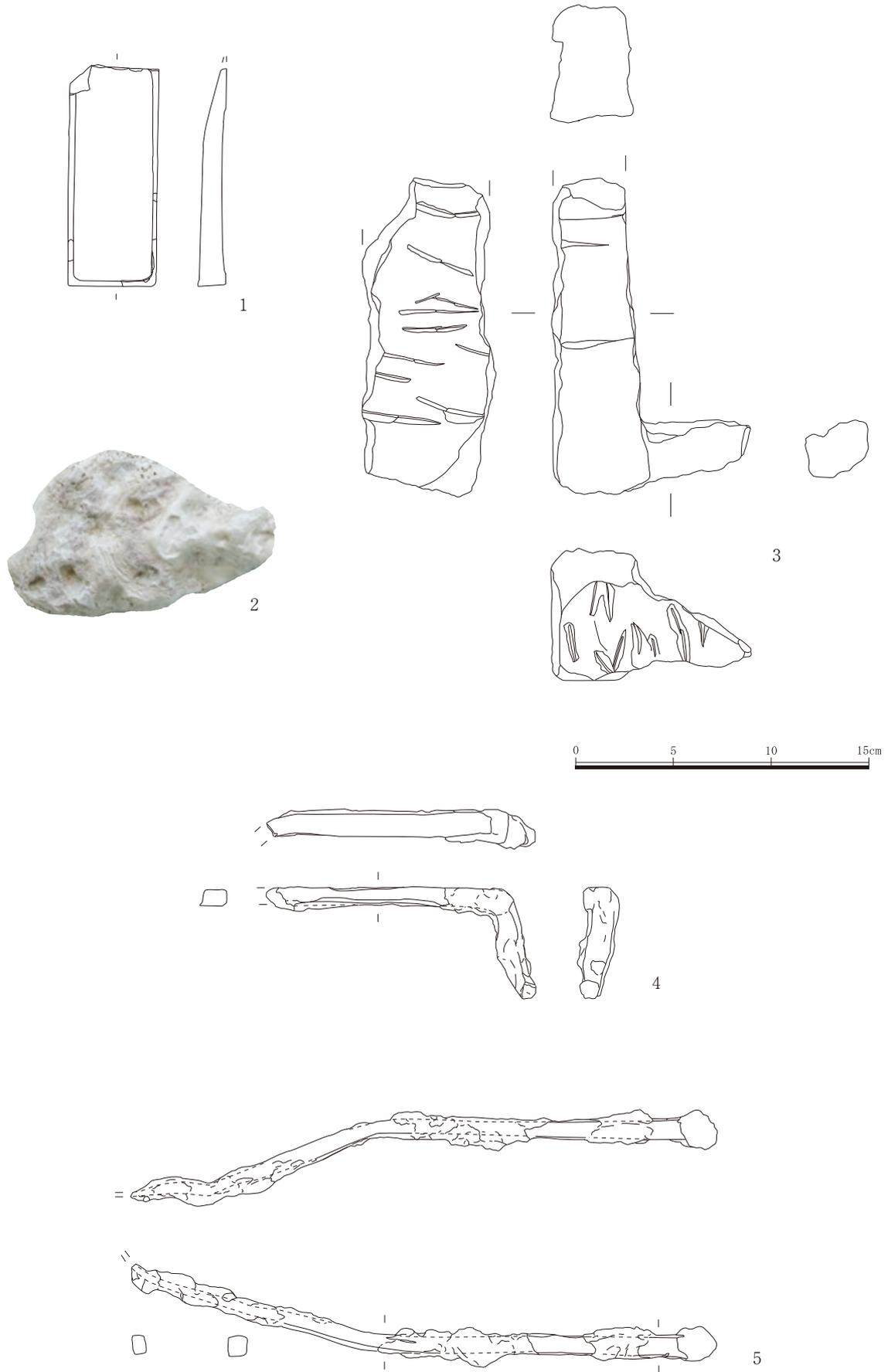
72～74は右袖瓦である。

75～79は雁振瓦である。出土するものの多くはほぼ同じ規格であり、幅31cm、高さ11cm、棧の長さは5cm程である。山なりとなった棧の正面頂部付近に刻印を持つものが大半であり、76以外はすべて「天巳」と押されている。これは天保4年(1833)、巳の年を表していると考えられる。

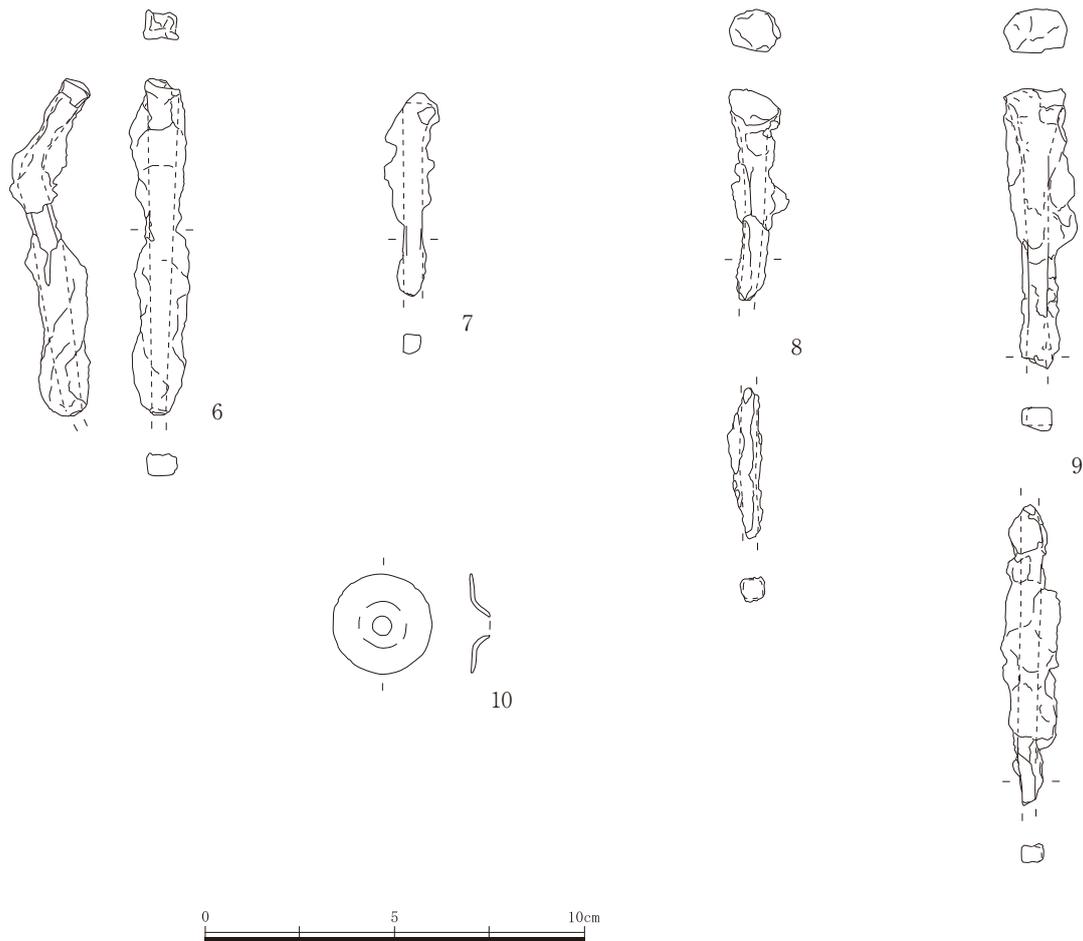
80～82は鬼瓦である。82は2分の1程度の残存であり、全長29cm、高さ10cmを測る。側面には「寛政四子年 閏二月日」と記年銘が入ることから、1793年、子の年2月製作を示している。中央には軒丸瓦の瓦当部を貼り付けるが、全体が出土していないため正確な形は分からないがD類の蝶であると推測さ



第35図 第1調査区出土刻印瓦・銭貨拓影(S=1/1)



第36図 第1調査区出土遺物実測図15(S=1/3)



第37図 第1調査区出土遺物実測図16(S=1/2)

れる。81・82は縁の頂部付近のみの残存である。肩部付近の同じ位置に孔を持つ。

83は詳細不明の瓦である。ブリッジ状に亘るような形態をしており、鳥袞瓦の基部とも考えられるが、これまでの調査に類例はない。

第34・35図は刻印瓦及び銭貨の拓影である。文字刻印には天巳の他「文寅」「文卯」「文辰」や「作」がある。いずれも隅丸方形の中に文字を入れており、「文」は文化・文政期を示すとみられ、「作」は詳細不明ながら同時期に盛んに用いられたとみられる。「○に十」は漢字の「十」字状のものから、カタカナの「ナ」字状のものなど数型がみられる。菱形は、古い時期から存在していたとみられ、様々な形がある。最後は小さな丸を2つ(或いは3つ)並べるもので今回初出である。

(3)その他の遺物[第36・37図]

23は硯。縁部分を欠くが全長11.5cm、幅4.6cm。2は貝。3は柱根巻きである。鳥取城に特徴的な製品であり、緑色凝灰岩を加工して作る。表面には鑿状の加工痕が残っており、高さは6.8cm、厚さ4.8cmである。破片資料であるため、全長は不明であるが、内寸は12cm以上の柱を囲っていたこととなる。

4は左手違いの鋸である。5は鋸状の鉄器。鋸の基部に似た一辺1.0cm程度の断面を有する棒状の鉄器で17cm程度のところで僅かに折れる。端部は、銹化が著しいが、やはり鋸のような釘部が取り付く。

6～9は釘である。いずれも銹化が激しい部分資料である。6・7の頭部は皆折、8・9は頭巻状になる可能性がある。10はボタン状の製品で直径2.7cm。

Ⅲ－3 第30次発掘調査 第2調査区

1 調査の概要

調査面積 130㎡

周辺状況および調査の経過

第1調査区の南東側、道を挟んで対面側に位置する調査区である。中ノ御門の正面からみて右手側にあたり、第1調査区同様本来は石垣上には塀が廻っていたことが古写真より明らかとなっている。石垣は幾重にも折れていることからそれぞれの面に便宜的にA～Jの番号を付けた。調査区は鳥取西高等学校第1グラウンドの端にあり、学校運営の都合上、排土の調査区外への搬出は困難であったため、現場内に区画を設けて処理を行った。また、この区画を避ける形でTr-1～6のトレンチを設定し、石垣周辺の状況を確認した。

第2調査区の目的は、塀の構造および門との取り合い関係の確認である。城解体以前の古写真をみるとA～D面石垣上には塀が廻る。E面上は対面の第1調査区同様、中ノ御門表門屋根の端部がわずかに架かる形となる。F・G・I面上の塀の有無は不明である。H面上には中ノ御門の内門にあたる櫓門の2階部分が表門同様にわずかに架かる形となる。

石垣は、第1調査区同様広範囲に亘り修理が行われている。昭和18年の鳥取大地震では城内各所の石垣が崩壊しており、昭和32年の史跡指定後順次修理が行われてきた。当調査区の石垣に付いては、大規模な崩落こそ免れたが影響は大きく、経年変化等も相まって孕み出しが著しくなり、昭和49年に大規模な修理が実施された。修理による積み直し範囲は第37図の赤色部分のとおりであり、A～B面中央、D面中央～E面中央にかけての石垣上半部は旧状を失っている。

2 調査の結果

石垣の積み直しは、角部を中心とした天端石にみられる。石垣の石材は花崗岩が主体であり、調査区付近では石垣の裏栗石として20～30cmの比較的大きな石が用いられていたが、修理にあたっては石垣には安山岩、栗石には拳大の石が多量に使用され、最上層には砂利のような小型の石が敷かれるという相違点がある。トレンチは順次設定しており、隣接していても番号の連続性はない。

(1)第1トレンチ(Tr-1)[第40図、図版10]

調査区南東側A面石垣上に設定した幅1.5m、長さ2.5mのトレンチである。表土である1層は石垣天端へ向かい緩やかに傾斜をつける。その下部には25cmほどの厚みを持つ3層が広がる。さらにこれらを掘り込むのが栗石層の2層である。石垣の裏側80cmの広範囲に亘り敷かれた栗石はトレンチ掘削部分の大半を占める。天端高である7.3m付近からみられ、上層は砂利のような小型石、下層には拳大の石が隙間なく充填されている。

安山岩製の天端石は高さが40cmほどであり、これを除いた標高6.9mになると、石垣の裏には20～30cm程度の大型裏栗石がみられ、さらにその後ろには4層が続く。上層とは異なり、しまりのある4層は整地層であることみられる。また、石材こそ入れ替えられているものの、3層の上面、標高7.2m付近が近世段階の最終面であったと考えられる。

安山岩製の石垣は、修理時の積み直しであり、1・2層は嵩上げに敷かれた層と考えられる。A面石垣の天端石列はいずれも安山岩であり、昭和の修理による一段分の積み直しであることがわかる。この一段積み直しはB面まで続き、A-B面角についてはもう2石、上から3段分が改められている。

(2)第2トレンチ(Tr-2)[第40図、図版11]

調査区の南側B面石垣上に設定した幅1.3m、長さ1.4mのトレンチである。トレンチの南東側A面の裏側付近からD面中央付近までは、部分的な栗石充填こそみられるものの、石垣が遺存する範囲である。

残存石垣の天端高は7.4m前後にあり、背後には厚さが30～40cmの3層がつながることから、この上面が近世最終面であったとみられる。1層は表土、2層はブロック状の焼土層であり、この場所で火を使用した痕跡と考えられる。4層は黄色系の砂礫からなる整地層で上面の標高は7.0m付近である。土層の堆積状況はTr-4・2の1・3・4層と共通しており、一連の層である可能性がある。

(3)第3トレンチ(Tr-3)[第40図、図版11]

調査区西側、C-D面の入隅部に設定した幅1.5m、長さ2.6mのトレンチである。地表から10cm程度の1層は表土である。石垣天端高はC面側で7.4m、D面7.7mとやや高くなり、裏側には2層が続くため、この上面を近世最終面とした。2層は厚さが30cmほどであり、D面石垣裏付近では拳大の栗石を包含する。その下には樹根の攪乱である3層をはさみ4・5層がみられる。ともに黄色系の砂礫主体の整地層であり、50cm以上も厚く敷かれた5層を切り込む4層については石垣築造に伴う掘り込み層である可能性がある。2層と5層の関係は、先述のトレンチ中の3層と4層との関係に非常に似ており、一連の層と考えられる。

(4)第4トレンチ(Tr-4)[第41図、図版10]

調査区の南側B面石垣上に設定した幅1.5m、長さ1.2mのトレンチである。周辺の状況はTr-1とほぼ同じである。角石からC面側へ5.5m付近までの天端石列はA面から続く安山岩製の石材であり、昭和49年度に行われた一連の積み直しである。石垣天端の裏側80cmほどの幅には、この積み直しに伴う栗石が充填されている。標高7.2mより敷かれた栗石は深さが50cmに及ぶ。

トレンチの端部にはわずかに旧来の土が残っており、表土である1層、黄色系の整地層である4層上に厚く敷かれた3層上面、標高7.2mが近世最終面と考えられる。

(5)第5トレンチ(Tr-5)[第41図、図版11]

J面沿いに設定した幅50cm、長さ1.6mのトレンチである。厚さ10cm以下の表土部分を除去すると以下は石垣下部まで層位に変化はみられなかった。トレンチ北側の50cmほどの範囲、地表から30～40cm下がった位置には栗石状の石材の集石を確認したが古段階の整地に伴うものと考えられる。現地表がほぼ最終生活面であったとみられる。

(6)第6トレンチ(Tr-6)[第41図]

調査区西側Tr-3との隣接地よりD面中央付近にかけて設定した幅1.3m、長さ2.7mのトレンチである。北西側には以前存在していた大型の松の樹根が残存しており、それらを除去したためトレンチ壁面は残っていない。

1～3層は樹根の攪乱層である。石垣天端高は7.7m付近であり、背後には厚さ40cm程の4層が続いていることからこの上面を近世最終面とした。その下部、標高7.3m以下には整地層である5層がみられる。

(7)第7トレンチ(Tr-7)[第41図、図版12]

調査区の東側、I面石垣の裏側に設定した幅50cm、長さ2.0mのトレンチである。天端高8.8m前後のI面裏側には40～50cmほどの範囲に拳大の栗石がみられる。さらにその背後、トレンチの上端付近は土敷で標高は8.4m前後であり、天端との比高差は40cmである。本来は天端近くまで土があったと推定されるが、石垣目地等からの流出により現高まで下がったと考えられる。地表から50～60cmには拳～人頭大の石が点在しているが、主として土での整地である。地表から70cm、標高7.7m付近になると状況は変わり、一面に掌大の栗石を確認した。

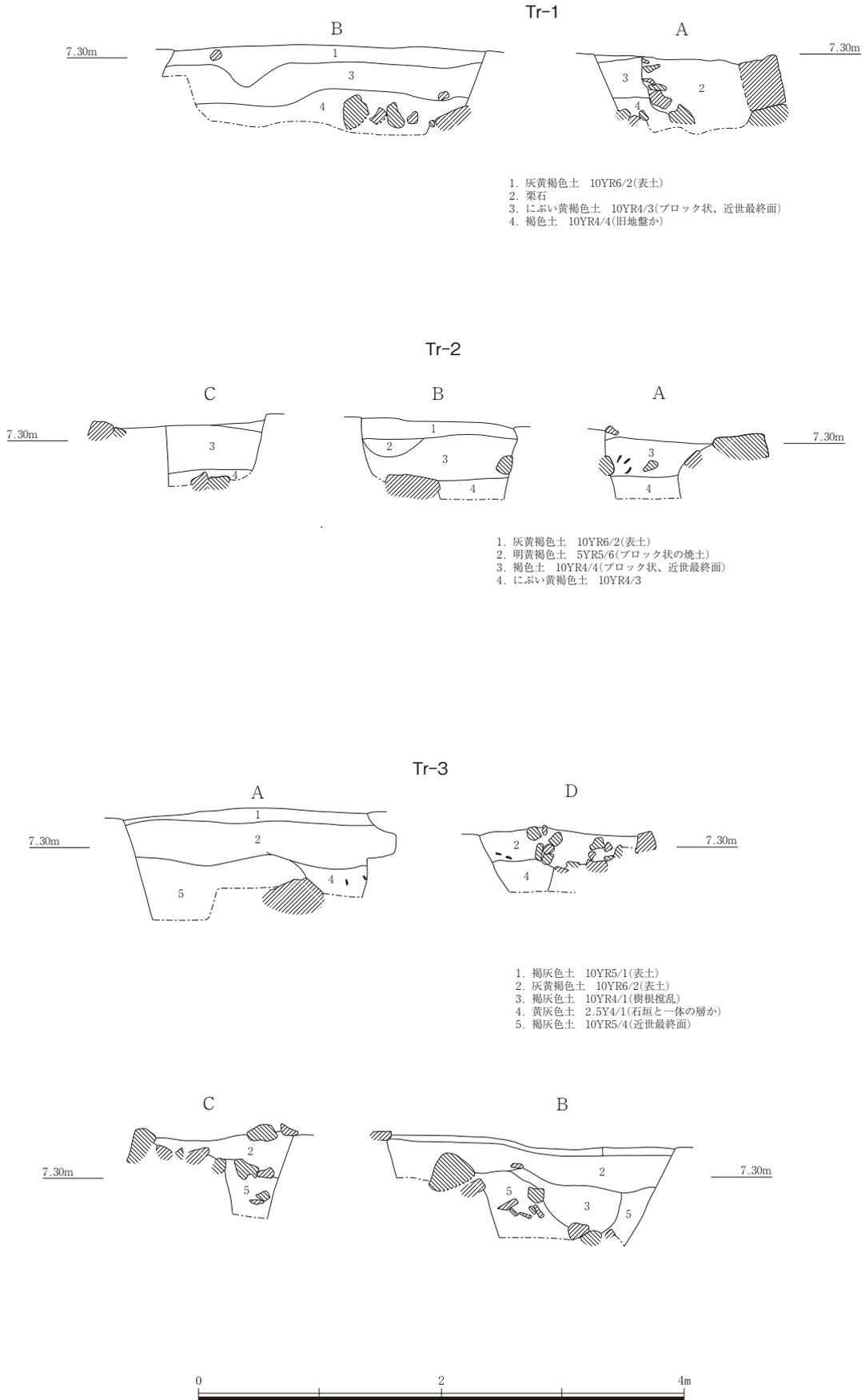


第38図 第30次調査第2調査区平面図(S=1/60)

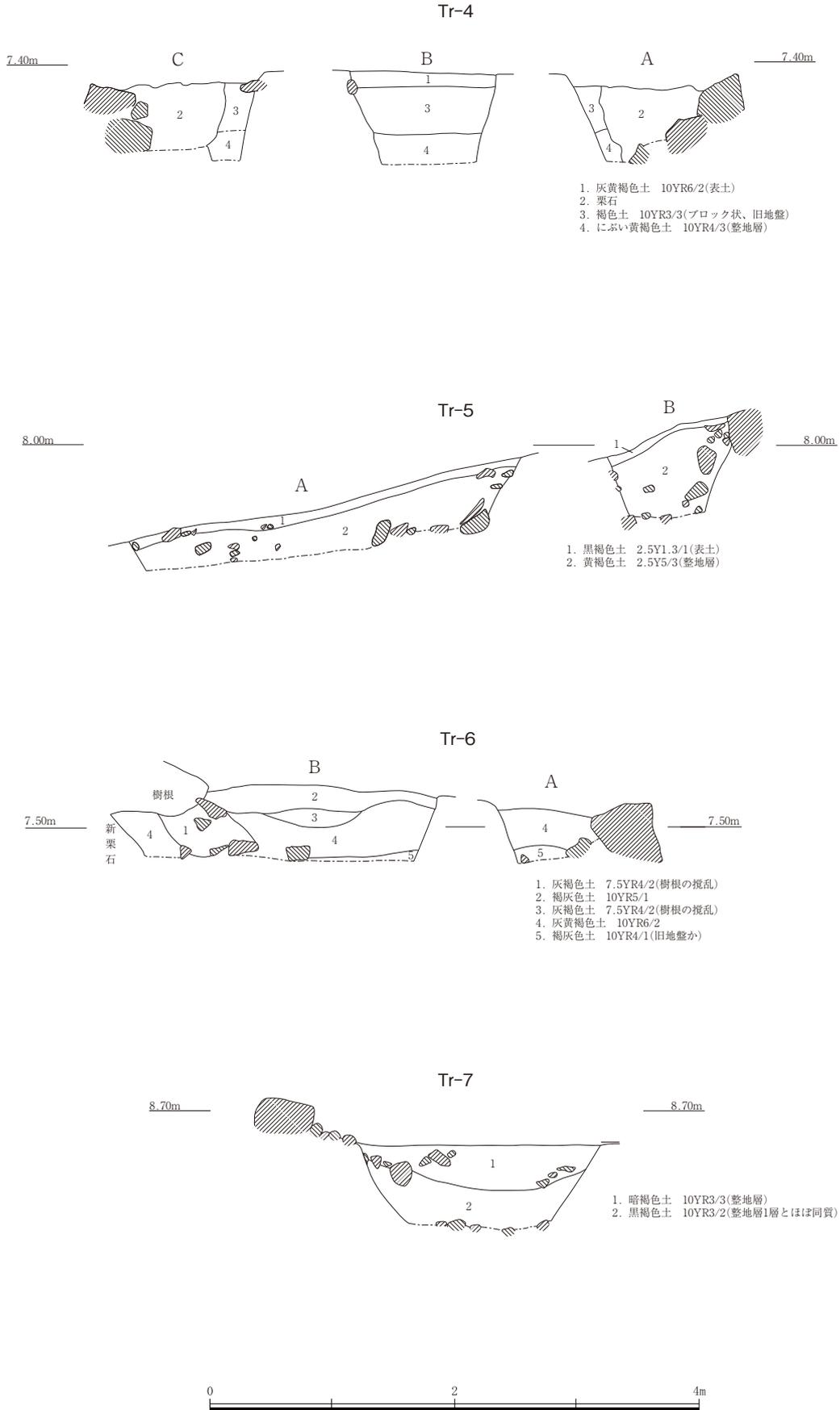


第39図 第2調査区オルノン図(S=1/100)

III章 調査の成果



第40図 第2調査区第1・2・3トレンチ土層図(S=1/50)



第41図 第2調査区第4・5・6・7トレンチ土層図(S=1/50)

(8)階段状遺構[図版12]

調査区の北西E面石垣中央付近、E-F面角部より1.6m付近に位置する。D-E面角部の石垣積み直し部分の背後にはかろうじて近世最終面とみられる面が残存しており、その標高は7.5m前後である。石垣天端よりのびる階段はこの面下に根元部分を埋めており、横方向に3石2.5mほどが残存する。本来は比高差50cm、2段積みであったとみられるが、現代の攪乱により、中央部の石は傾き、北西側は上段を欠く。さらに北西側へと続く可能性があるが付近にかつてあった松の影響により現在は確認できない。

階段の上下の標高は対面第1調査区の段差と同一であるが、門前面石垣にあたるD面天端からの距離が2.2m程と、第1調査区側の3.0mより短いという特徴がある。段の裏側、F面との間には栗石が充填されている。

段差上および前面には多量の瓦片の集積(瓦溜)がみられた。第1調査区でも同様の場所に集まっていることから城解体時の廃棄場所であったと考えられる。

(9)修理範囲[第38図赤色部分]

A-B面

A面からB面へかけて大規模にみられる。角部の3石を中心にして、A・B両面にかけて天端の一石が置き換えられている。石垣裏側は幅80cm、深さ50cmほどにわたり新たな裏栗石が充填されている。本来の裏栗石が20~30cmほどの大きさであるのに対し、新石は上層に砂利のような小型の石、その下には拳大の石が敷かれている。

C・D面角部

原位置を保つB-C面の角部の石垣の裏側に開いた直径70cm程度の穴である。石垣目地からの土砂流出による陥没とみられ、内部には拳大の栗石が充填されている。石の状況から一連の石垣修理工事に伴い詰め込まれたようである。

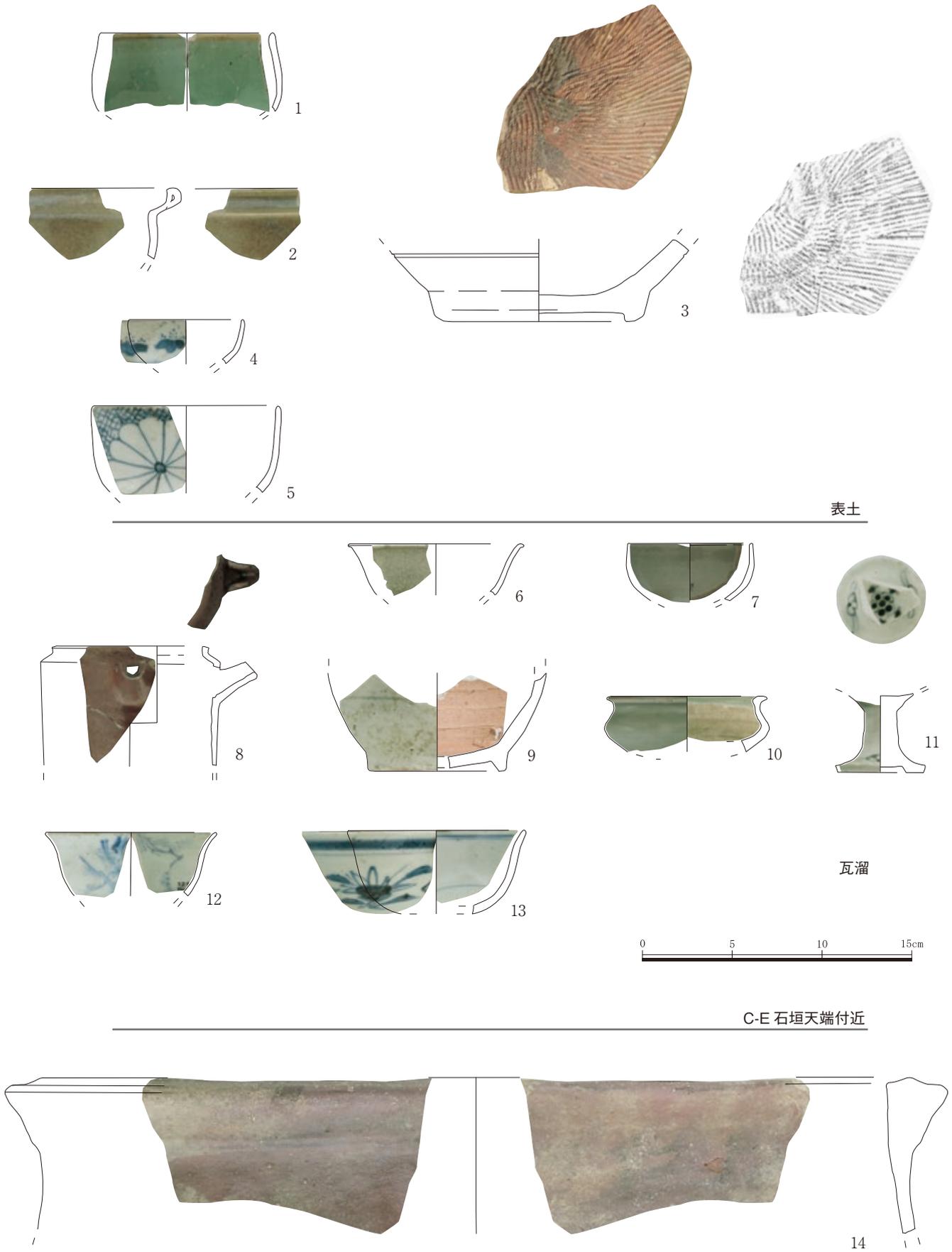
D-E面

D-E面の角部からD面側に2.7m、E面側に1.8mの範囲は大規模な積み直しが行われている。角部を中心にしてV字状に修理が行われており安山岩製の石材が積まれている。天端から7石、大半の石が入れ替えられているが、城解体以前および戦前の写真にはそれぞれ異なった石垣が写っており、戦前までに一度積み直されている可能性がある。石垣の背後は幅70cmほどまで拳大の栗石が充填されている。

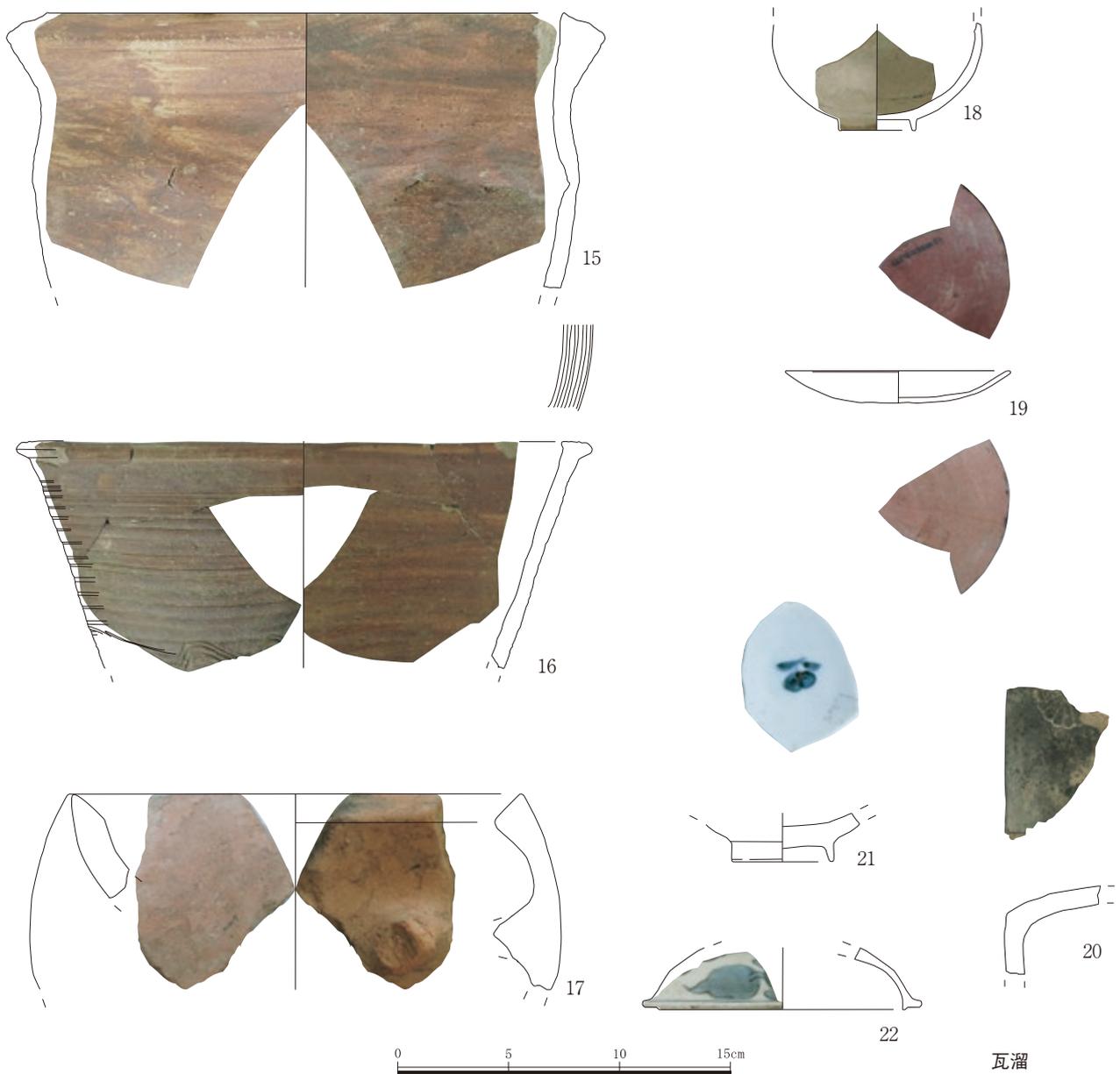
3 まとめ

第2調査区平面をみると石垣が3方向に亘って凸状に突出していることがわかる。A~B面中央付近にかけての石垣は昭和49年の修理により大規模に積み直しが行われており、本来の石垣天端高はわからないが、土層断面観察より7.3m付近にあったと想定される。B面中央~C面~D面中央付近までの現存石垣の天端高は7.4m~7.5m~7.6mと門側へ向かい緩やかに上る。D面中央~E面中央付近までは積み直しのため明確ではないが天端高は7.8m前後であったとみられる。また、E面中央付近では40cm程の段差がついて一段高くなり、F面天端高は8.6m前後となる。E面は中ノ御門表門と接する場所であり、第1調査区にも同様の段差があることから対をなすものであると考えられる。

F~J面石垣天端高はほぼ近い数値にある。E-G面角部の天端高は8.6m、G面では緩やかに上り8.8mのH面へと至り、I-J面角部の8.6mへかけてI面では緩やかに下降する。中ノ御門櫓門と接するH面付近が最も標高が高く、A面付近との比高差は1.5mとなる。



第42図 第2調査区出土遺物実測図1 (S=1/3)



第43図 第2調査区出土遺物実測図2(S=1/3)

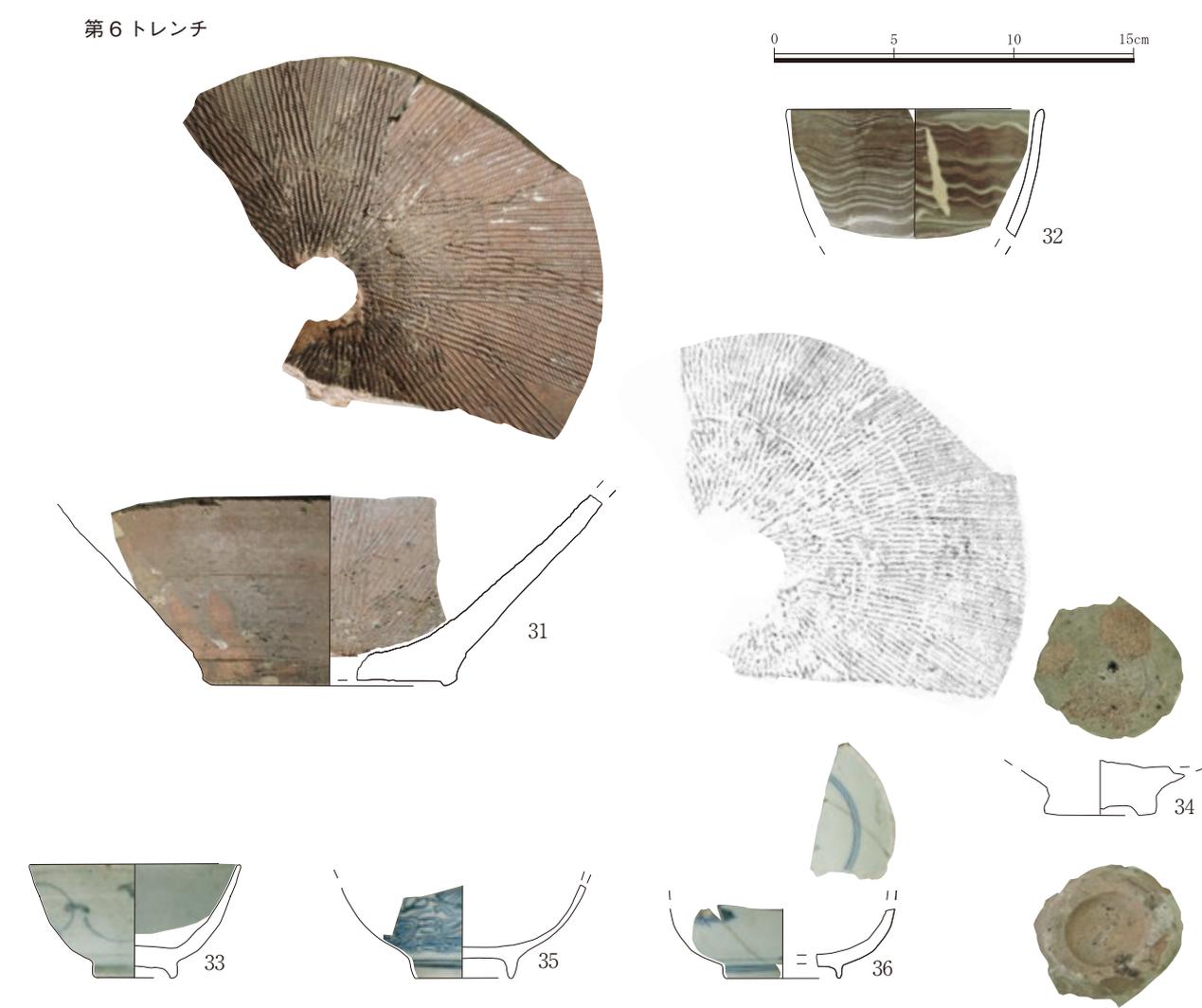
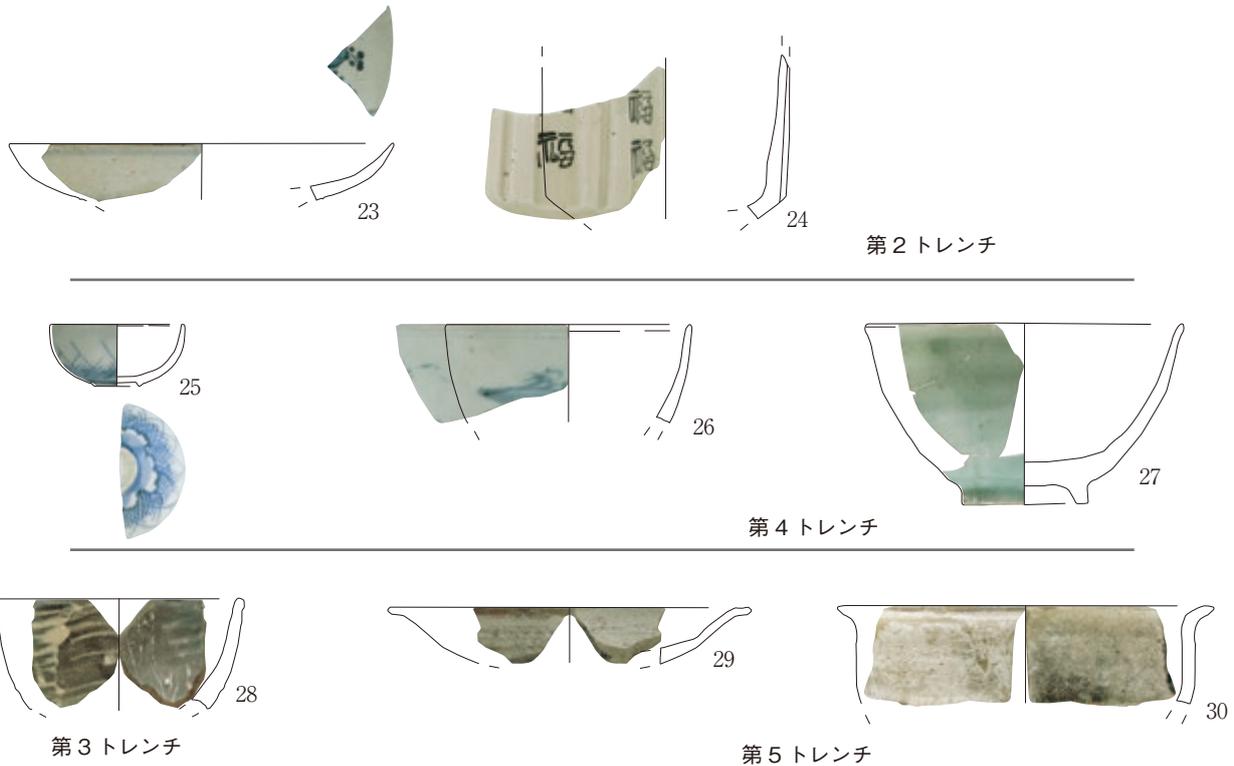
4 出土遺物

(1) 土器 [第42～45図]

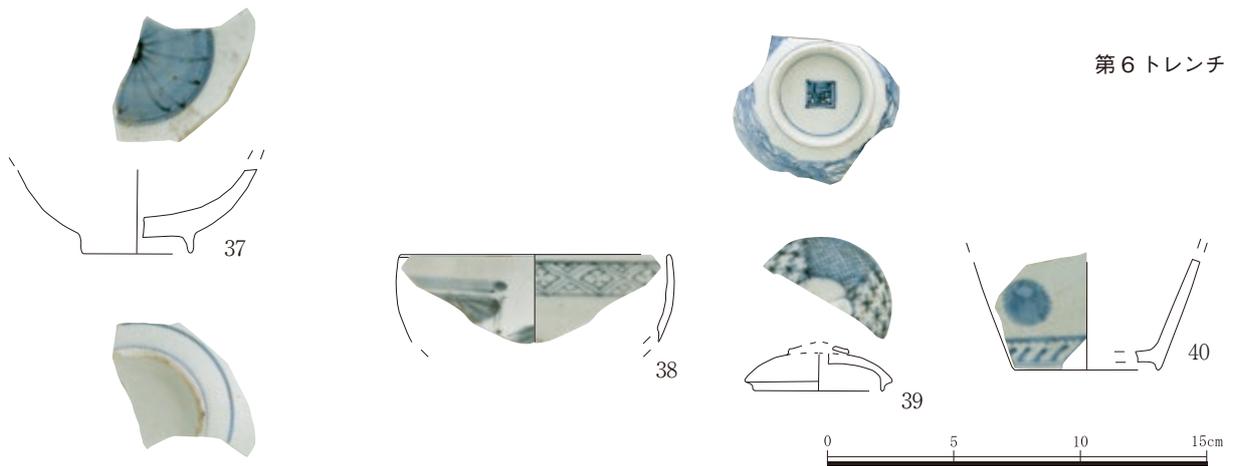
1～5は表土からの出土である。1は表採であるが、2～5は後述のE面石垣上の瓦溜付近からの出土であり、一連の遺物である可能性が高い。1は碗で緑灰色を呈す。2は在地系の鍋。3は播鉢の底部。高台内に圧痕はみられないが、須佐系に類似する。高台が付き、見込み部分には全面スリメがみられる。4は磁器碗で外面は桐文が並列する。5は肥前系の碗で外面には菊花文。

6～13はC～E面にかけての残存石垣の天端付近出土。6・7は碗。8は瓶、9・10は壺。11は肥前系の仏飯具で見込みには五弁花。12・13は碗で、12は内外に折枝文、13は外面に花文。

14～22はE面上、門脇に廃棄された瓦溜からの出土である。14・15は越前甕で鉄泥を施す。16も越前系の鉢であり、外面には僅かに波状文が残る。17は焙烙。口縁から胴部へかけて斜め方向に切り込まれる。18は在地系の碗。19は土師皿である。20は方形状箱物の蓋。瓦器のような本体に菊文が施されてい



第44図 第2調査区出土遺物実測図3 (S=1/3)



第45図 第2調査区出土遺物実測図4 (S=1/3)

る。21は見込みに花文を描く。22は蓋。

23と24はTr-2出土。23は皿で内面には花文。在地系か。24は筒型の鉢で外面に福字を並べる。内面に釉は掛からないことから、壺状のものである可能性もある。

25～27はTr-4出土。25は坏であり、外面には薄状の草文が続く。26は在地系の碗。27の青磁碗は口縁から底部が残っており、器高は7.1cmを測る。

28はTr-3出土の肥前系碗であり、内外面ともに刷毛がみられる。

29・30はTr-5出土。29は皿で30は鉢。

31～36はTr-6出土。31は播鉢。17本1単位のスリメが施される。見込み中央には孔があげられていることから、最終的に植木鉢に転用されているようである。須佐系か。32は肥前系の碗、内外ともに波状の刷毛が施される。33も肥前系の碗。34は底部片。35は肥前系の磁器碗で外面には雲文。36は肥前系の碗。

(2)瓦[第46～49図、図版21]

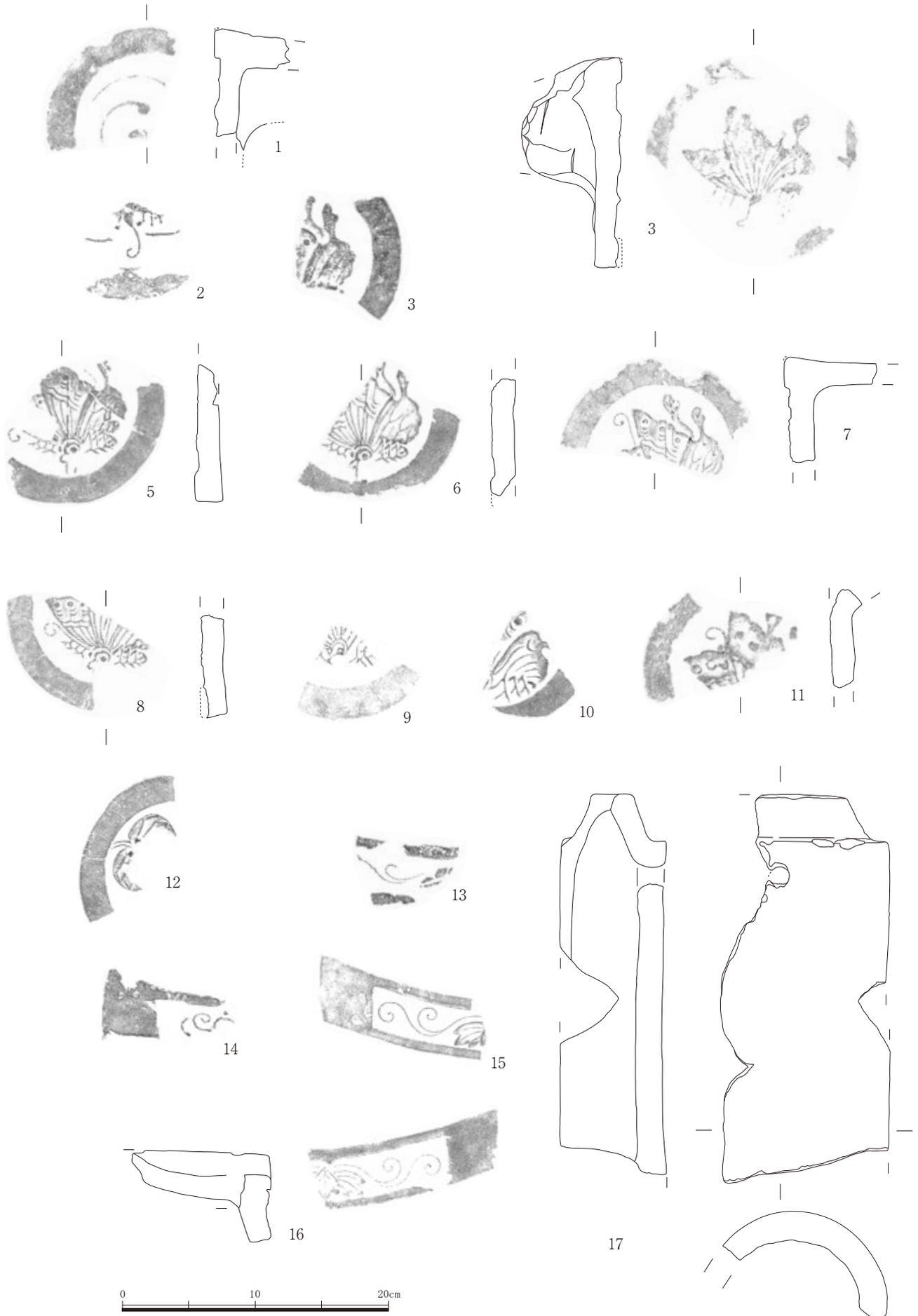
1～12は軒丸瓦である。1は三巴文である。瓦当面が広く珠文は伴わない。2はB類であり、蝶の顔部分を僅かに残す。3はC類であり、軟質焼成。止蝶となった最初の形態である。4はD類か。5～9はE類である。細線で描かれたこの種は、これまでも多数見つかっているが、その大半には中央付近に縦方向の範傷がみられる。10は出土例の少ないL類である。翅中の脈のひとつが“Y”字形になるのが特徴的である。11は小片のためか、どの種に該当するか不明である。前翅中の珠文が翅より若干はみ出している。12は葵文である。1825年以降使用が認められたものである。

13～16は軒平もしくは軒棧瓦である。13はc類、軟質焼成の三葉文である。14は硬質のh類か。15・16も硬質のn類である。

17は唯一図化できた丸瓦である。軟質焼成でやや厚みがあり、高さ8cmと高い。また直径1.5cm程の孔を持つ。

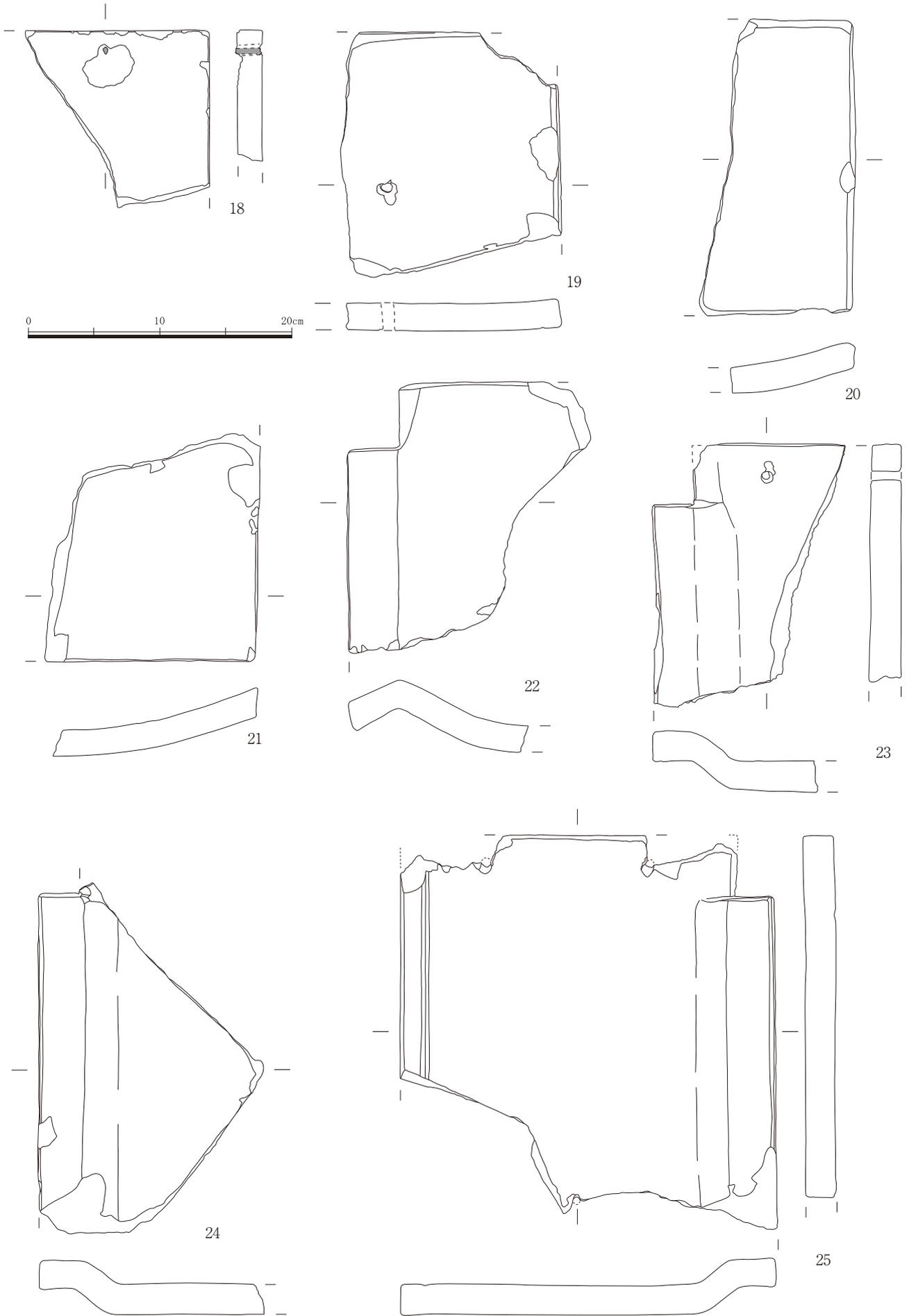
18～21は平瓦とも考えられる個体である。扁平な形をとり、端に寄った孔には5mm四方の角釘が残存する。19も扁平であるが、中央付近に孔があることから目板瓦の可能性もある。20・21は断面形が弧状を描く。21は長さが23cmである。棧瓦とも考えられるが、端部に切り込みはない。

22～27は棧瓦である。22は右棧瓦で切り込みを持つ。23～27目板瓦である。23・24は右棧で23は角に寄った位置に孔を持つ。25・26は左棧である。25は残りが良く、幅25cm、長さは30cm以上である。棧の対面には縦方向の断面“V”字状の溝を持ち、下方中央に1孔、上方左右に1孔ずつの計3孔を持つ。27は右棧であるが断面が2段重ねとなる形である。上方の片側に寄った位置に孔があるため、複数孔を

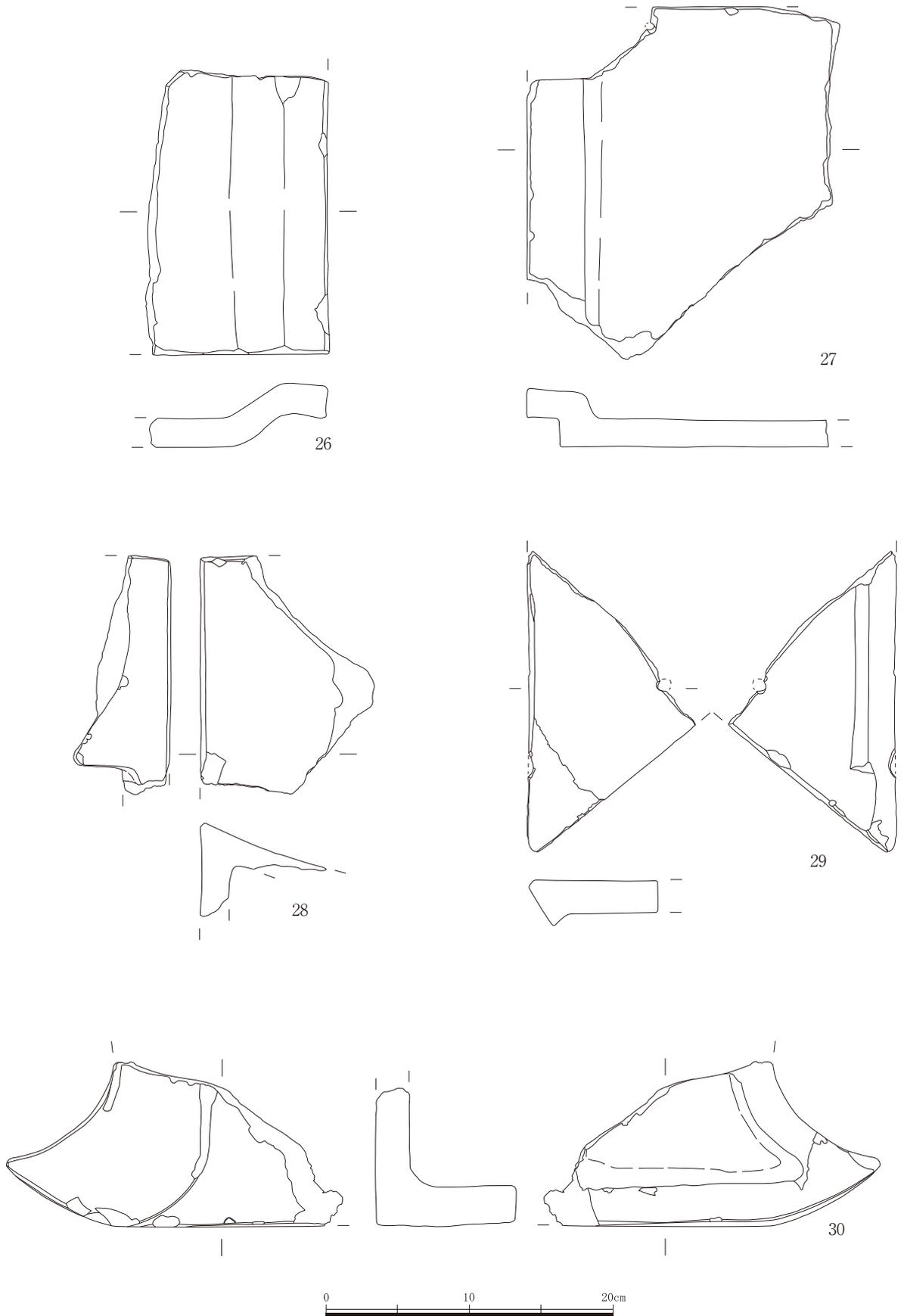


第46図 第2調査区出土遺物実測図5 (S=1/4)

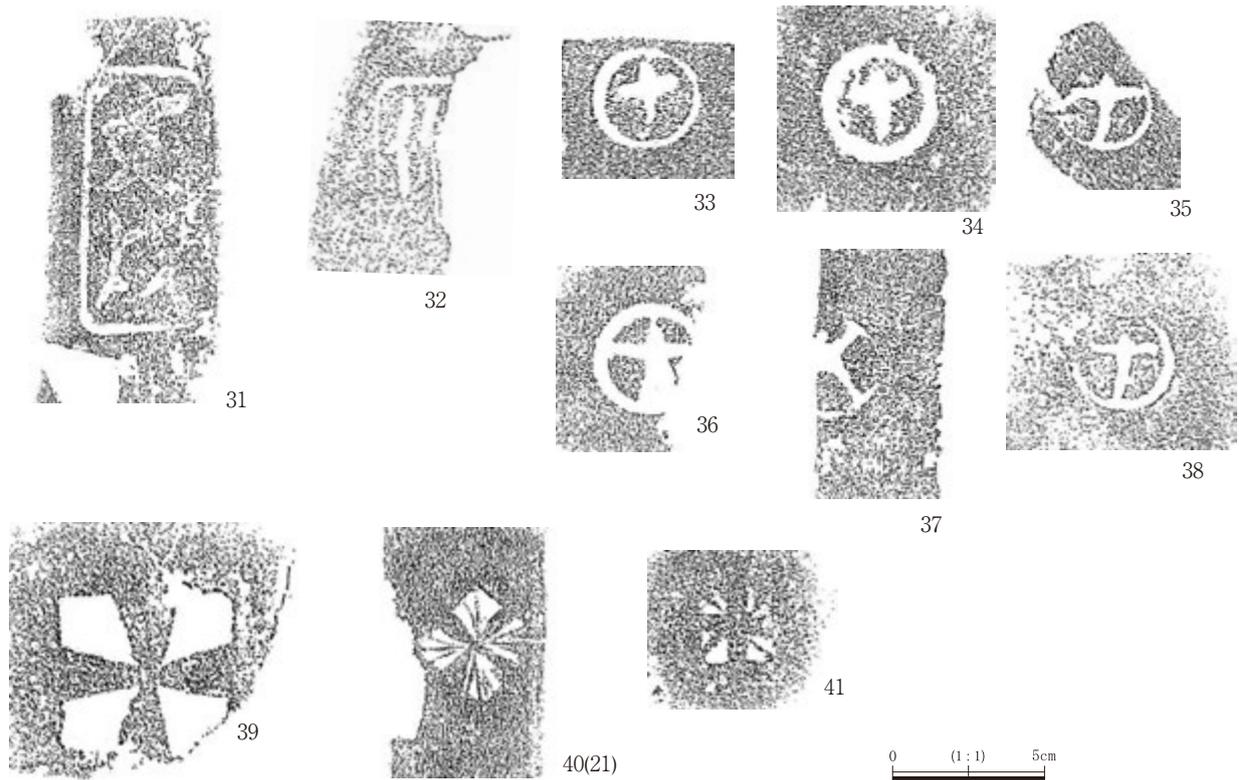
III章 調査の成果



第47図 第2調査区出土遺物実測図6(S=1/4)



第48図 第2調査区出土遺物実測図7 (S=1/4)



第49図 第2調査区出土刻印瓦拓影(S=1/1)

もつものとみられる。

28は右袖瓦で、袖部にはかろうじて切り込みの縁が残る。29は角瓦。断面形は裏側が三角形状に若干突出し、中央付近に孔を持つ。

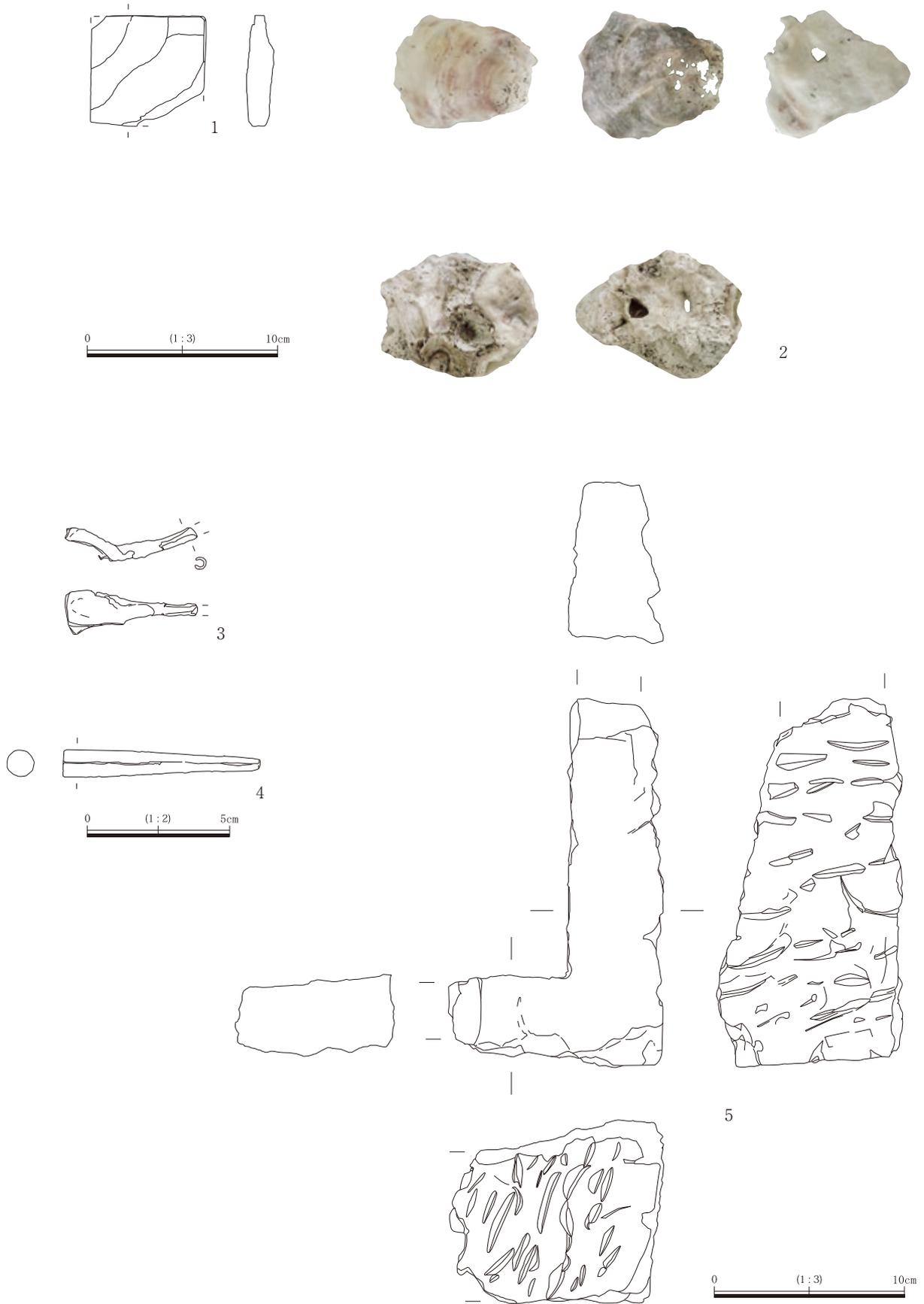
30は鬼瓦の裾部片である。

第49図は刻印瓦の拓影である。漢字には「文戌」「作」がある。「○に十」も様々である。菱形については、39のように大型で内部は無文のものや、40のように内部に3本の線を持つもの、41のように中央線だけのものがある。

(3)その他の遺物[第50図]

1は砥石で正方形を呈する。2は瓦溜より出土した貝。3・4は煙管の吸口である。3は潰れているが、4は良好に残存しており、全長は6.9cmである。

5は1区でも出土した柱根巻きである。1区のものに近い大きさであり、厚さ5.0cm、高さは若干高く9.8cm程である。現状で内寸は15cm残存している。表面には鑿状工具痕が残る。



第50図 第2調査区出土遺物実測図8 (S=1/2、S=1/3)



写真1 鳥取城跡空中写真(南から、背後が久松山)



写真2 解体前の鳥取城(正面が中ノ御門)

Ⅲ－４ 第30次発掘調査 第3調査区

1 調査の概要

調査面積 75㎡

周辺状況および調査の経過

中ノ御門の北東側60m、太鼓御門の南西26m付近に位置する、太鼓御門枳形の一部である。調査前の段階で塀基礎らしき石材が露出しており、良好な遺構の残存が期待できた。

近世当時、中ノ御門を通過すると太鼓御門へ向けて登城路は登り坂となる。坂道の途中で枳形に沿い一旦右に折れ、すぐに左へ折れると門正面へと至る。この折れに位置する枳形のクランク部分に当たるのが、当第3調査区であり、門と並行方向に造られた突出部である。

坂道の途中にあることから、周囲の石垣の高さはそれぞれ異なっており、中ノ御門側の正面は比高差が4.2m程であるのに対し太鼓御門側は最大1.6m程度である。石垣は、嘉永3年(1850)頃の改修により積まれた城内唯一の切石積み石垣である。登城路の目立つ場所に位置するため視覚的な効果を考慮して築かれたものであろう。

報告に際しては、石垣の各面に対し任意にA～Gの番号を付けて行う。

C～G面にかけての石垣内側については、遺構の一部が露出していることから、後世の土砂の堆積は非常に少なく5cm程度の表土部分しかみられなかった。しかし、全体的に石垣の天端面より遺構面が20cmほど低いのは、石垣側より土砂が流出し、全体の地盤が下がったためとみられる。流出はE面側で目立っており、角部へ向かい顕著である。

一方調査区の北東側、溝状遺構上部を中心にして栗石状の石が厚く堆積することを確認した。この堆積により溝は埋まっていることがわかる。昭和18年の鳥取大地震では周辺の石垣が大きく崩壊していることから、その際の廃棄層であった可能性がある。

2 調査の結果

平成20年度に実施した第18次調査ではTr-1付近の位置を調査しており、溝の存在および厚い石の堆積は明らかとなっていた。調査ではこの堆積を除去するとともに、石垣沿いに一部を露出していた控柱の根巻きとみられる石材の確認に努めた。溝付近を除いた部分の堆積は少なく、5cm程度の薄い表土を除去すると石材の全容が明らかとなった。調査区内には3ヶ所のトレンチを設定した。

(1)第1トレンチ(Tr-1)[第53図、第16図]

調査区の中央付近、G面石垣沿いに設定した幅1.0m、長さ3.3mのトレンチである。第18次調査にて同地点にトレンチを設定しているが、範囲を若干広げて深くまで掘り下げを行った。1層は栗石が多量に詰まった層であり、2～4層を切り込む形で広がる。拳～人頭大の石の集積は標高11.0m、現地表付近から50cm以上も厚く堆積しており、天端高10.6m前後の溝まで達する。また、標高10.2mの溝底まで同層がみられることから、この堆積により溝の機能が失われたことがわかる。

表土である2層は1層と合わせ正面石垣へ向かい緩やかに上昇する。その下部、2層と同じ角度で上昇する3層は近代の堆積土とみられる。さらに下層の4層に入ると状況は変わる。溝石の天端上に堆積する層は厚いところで20cmとなり内部には多量の瓦を包含する。さらに下部の5・6層も一連の層とみられ、上層から深く入りこんでいることがわかる。瓦の集積は調査区内の同標高付近に広くみられることから、塀解体時の廃棄層であると考えられる。

7層は廃棄層の下部にあり、黄色系を呈する硬く締まった整地層であり、溝石の天端につながることから近世～近代まで使用された面であると考えられる。上面の標高は10.6mの溝石上より緩やかに上昇するようであるが、4～6層の攪乱により大部分を失っている。その下部、標高10.5mを上面にして40cmの厚みで水平方向に敷かれた8層もまたブロック状に土が混ざり合う整地層である。最下層の9層も固く締まった整地層である。8層下より傾斜をつけて上る層である。G面石垣根石下にも続くことから、石垣を設置する際の基盤となった層であろう。

(2)第2トレンチ(Tr-2)

調査区南西側、塀裏側と登城路との関係を明らかにするため、D面裏側から調査区を横断する形で設定した幅1.5m、長さ5.0mほどのトレンチである。石垣裏側に雁木が描かれた古絵図があるため、その確認を目的としている。

D面石垣は天端石が若干動いている箇所もあるが標高11.6mである。裏側はD面裏側全体に言えるが、表土上に裏栗石が露出している部分が目立つ。裏栗石は地形の傾斜に合わせ緩やかな傾斜をつけて入れられており裏側1.5m程の範囲に充填されている。トレンチ中央付近には50×60cm、厚さ50cm以上の石垣石材のような大型石がみられるが、周囲に連続する石もなく、性格は不明である。この大型石の北東側にはTr-1の4～6層の続きとみられる大きな攪乱がある。内部には拳大の石をはじめ多量の瓦が包含されており、一度に廃棄された状況を呈している。その下部、トレンチ床面は黄色系の整地層であり、Tr-1の7層の近世最終面と対応してくる。攪乱により床面は一旦窪む形となるが、標高10.7mの溝石天端へと接続する。雁木の痕跡は確認できなかった。

(3)第3トレンチ(Tr-3)[第53図、図版15]

調査区の西側、E～G面の櫓台状部の内部状況の確認のためにF中央からD面へ石垣を横断する形で設定した幅40cm、長さ4.7mのトレンチである。地表面の標高はD・F両面の石垣天端面が11.6mに対しD面側が11.3m、F面側11.4mと近い位置にあり、天端高よりは一段低くなる。

トレンチ内は表面の土を10～15cmほど掘り下げると、一面に拳大ほどの石群が現れる。これらは、直接両面の裏栗石とつながることから、一連の栗石とみられる。この櫓台状部の内部は総栗石を基本とし、表面部分に土が乗る構造であることを確認した。

(4)溝状遺構[図版15]

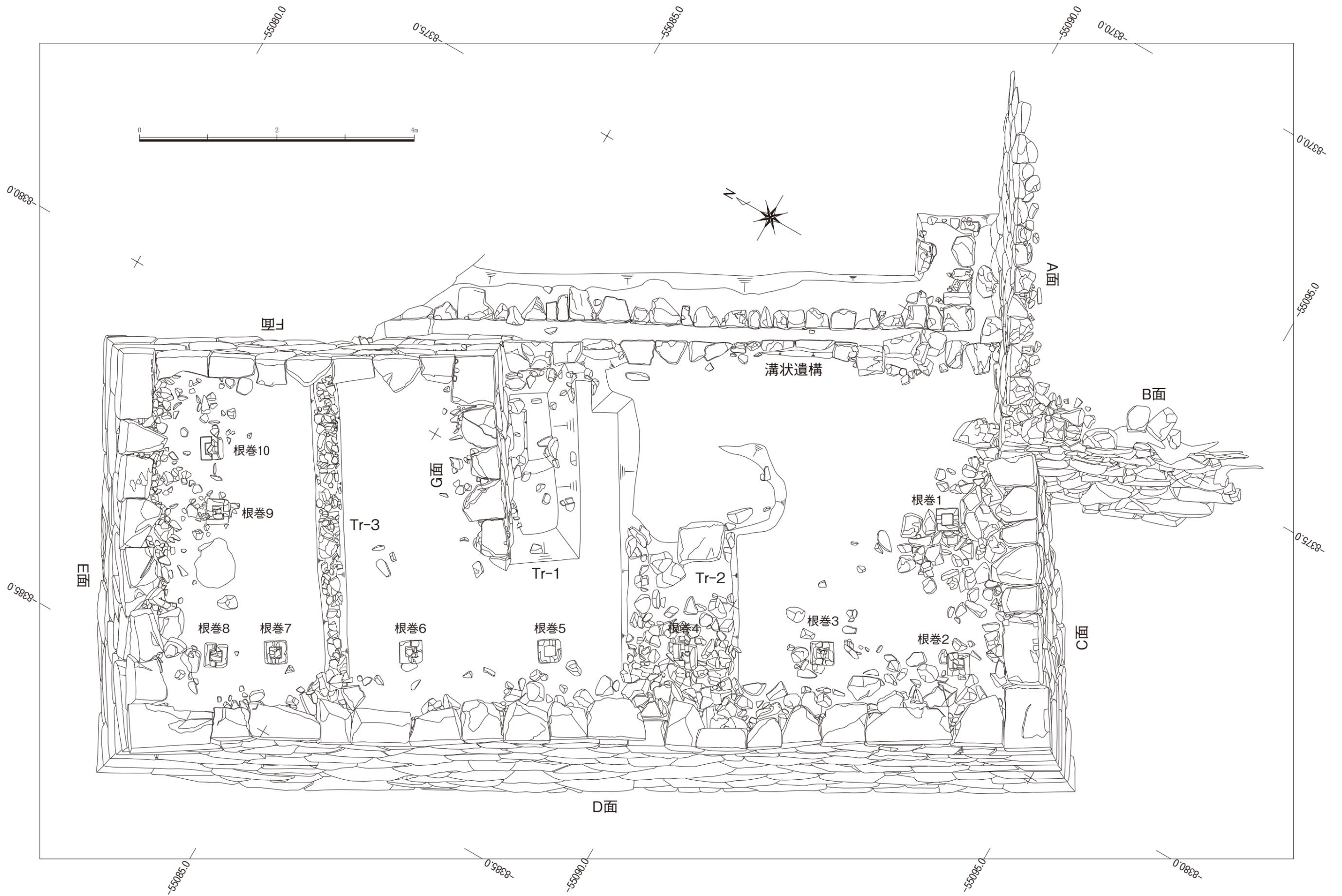
調査区の北東側、F面沿いからA面へ垂直方向に伸びた後、A面沿いに折れて続く。内幅30cm、深さは平均40cmほどであり、F面側の最深部で60cmを測る。20cm程の小型のものから石垣石のような大型のものまでを用いて組まれている。石を対面させているがA・F面前では石垣が直接片側の側壁となっている。D面側の石列は溝底部まで1石であるものが多いのに対し、対面の北東側は上部に扁平な石を置いた2段積みが目立つ。ほぼ原位置を保っているが、南東側A面付近の石は一部が溝内へ向かい倒れ込んでいる。先述の通り内部および上部には多量の石で埋まった状態であった。

第18次調査ではより北東側のA面沿いの調査を行っており、20m先の太鼓御門櫓台下や、10m先でも一連とみられる石列があることから、A面沿いには溝が続いていたと考えられる。登城路の端部にあたるA面沿いを下りF面沿いに折れて下部へと流れていたようである。

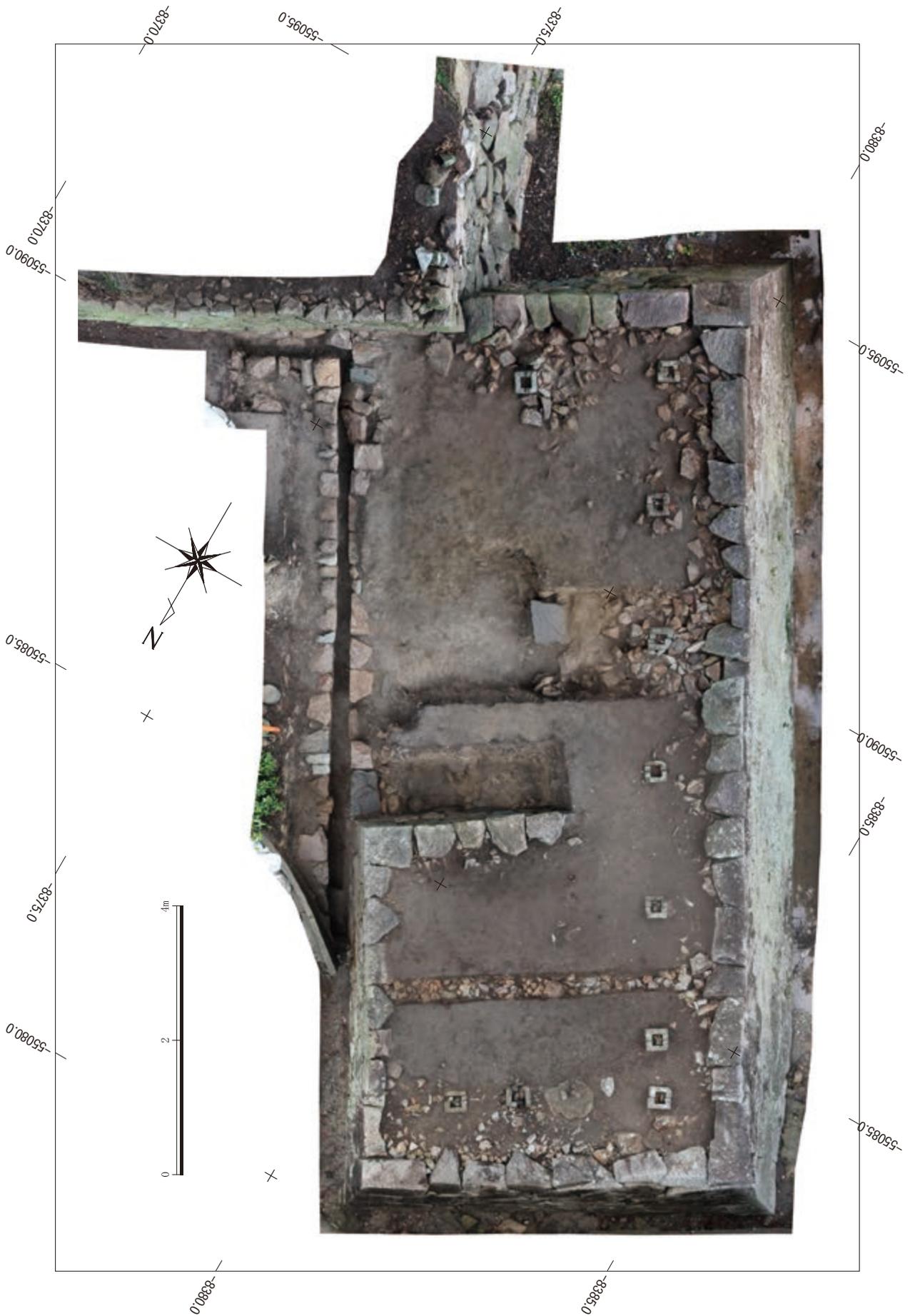
(5)控柱根巻き[第51図、図版17]

C面裏側からE面裏側にかけて計10基を確認した。柱の根元を保護するために使用されるものであり、これまでも城内各所で発見されている。角にあたる根巻き2・8を除き、他の8基は石垣天端石の前面から中央部までの距離は130cmである。

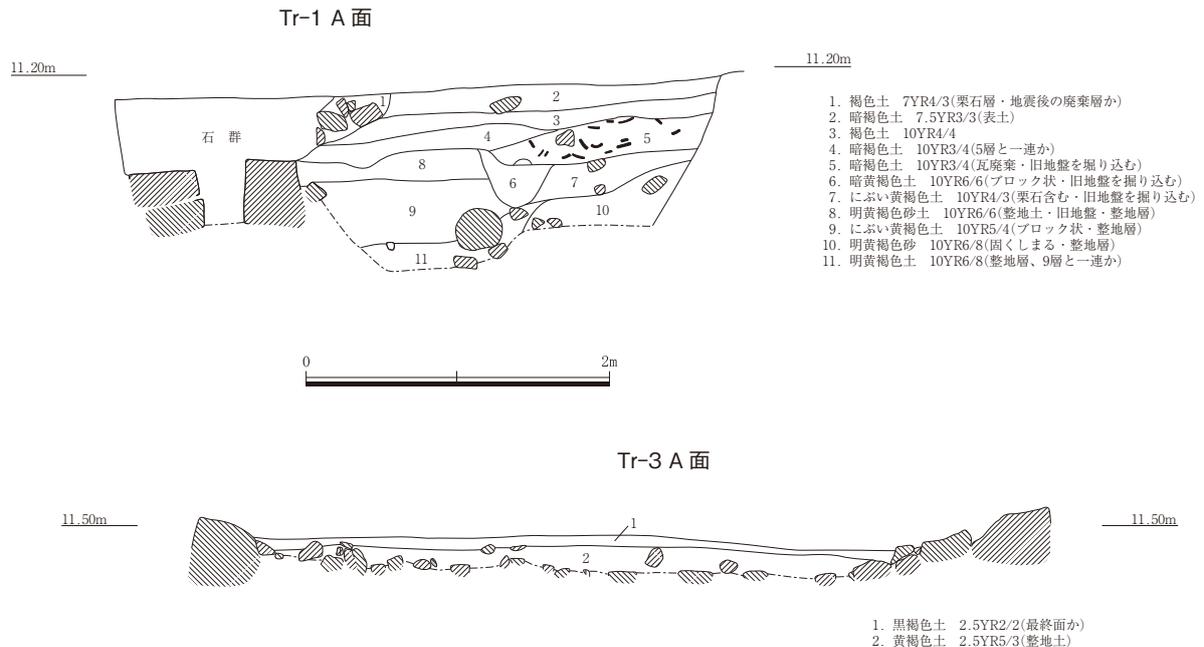
根巻きは“コ”の字形に加工した緑色凝灰岩を向かい合わせて使用するもので外寸が34cm、内寸は15cm四方の正方形である。石材は丁寧に加工されており、Tr-2での調査の結果、高さは30cm以上あり、根元は石垣の裏栗石の中に埋め込まれていることから、石垣と一体的に構築されたものと考えられる。



第51図 第30次調査第3調査区平面図(S=1/50)



第52図 第3調査区オルソノ(S=1/80)



第53図 第3調査区第1・3トレンチ土層図(S=1/50)

垂直方向に設置されていることから、直立する柱用であったことは明らかである。向かい合った2つの石材は合わせ目を石垣側に向けているようであり、1はC面、2～8はD面、9はE面、10はF面もしくは斜め方向にE面と対応する。石材が脆いため、上面を欠くものが多いが、囲いの中15cmほど下がった位置には柱の根固めとみられる拳大の石が確認できる。また、根巻き中心間の距離は、7-8・9-10を除きおおよそ200cmであり、鳥取での一間(六尺五寸≒197cm)に近い。

(6)近世最終面

溝の上面に接する形で敷かれた土は、一部攪乱を受けた部分もあるが、D面側へ向かい緩やかに上っており、当初想定されていたような雁木はその痕跡も確認できなかったことから、石段ではなく土羽であったことが想定される。

(7)石垣

7面ある石垣はそれぞれ異なった特徴を持つ。A面は横長六角形の石材を亀甲積みにしており、城内他所ではみられない積み方である。一方角を共有するB面および、B面に接するC面は特に特徴的な積み方はしていない。D～F面は城内でもここだけの切石積みである。表面が扁平な石材の辺と辺とを合わせて積まれた精美な石垣は嘉永期の築造であり、城の正面にあり、登城路沿いではもっとも視覚に入り易い場所であったためといわれている。しかし、続くG面は死角になるためか切石積みはみられず、石材の表面には自然面を残す。

3 まとめ

調査区内の遺構は良好な形で残存していた。鳥取城に特徴的な控柱の根巻き石が原位置のままに検出された意味は大きい。本来石垣天端に乗っていた塀は近代に入り少なくとも大正期までは残存していたことが古写真から見て取れるが、今回の調査では背面の構造が明らかとなった。一方で絵図にあった雁木は確認できなかった。描かれたのは切石積みが行われるより前のものであることから、最終的な改変で雁木から土羽への変更があった可能性もある。

4 出土遺物

(1) 土器 [第54・55図]

1～7はTr-1出土。1は播鉢、細筋のスリメが不定方向へ伸び、他のものとは色調、形態が異なる。2は皿で、器壁は非常に薄い。焼成不良である。3は青磁の香炉。4は壺。5は在地系の行平。6は越前の鉢。

8～15はTr-2出土。8は土管のような縁部。9は円筒形の鉢状の一部。10は在地系の小皿。11は蓋であり、外面には灰釉が掛かる。12は在地系の土瓶注口部片。13は在地系とみられる碗。14は外面に花が、15は見込みに虫文がみられる。

16～27はTr-4出土。16は灯明皿で黄灰色を呈す。17も同じく黄灰色を呈する碗である。19は鍋、上部には緑灰色を呈する。20は徳利の頸部。21～27は磁器。21は大皿。22・23は碗。23の外面には文字が描かれる。24は蓋。25・26は皿で、内面に花文、26は外面に唐草がみられる。27は角鉢で内面に花文。

(2) 瓦 [第56～61図、図版21]

軒丸瓦の出土はなかった。1～9は軒平もしくは軒棧瓦である。1は中心文まで細線で描かれたi類である。2～4はq類で中心は多弁花である。5・6はそれぞれ外区に「文卯」「文寅」の刻印を持つ。中心文が残存していないため明確ではないが、これまでに見られない唐草の形であり、q類に近いと考えられる。7は唐草の端部が緩やかに伸びるs類。8は他に比べて比較的残りが良いが唐草の形は他に見られない。僅かに残る中心文は花卉が確認できるがo・p・q類のいずれかであろうか。多弁花は僅かに弁数の異なるものが多数存在しているようであり、唐草との組み合わせも数種類ある可能性がある。

9～11は平瓦もしくは棧瓦の可能性のあるものである。現状で孔はみられない。13・14は釉瓦の棧瓦である。褐色の釉が施される石州系の瓦は因幡地方では文化年間頃より始まったとされ、城内でも燻瓦に混ざり出土しており、両者共通の范型を用いていることも確認されているため、幕末期にはある程度の量が使用されていたとみられる。13は釉の掛からない位置に2孔持つ。14は同じく無釉部分に隅丸方形内に「湖九」の文字を入れる刻印を持つ。

12～23は棧瓦である。16～19は右棧瓦。16は棧の上に切り込みがあり、上辺近くに孔を持つ。17・18は釉瓦である。燻瓦とは異なり器壁が1.6cm程と薄いつくりをしている。19は棧上部の切り込み付近で剥落する。全長は30cmであり、上辺付近に孔を持つ。21～23は左棧瓦である。22は切り込み部分で剥落するが、そこまでの幅は24cmであり、棧部分を足すと幅29cm前後であったとみられる。

24・25は熨斗瓦の可能性がある。24は端部が山形になっており中央に孔を持つ。24は釉瓦であり幅19cm、高さ4cmを測る。裏面には3条程度の断面三角形の溝が左右に並ぶ。

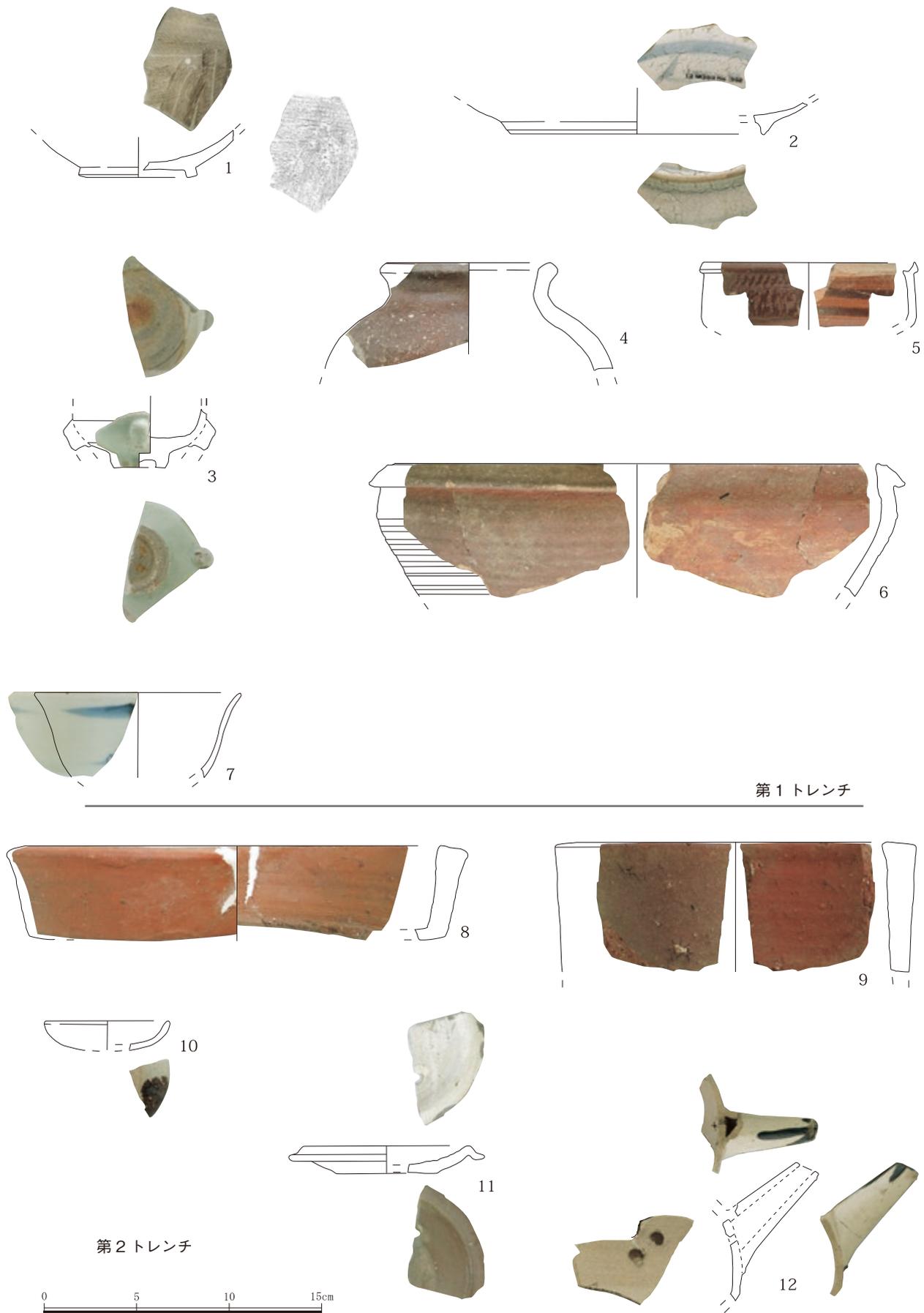
26～28は左袖瓦である。26は袖部分の大半を欠く。27もまた袖部分を欠くが、上下は残存しており、全長30cmである。28は釉薬瓦であり、袖部の高さが最大5cm程と短い。

31は雁振瓦で棧部の先端には「作」の刻印が残る。全長は31cm。

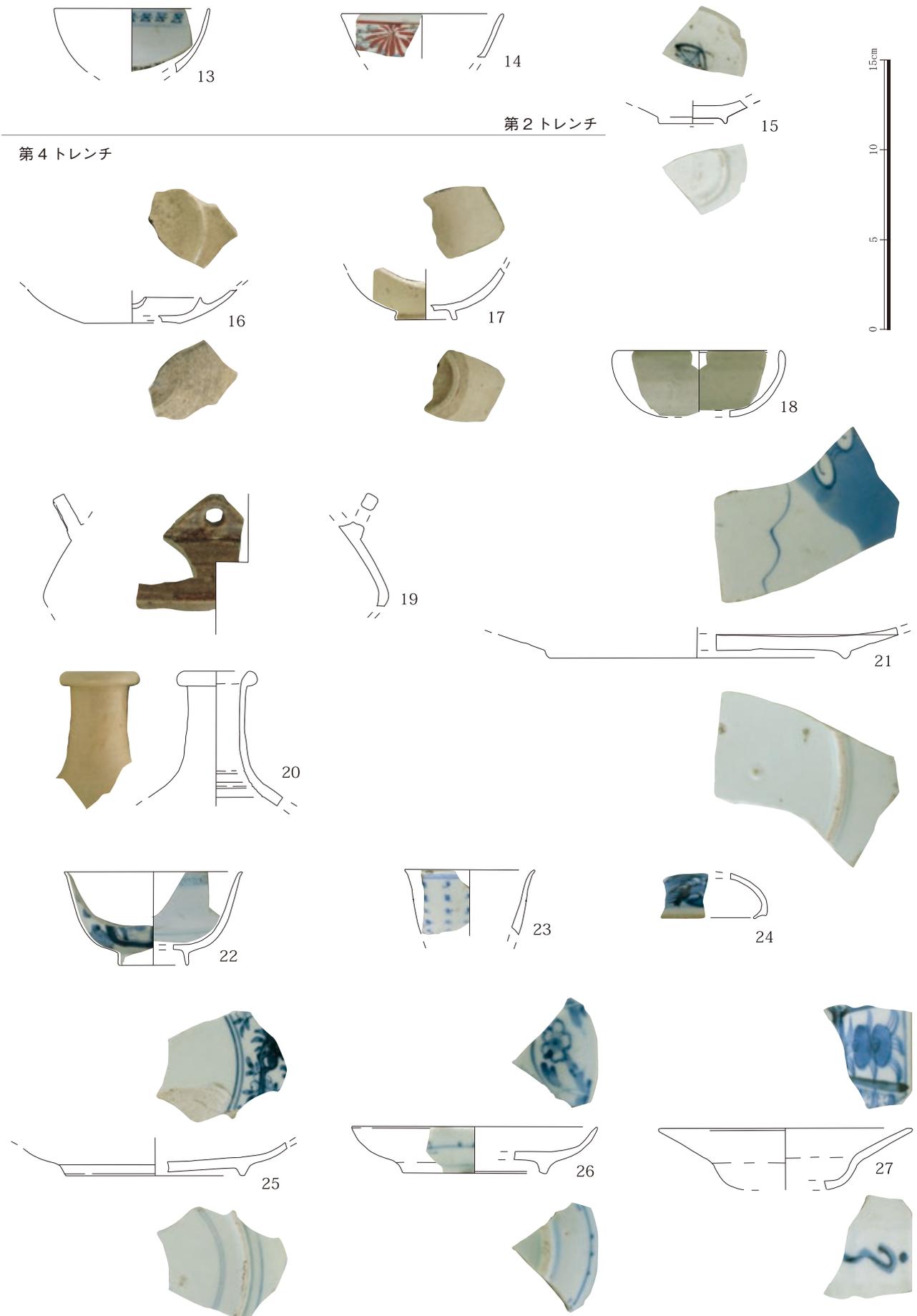
第61図は刻印瓦の拓影である。「文寅」や「作」に加え釉瓦に刻印された14の「湖九」がある。平面図でも明らかなように上辺部に刻印されているが、これは燻瓦には例のない位置である。その他「○に十」「○に二」の他、六角形内に「大」を入れる“因”の字がみられる。

(3) その他の遺物 [第62図]

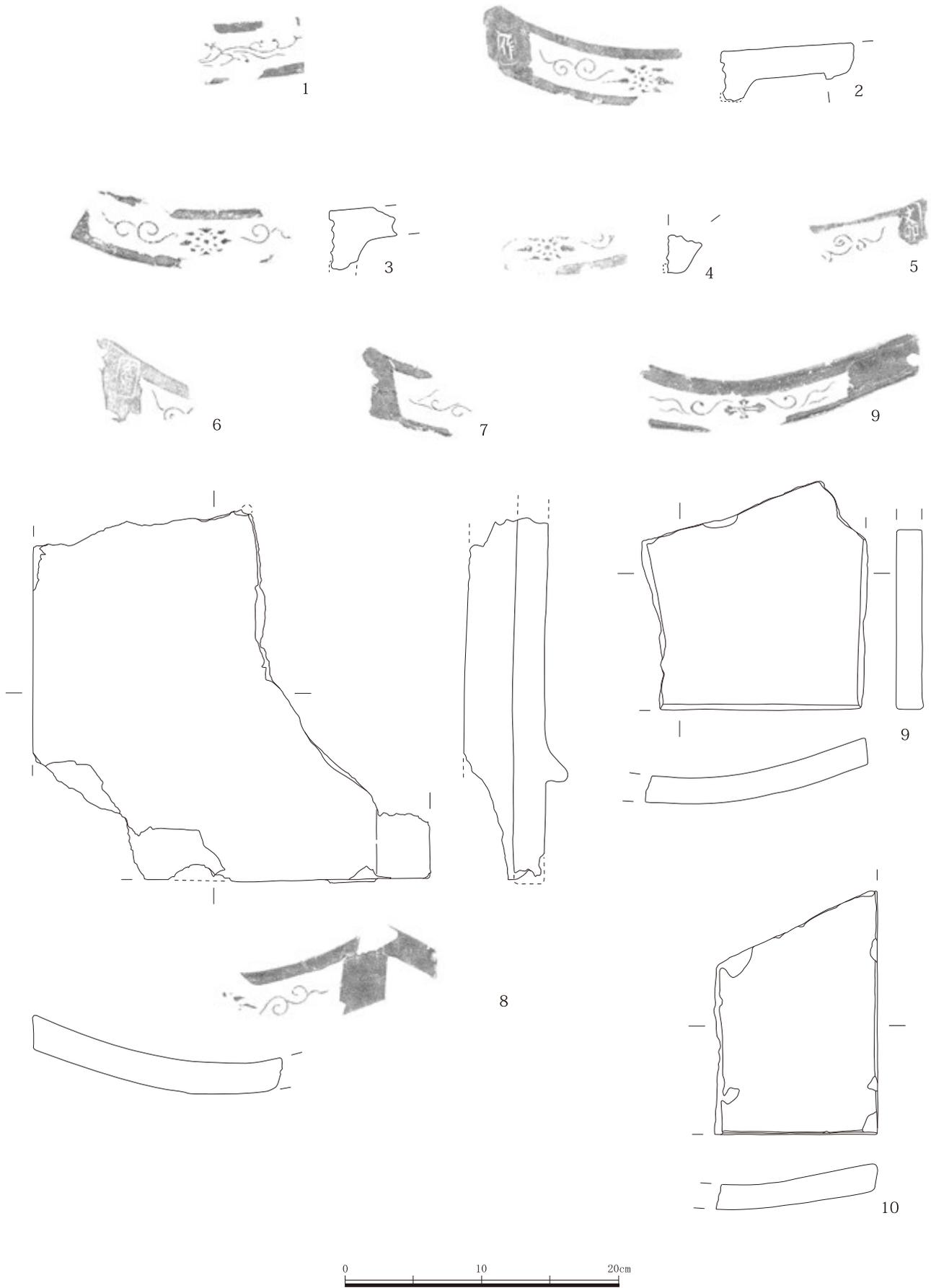
断面台形状の礎石である。緑色凝灰岩を加工したもので表面は平滑に仕上げられている。裾部を欠くものの、復元形は長方形であるとみられる。高さ14.1cmであり、上面には3cm四方、深さ2cm程度のほぞ穴が造られている。同様な礎石も数例の出土があるが、当調査区ではこれのみであり、どの施設に使われていたかは不明である。



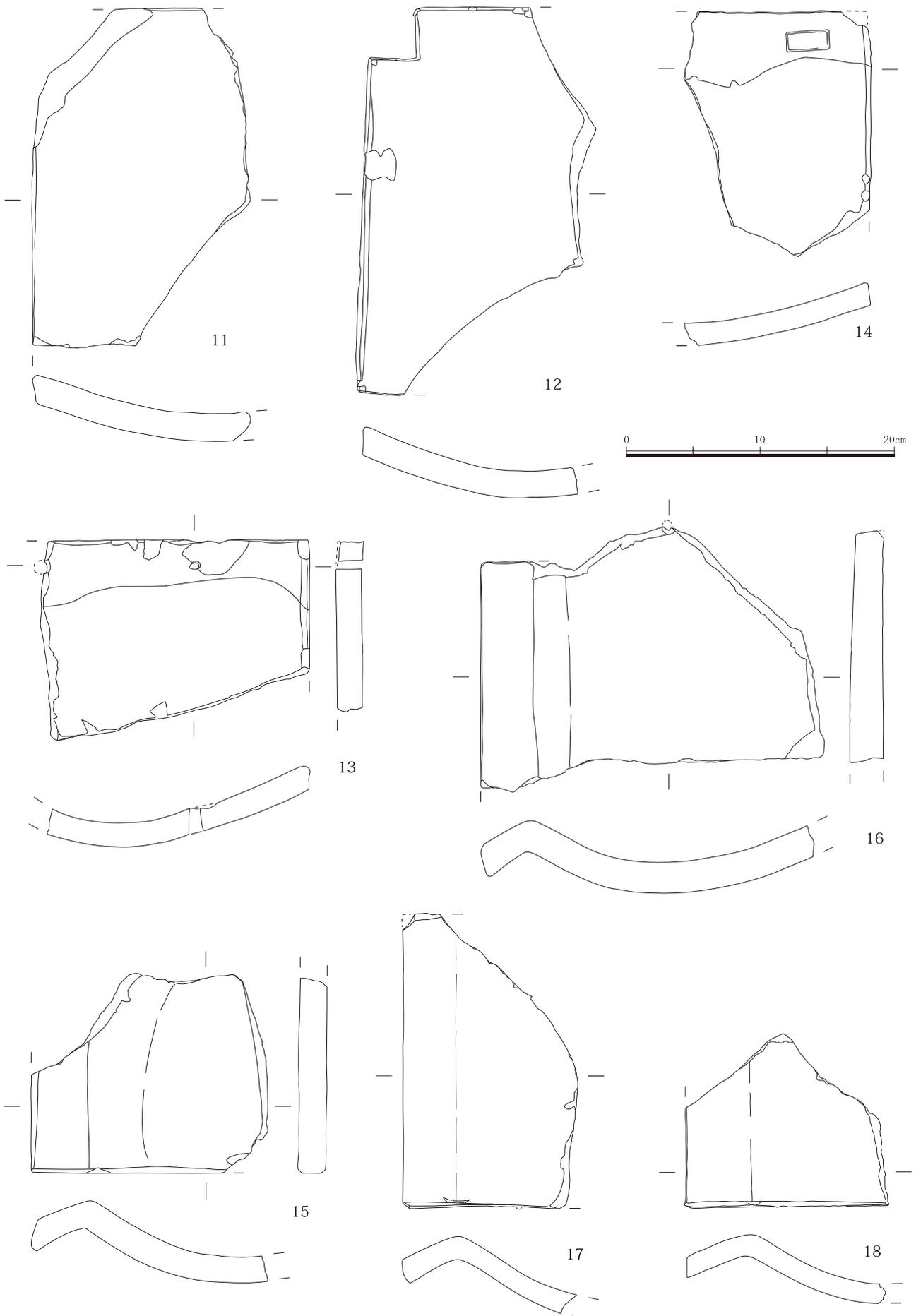
第54図 第3調査区出土遺物実測図1 (S=1/3)



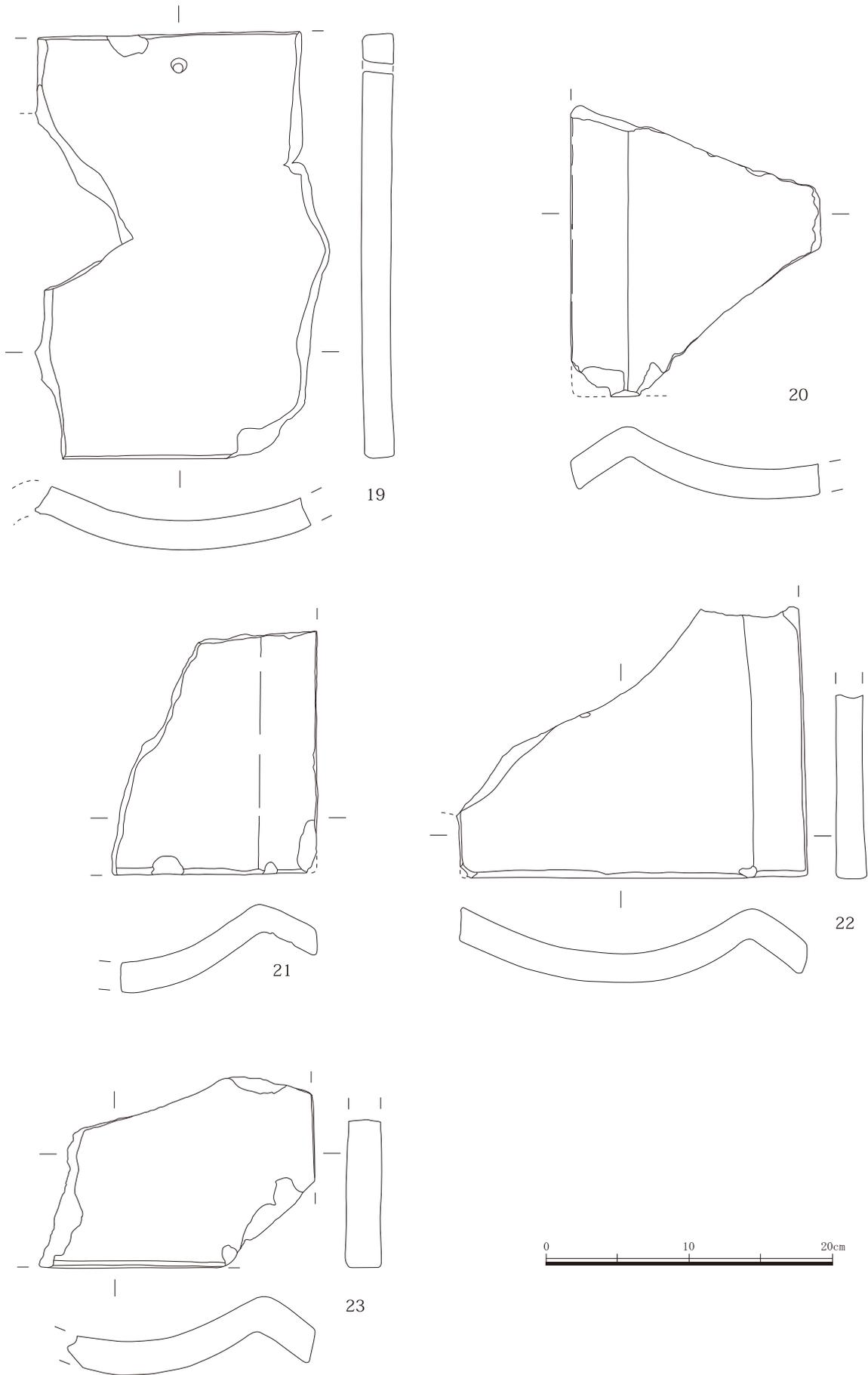
第55図 第3調査区出土遺物実測図2 (S=1/3)



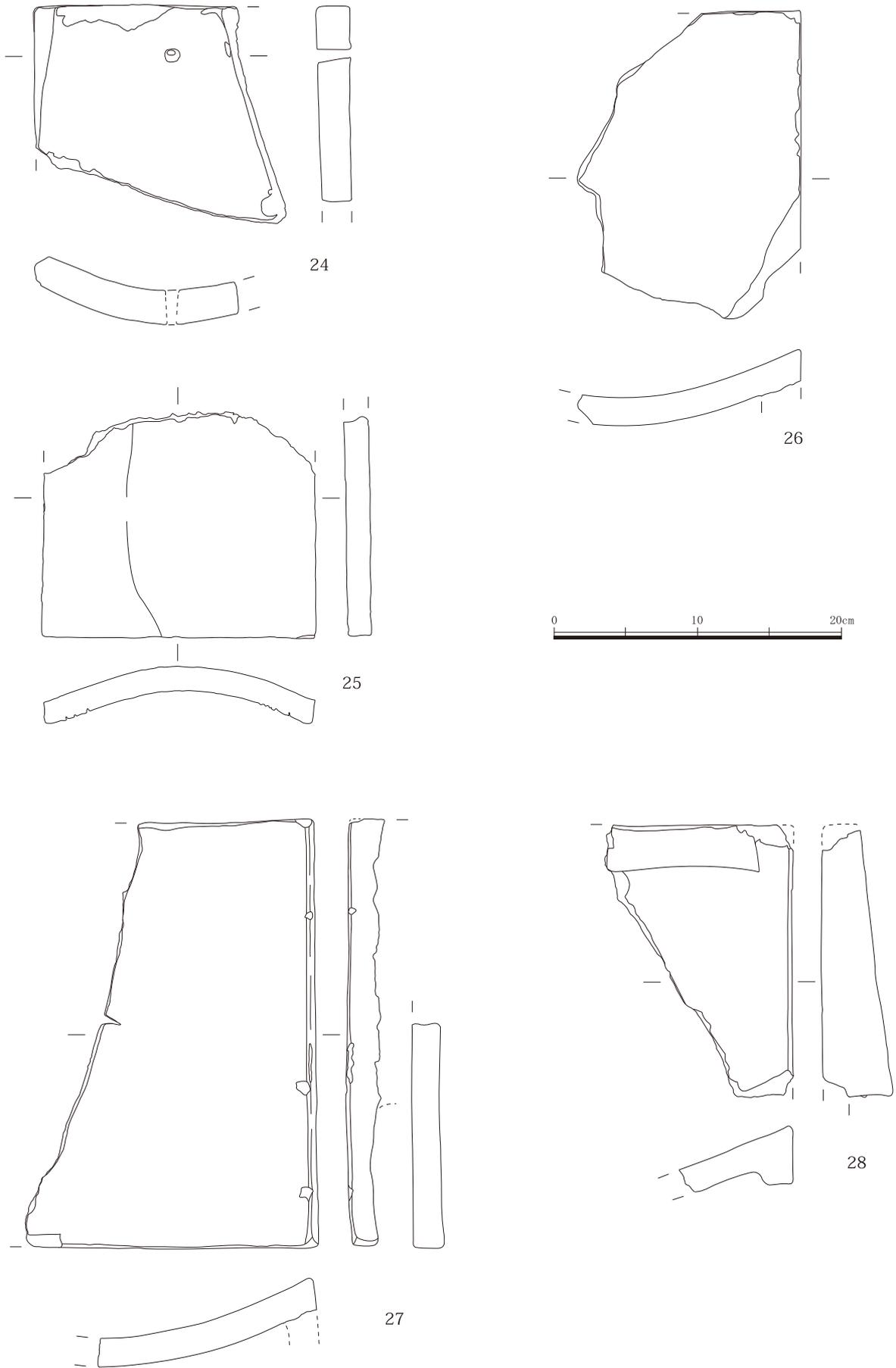
第56図 第3調査区出土遺物実測図3 (S=1/4)



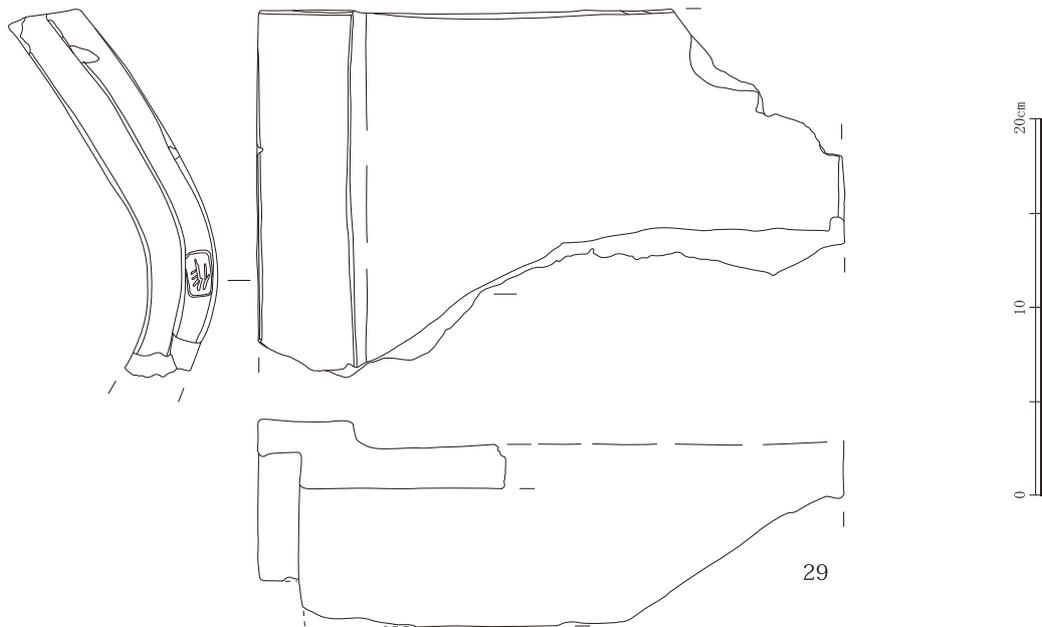
第57図 第3調査区出土遺物実測図4 (S=1/4)



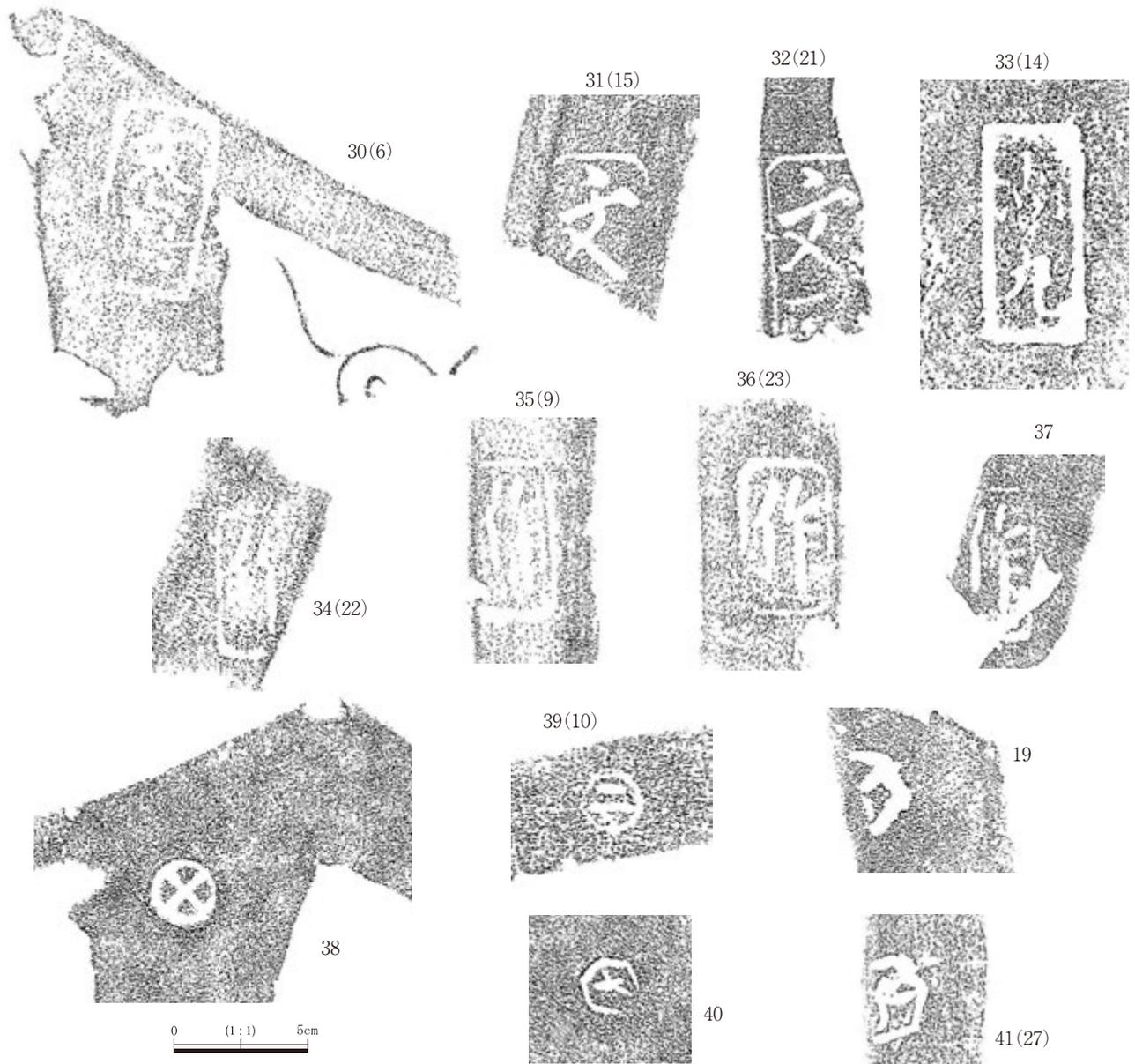
第58図 第3調査区出土遺物実測図5 (S=1/4)



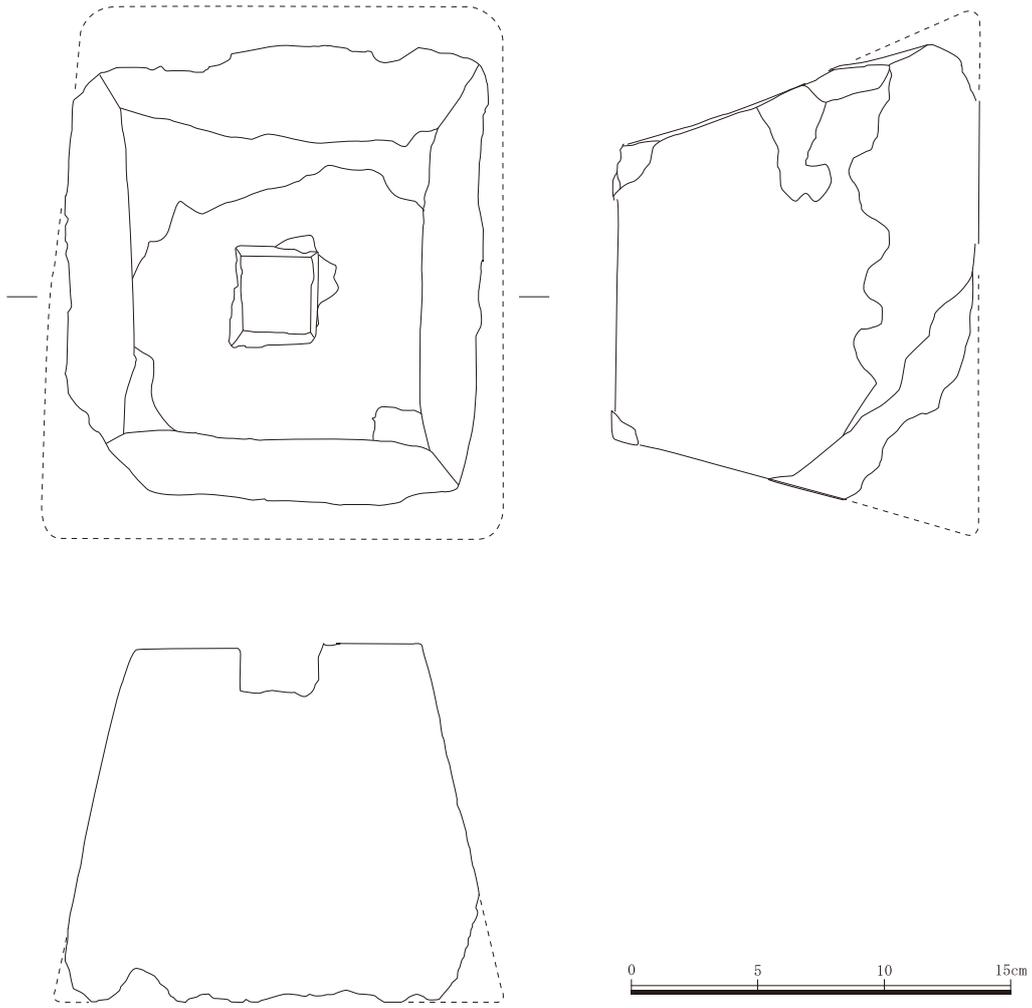
第59図 第3調査区出土遺物実測図6 (S=1/4)



第60図 第3調査区出土遺物実測図7 (S=1/4)



第61図 第3調査区出土刻印瓦拓影 (S=1/1)



第62図 第3調査区出土遺物実測図8(S=1/3)



写真3 地震による崩落状況(第1調査区)

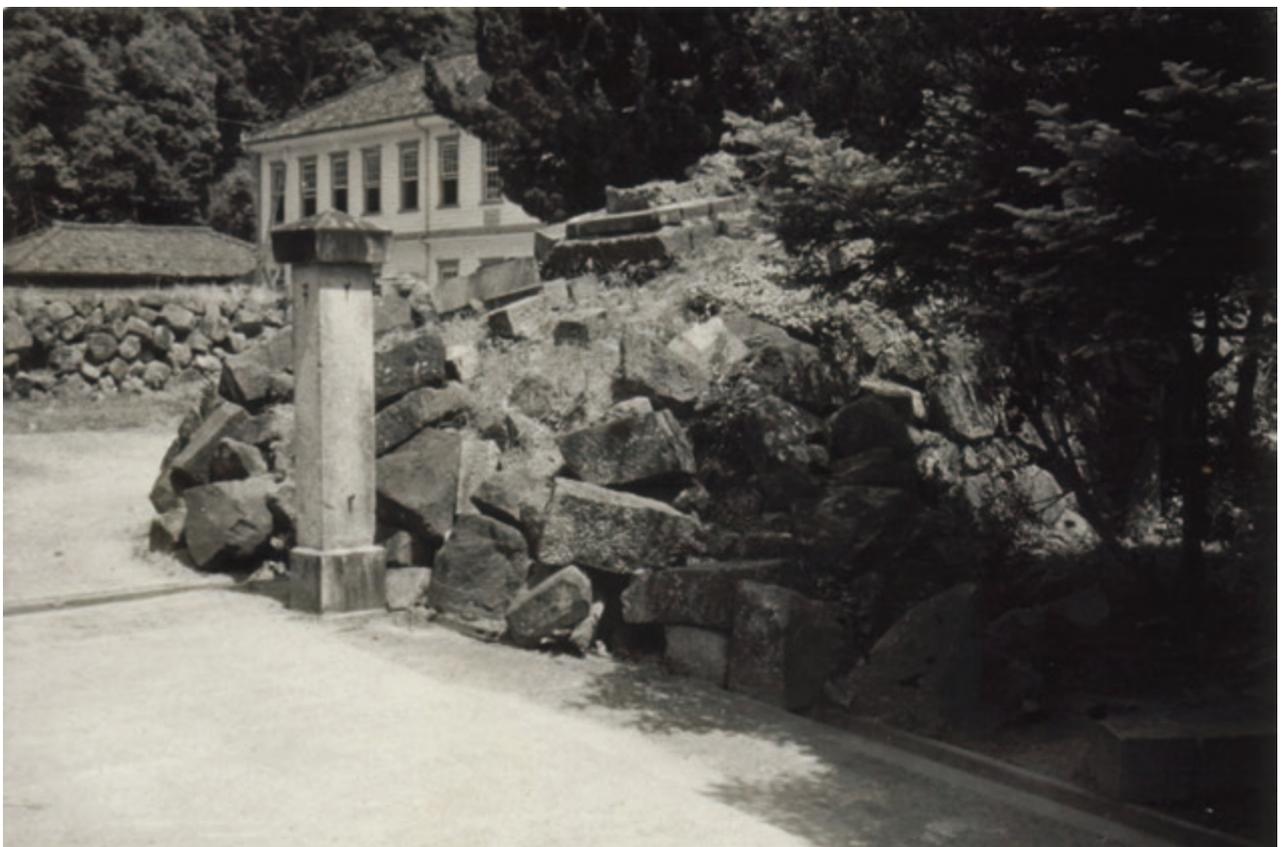


写真4 地震による崩落状況(第4調査区)

Ⅲ－5 第30次発掘調査 第4調査区

1 調査の概要

調査面積 70m²

当調査区は大手登城路を上った先、三ノ丸入口にあたる太鼓御門櫓のあった場所である。独立した櫓台上には対面する石垣上から続く櫓が架かっており、2階建ての2階が櫓、1階が門となる櫓門型式の建物であった。調査範囲は、櫓上の部分であり、建物基礎部分の確認が目的である。

当該地の現況は中央付近に昭和40年代に設置された2×2.5mの行幸啓碑があり、その左右には桜の木が植えられている。また、写真4のとおり、門側の3分の1ほどは昭和18年の鳥取大地震により石垣ごと崩壊しており、現在の石垣は昭和30年代の修理後のものである。さらに、記念碑の下部には戦時中に前後の石垣を跨ぐ規模の奉安殿が建設されていたが、地震で倒壊している(写真4)。本来急傾斜であった階段も同時期に現在のものへと変更されている。さらにそれ以前には日露戦争にともなう忠霊塔も建立されていた。このように、建物・樹木による攪乱範囲が広く、旧面を遺す部分は記念碑から桜までの限られた範囲のみである。

周辺状況および調査の経過

樹木に影響のない範囲で掘削を行った。地表部分には戦後に敷かれたとみられる碎石が敷かれていたためこれらの除去を行った。また、崩壊を免れて遺存する石垣天端石の一部には、奉安殿の建設時に塗られたセメントがそのままになっていたため、石垣に影響のない範囲でこれらの除去を行った。続いて攪乱のみられる記念碑の周辺を確認したところ、直下には奉安殿とみられる2.3m×2.7mの長方形のコンクリート製の基礎が埋没していた。基礎の根元は標高15.3m、地表下40～50cmとかなり深い位置にあり、その周囲には設置にともなう掘り方が80cm程外側まで及ぶ。さらに下部には、基礎の根固めのための石が敷かれていることから、調査区中央付近は大規模に掘削されて遺構面は滅失していた。また、太鼓御門(D面)側の桜の木周辺には石垣崩壊に伴う土砂の流出範囲(図版18)も確認できた。

このようにして確認した遺構の滅失範囲と桜の木を避け調査区を横断する形で設定したのがTr-1・2の2本のトレンチである。

2 調査の結果

(1)第1トレンチ(Tr-1)[第65図、図版19]

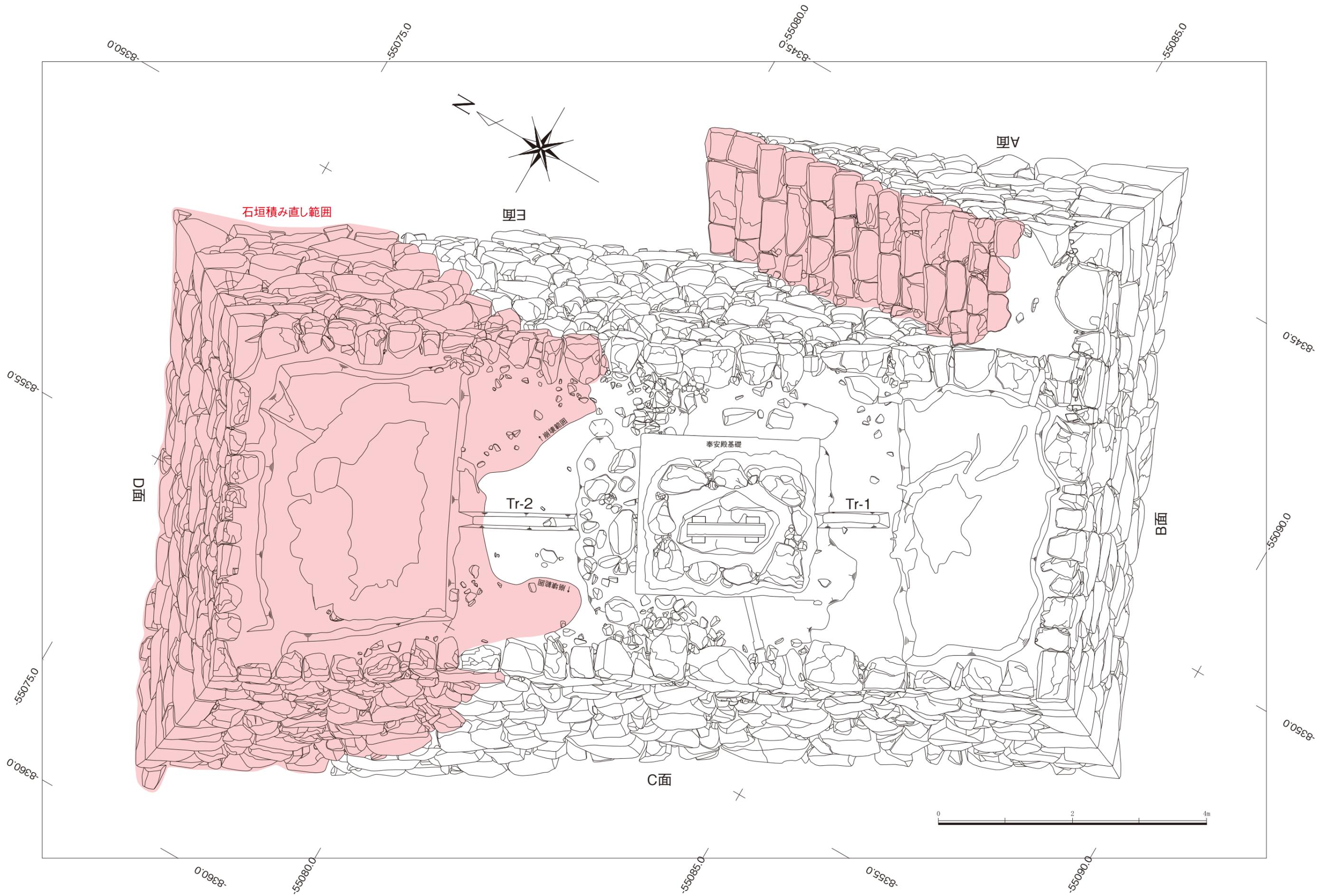
調査区北西側に設定した幅20cm、長さ180cmのトレンチである。記念碑側をみると、15.4m付近を底にして高さ25cmのコンクリート製の奉安殿基礎が置かれ、上部には若干の土層を挟みコンクリートが敷かれてその上に記念碑の石製台座が据えられている。基礎の外側80cmは掘り方とみられる掘り込みがみられ、基礎の下部には根固めのものとみられる石が敷かれている。それ以下の掘り下げは行っていないため、掘り込みがどこまで及ぶかは確認していないが、かなりの規模の攪乱が想定される。

表土部分を除去すると門側で標高15.7mを頂点として傾斜する整地面が現れる。1層は平面でも確認できた地震による崩落後、修理に伴い敷かれた土である。

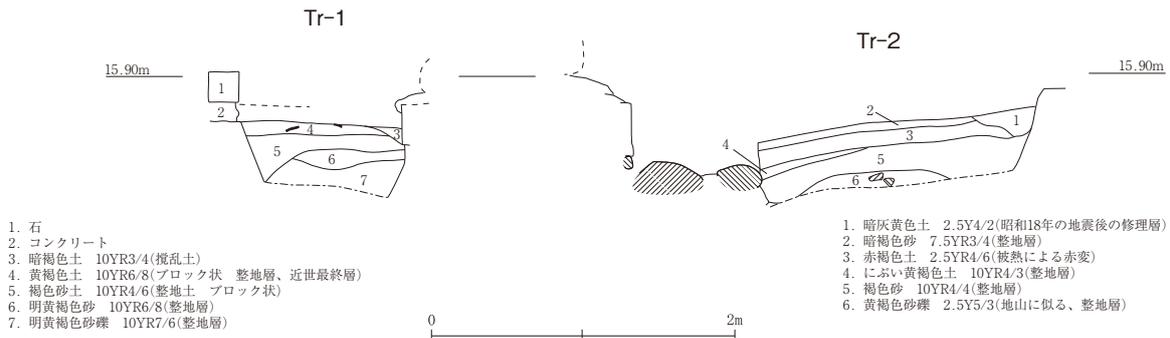
2層以下は近世当時の整地層と考えられる砂層でいずれも上面は傾斜を持つ。2層は、標高15.45m～15.6mまで15cmの比高差を持って傾斜する厚さ5cmの層である。また、2層と同じ傾斜を持つ厚さ10cmの3層は焼土層である。赤褐色を呈し一面赤く変色しており、大規模な被熱行為があったことを示し



第63図 第4調査区オルソノ(S=1/80)



第64図 第30次調査第4調査区平面図(S=1/50)



第65図 第4区第1・2トレンチ土層図(S=1/50)

ている。その下には4層が薄く入り、厚さ20cmほどの5層が厚くみられる。6層には拳大の石が含まれており、所謂地山のような様相を呈している。他調査区でみられたような建物解体に伴う瓦廃棄などは確認できなかった。

(2)第2トレンチ(Tr-2)[第65図、図版19]

調査区の南東に設定した幅20cm、長さ110cmのトレンチである。記念碑側はTr-1同様、標高15.45m付近を底として高さ25cmの奉安殿基礎が置かれており、上面には直接セメントが塗られた上に石製の記念碑基礎が設置されている。1層としたのは1辺20cmの石製の角柱で、奉安殿の前面部分に置かれた石列である。2層はその基礎となるセメントである。3層は奉安殿基礎設置に伴う掘り方であるが、Tr-1のような石はみられない。

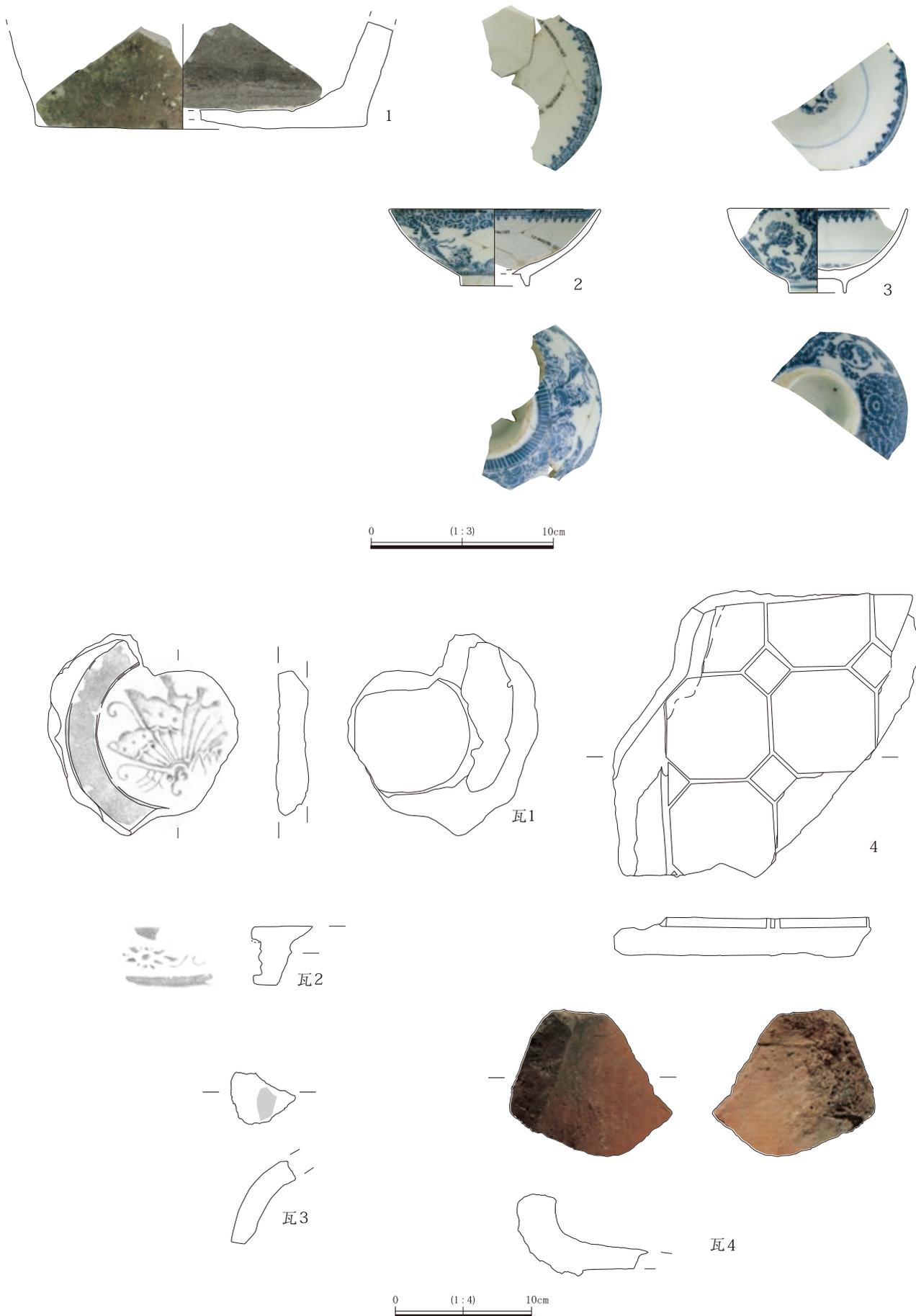
4層以下は近世の整地層であるとみられる。水平に広がる4層は上面標高15.6m、厚さ10cmの黄色系の整地層で内部には若干の瓦を含む。標高15.7~15.8mの石垣天端からは若干低くなるが、上面はそのまま石垣の裏側へと繋がることから、近世最終面であった可能性がある。ブロック状の土である5層は外側へ向かい厚みを増しており、何かを埋め立てたような様相を呈している。6・7層は黄色系を呈す砂整地層であり、砂質に若干の違いがあるものの一連の工程で敷かれた層であると推定される。

3 まとめ

第63図のとおりC面からE面にかけての石垣は地震で崩壊しており、昭和30年代に積み直されたものである。第18次調査ではD面側の下部を掘削したところ、現石垣は埋没する下部の石垣上には乗らず、地表面付近に積み上げられた大変不安定なものであり、元の位置に復元されていないことが分かった。また、地表下に遺存する2段の近世石垣は積み替え痕跡が残っており、被熱した石垣の上に新たに積み直されていることが明らかとなった。

同様に第15次調査でA-B面角、B-C面角部の調査では、被熱痕こそないが石垣の積み替えは確認できた。記録によると享保5年(1720)に城をほぼ全焼する石黒火事が起こっており、その際、櫓台部分の石垣が大きく崩れたとある。当調査区には近世初め頃より櫓が乗っており、火事で焼失後再建された後は近代に解体されるまではそのままの状態であり、火事後の一時期以外地表が露出することはなかったとみられることから、Tr-1の3層にみられる赤変した層は、城内随所で確認されるものと同様に石黒火事の痕跡である可能性が最も高い。Tr-2の5層は火事後の石垣積み直しに伴う整地層であったと考えられる。Tr-1の2層、Tr-2の4層は火事後の整地面であり、この面上に太鼓御門櫓が再建されたとみられる。

階段は、現況で比高差2.7m程、33°の傾斜を持っているが、これは奉安殿建設の際に新たに築かれたものであり、明治期の写真にも写るとおり、本来はより急で45°以上はあったものと推定される。A



第66図 第4調査区出土遺物実測図(上S=1/3、下S=1/4)

面から階段側面を観察すると積み足し部分は分かるものの、旧階段は確認できないため、踏み石部分だけ取り外されて現在の石段に転用されたとみられる。

4 出土遺物

(1)土器・その他の遺物[第66図]

1は甕の底部。2・3は型紙摺りの碗であり、2の外面には鶴、3の見込には環状松竹梅文がみられる。

4はタイルである。モルタル上に敷かれており、戦時中同位置にあった奉安殿の床材の一部とみられる。調査区際の石垣下には建物の破片が散乱している。

(2)瓦[第66図、図版21]

1は鬼瓦。軒丸瓦の瓦当面を貼り付けており、円形部分が突出した形となる。蝶はD類である。2はS類の軒平もしくは軒棧瓦である。3は丸瓦片であり、2次的な焼成痕を残す。4は2次的な焼成により変色・変形した丸瓦である。色調は黄橙色に変色し、大きくねじれ、表面には焦げた金属片のようなものが溶着する。

III章 調査の成果

第22次調査区出土遺物観察表

土器

図	番号	器種	調査区	出土地	層序	文様	器高	口径	底径	高台高	高台径	備考
10	1	磁器 碗?	22次		表土	型紙摺	(2.2)					
10	2	陶器 鍋	22次		表土		(2.4)					
10	3	陶器 播鉢	22次		表土		(4.2)					
10	4	磁器 碗?	22次		表土		(1.8)					白磁
10	5	陶器 碗	22次	P1			(2.6)			0.5	復2.6	

瓦

図	番号	器種	分類	調査区	出土地	層序	刻印	最大径	最大高	最大厚	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	備考	
10	1	軒丸瓦	巴	22次	Tr3	11層		16.0	18.2	2.5	(16.0)	(18.2)						(14.2)	(10.35)	4.6	2.5							
10	2	軒丸瓦	B	22次	表土																							
10	3	軒丸瓦	巴	22次	Tr3	地山面上																						
10	4	椀瓦		22次	Tr3	地山面上		26.9	21.1	1.8								26.9	(21.1)	4.2		2.8		1.8				
10	5	丸瓦		22次	Tr3	地山面上		13.5	9.0	2.4	(13.5)		4.1	(1.8)		9.0	4.9											
10	6	雁振瓦		22次	Tr3	地山面上	○寅	20.9	15.0	4.5	(20.9)	(15.0)			10.6	4.5	5.2											

石

図	番号	器種	調査区	出土地	層序	種類	長さ	幅	高さ	厚み	備考
12	1		22次	P2		石	20.65	1.7	6.5		綠色凝灰岩

木

図	番号	器種	調査区	出土地	層序	長	辺	備考
12	2	柱材?	22次	P2		(13.9)	5.5×(5.0)	

第1調査区出土遺物観察表(1)

土器

図	番号	器種	調査区	出土地	層序	文様	器高	口径	底径	高台高	高台径	備考	
20	1	陶器 鍋	在地系	1区	表土		(2.7)	復13.2					
20	2	磁器 碗	肥前系	1区	表土	外・網目文 内・なし	(5.6)	復9.6					
20	3	磁器 碗	在地系	1区	表土	内・二重圏線 外・格子文	6.2	復15.0		0.9	復5.8		
20	4	磁器 碗		1区	Tr6付近	表土	高台内・圏線 外・斜格子	4.7	8.2		0.6	3.2	型紙摺
20	5	陶器 播鉢	関西系	1区	H10 Tr6再堀		(4.8)	復30.6				9本/単位のスリ目	
20	6	陶器 播鉢	備前系か	1区	H10 Tr6再堀		(5.4)	復37.2				ヨコナデ後11本/単位のスリ目	
20	7	陶器 碗	肥前系	1区	H10 Tr6再堀		(4.4)					白化粧刷毛目	
20	8	陶器 碗		1区	H10 Tr6再堀		(2.0)			0.5	4.5	胎土目4ヶ所	
20	9	磁器 皿		1区	H10 Tr6再堀		(1.9)			0.7	復7.0		
20	10	陶器 植木鉢	在地系	1区	H10 Tr6再堀		(3.6)			0.7	復9.0	高台内に「…氏 天…」の墨書	
20	11	陶器 鍋	在地系	1区	H10 Tr6再堀		(7.7)	復17.8					
20	12	陶器 碗	肥前系	1区	H10 Tr6再堀	内・圏線 外・菊花弁文	(3.5)	復8.0					
20	13	磁器 猪口		1区	H10 Tr6再堀	外・水仙文	(4.1)	復6.2					
20	14	陶器 碗	肥前系	1区	角石垣上	瓦溜	(4.6)	復11.4				白化粧刷毛目	
20	15	陶器 壺?		1区	角石垣上	瓦溜	(6.25)			0.25	復10.8		
21	16	陶器 足付鉢?	備前系か	1区	角石垣上	瓦溜	(7.2)		復15.8	脚高0.9		鉄泥	
21	17	陶器 甕	越前系	1区	角石垣上	瓦溜	(7.5)	復24.8				鉄泥	
21	18	陶器 甕	越前系	1区	角石垣上	瓦溜	(9.7)	復28.4				鉄泥	
21	19	磁器 碗		1区	角石垣上	瓦溜				0.7	復4.5		
21	20	磁器 碗	肥前系	1区	角石垣上	瓦溜	外・梅花文	(3.8)	復9.6				
21	21	磁器 皿		1区	角石垣上	瓦溜	内・鶴 外・圏線	4.3	復25.0		0.6	復13.0	
21	22	磁器 碗	肥前系	1区	A-H間	表土	内・圏線四方襷 外	(5.1)					
21	23	磁器 碗		1区	A-H間	表土	外・山水文	(4.6)	復9.4				
21	24	磁器 碗	肥前系	1区	A-H間	表土	内・四方襷 外・波文	(4.0)	復7.4				
21	25	陶器 鍋	在地系	1区	角石垣上	瓦溜	8.9	復17.9	復7.1				
22	26	陶器 德利	在地系	1区	角石垣上	瓦溜	(8.6)	3.4					
22	27	陶器 播鉢	関西系	1区	角石垣上	瓦溜	(7.0)					7本/単位のスリ目後ヨコナデ	
22	28	陶器 蓋		1区	角石垣上	瓦溜		長12.0	幅5.0	厚2.1			
22	29	磁器 碗	肥前系	1区	角石垣上	瓦溜	内・雷文 外・草花文 人物	(5.1)	復10.0				
22	30	磁器 猪口		1区	角石垣上	瓦溜	内・四方襷 外・花文	(4.3)	復7.6				
22	31	磁器 皿		1区	角石垣上	瓦溜	内・草花文	1.5	復8.8		0.3	復4.6	プリント
22	32	磁器 皿	肥前系	1区	角石垣上	瓦溜	内・花 文圏線 外・花文	2.0	復9.6		0.5	復4.8	
22	33	磁器	肥前系	1区	Tr1	3層	外・圏線 内・芭蕉	3.1	復13.6		0.5	復5.6	
22	34	土師器 皿		1区	Tr3	A面12層		2.1	復12.6	復5.7			
22	35	磁器 碗	在地系	1区	Tr3	盛土中	外・花 圏線 内・蝶文	(2.5)			0.7	復3.4	
22	36	磁器 鉢	肥前系	1区	Tr3	盛土	内・花文	(3.9)				焼継ぎ	
22	37	磁器 蓋?	肥前系	1区	Tr3	盛土中	外・○福	(2.7)	蓋径4.8				
22	38	陶器 鉢		1区	Tr5	盛土(表土)		(4.3)	復21.6				
22	39	磁器 碗	肥前系	1区	Tr5	盛土(表土)	外・葉? 内・?	(2.8)			0.6	復2.6	色絵
22	40	磁器 猪口		1区	Tr5	盛土(表土)	外・小花散らし	(3.0)	復6.8			型紙摺り	
23	41	磁器 蓋	在地系	1区	Tr5	盛土(表土)	内・なし	(2.4)	復6.8				
23	42	磁器 段重		1区	Tr6	4層	外・市松文		復14.8		0.3	復7.0	
23	43	陶器 播鉢	関西系か	1区	Tr3-4間	盛土		(5.2)				スリ目後ヨコナデ	
23	44	磁器 碗		1区	Tr3-4間	盛土		(2.5)	復6.2			重要	
23	45	陶器 碗	肥前系	1区	Tr3-4間	盛土	外・菊花文 松枝繋ぎ文	(4.7)	復10.0				
23	46	陶器 壺	在地系	1区	Tr3-5間	盛土		(5.5)	復10.6				
23	47	陶器 甕		1区	Tr3-5間	盛土		(5.2)	復21.0			越前	
23	48	陶器 土瓶	在地系	1区	Tr3-5間	盛土		(10.3)	復8.6			注口長(4.45)	

III章 調査の成果

第1 調査区出土遺物観察表(3)

図	番号	器種	分類	調査区	出土地	層序	刻印	葺天	葺瓦	葺瓦高	葺瓦厚	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	備考	
	34	92	膠板瓦	1区	角石垣上	瓦溜	「文辰」																						
	35	94	平or棧	1区	角石垣上	瓦溜	「作」																						
	35	95	平or棧	1区	角石垣上	瓦溜	「作」																						
	35	96	目板瓦	1区	角石垣上	瓦溜	「作」																						
	35	97	丸瓦	1区	H10 Tr6再堀		①																						
	35	98	丸瓦	1区	H10 Tr6再堀		①																						
	35	99	棧瓦	1区	Tr6	4層	②																						
	35	100		1区	角石垣上	瓦溜	③																						
	35	101	目板瓦	1区	Tr3	A面12層	③																						
	35	102	平or棧	1区	Tr3-4 間	瓦庵楽層	③																						
	35	104	平or棧	1区	Tr3-4 間	瓦庵楽層	四菱◆																						
	35	105	丸瓦	1区	B面上	含土	菱形																						
	35	106	目板瓦	1区	角石垣上	瓦溜	○が2つ並ぶ																						

石

図	番号	器種	調査区	出土地	層序	種類	長さ	幅	高さ	厚さ	備考	
	36	1	硯	1区	角石垣上	瓦溜	硯	(11.5)	4.6	1.4		
	36	3	根巻き	1区	C面上	表土	石	(16.4)	(10.1)	(6.8)	(4.8)	緑色凝灰岩

貝

図	番号	種類	調査区	出土地	層序	幅	長さ	備考	
	36	2	貝	1区	Tr3-5間	盛土部	13.9	8.7	

金属

図	番号	器種	調査区	出土地	層序	幅	長	高	厚	a	b	c	d	f	g	h	i	備考
	35	1	銭貨	1区	Tr3-5間	盛土	径2.5											寛永通宝
	35	2	銭貨	1区	Tr6	4層	径2.4											寛永通宝
	35	3	銭貨	1区	根巻1・2付近	表土	径2.7											一銭(明治16年)
	36	4	錠	1区	表土	表土	7.8	6.9		(12.7)	5.7			4.5	0.9	1.1		
	36	5	錠状	1区	瓦溜	瓦溜	7.7	6.1	4.9	(29.9)					1.0	1.0		
	37	6	釘	1区	瓦溜	瓦溜	8.8	6.9	2.1	0.7						0.8	0.6	
	37	7	釘	1区	Tr5	盛土	8.3	6.7		(5.4)	(0.9)	0.9	(4.5)		0.5	0.5		
	37	8	釘	1区	Tr3-5間	盛土		5.6		1.1	(5.6)	1.4	1.0	(4.6)	1.35	1.1		
	37	8	釘	1区	Tr3-5間	盛土		4.0										
	37	9	釘	1区	Tr6	4層		7.4	1.1		(7.4)	1.7	1.6		0.8	0.6	1.7×1.2	
	37	9	釘	1区	Tr6	4層		8.0							0.48	0.5		
	37	10	釘?	1区	Tr6	4層		2.7	1.0	0.1					0.65	0.65		

第2 調査区出土遺物観察表(1)

土器

図	番号	器種	調査区	出土地	層序	文様	器高	口径	底径	高台高	高台径	備考	
	42	1	陶器	碗	2区	G-J間	表土	(4.4)	復9.2				
	42	2	陶器	鍋	在地系	2区	G-J間	表土	(4.0)				
	42	3	陶器	播鉢	須佐系	2区	G-J間	表土	(4.6)		0.4	復9.6	
	42	4	磁器	小碗	肥前系	2区	G-J間	表土	外・桐文 圏線 内・なし	(2.5)		復6.2	
	42	5	磁器	碗	肥前系	2区	G-J間	表土	外・菊花文	(4.9)		復10.2	
	42	6	陶器	碗	在地系	2区	Tr2付近	表土		(2.9)		復9.6	
	42	7	陶器	碗	在地系	2区	Tr3	表土		(3.2)		復6.6	
	42	8	陶器	瓶	在地系	2区	Tr2付近	表土		(6.7)		復8.0	
	42	9	陶器	壺	2区	Tr3	表土	外・圏線	(5.6)		0.5	復6.8	
	42	10	青磁	香炉	2区	Tr3	表土		(3.1)			復7.8	
	42	11	磁器	仏飯器	肥前系	2区	Tr2付近	表土	見・五弁花 外・折枝文	(4.4)	4.8		
	42	12	磁器	碗	2区	Tr2付近	表土	外・桜花文 内・折枝梅文	(3.5)			復9.4	
	42	13	磁器	碗	在地系	2区	Tr3	表土	内・圏線 外・草花文	(4.7)		復9.8	
	42	14	陶器	堯or鉢	越前系	2区	瓦溜	瓦溜	(8.7)			復52.4	
	43	15	陶器	堯	越前系	2区	瓦溜	瓦溜	(12.5)			復23.2	
	43	16	陶器	鉢	越前系	2区	瓦溜	瓦溜	(13.7)			復31.0	
	43	17	土器	俵緑焼	2区	瓦溜	瓦溜		(8.9)			復22.4	
	43	18	陶器	碗	在地系	2区	瓦溜	瓦溜	(4.8)		0.5	復3.4	
	43	19	陶器	灯明皿	2区	瓦溜	瓦溜		1.5			復10.0	
	43	20	陶器	蓋物	2区	瓦溜	瓦溜	菊文	長7.0	幅4.8	高4.1		
	43	21	磁器	底部	肥前系	2区	瓦溜	瓦溜	見・?草花文	(2.2)		0.7	復4.4
	43	22	磁器	蓋	肥前系	2区	瓦溜	瓦溜	外・	(2.8)		復10.8	
	44	23	磁器	皿	在地系	2区	Tr2	3層	外・圏線 内・?	(2.3)		復15.2	
	44	24	磁器	鉢	2区	Tr2	4層	外・福	(6.5)				
	44	25	磁器	小杯	肥前系	2区	Tr3	2層	外・草文	2.5		復5.2	
	44	26	磁器	碗	在地系か	2区	Tr5	2層	外・圏線 草文	(3.9)		復9.6	
	44	27	青磁	碗	2区	Tr5	1層		7.2		0.8	5.0	
	44	28	陶器	碗	肥前系	2区	Tr3	4層	(4.5)			復9.2	
	44	29	陶器	皿	2区	Tr5	2層		(2.2)			復14.2	
	44	30	陶器	鉢	2区	Tr5	2層		(3.9)			復14.4	
	44	31	陶器	播鉢	須佐系か	2区	Tr6	4層		(8.0)		0.2	復9.8
	44	32	陶器	碗	肥前系	2区	Tr6	4層		(5.4)			復10.6
	44	33	磁器	碗	肥前系	2区	Tr6	4層	外・唐草? 内・なし	4.8		0.6	復3.5
	44	34	陶器	底部	肥前系	2区	Tr7	1層		(2.3)		0.4	3.2
	45	35	磁器	碗	肥前系	2区	Tr6	4層	外・雲文、圏線 内・なし	(4.0)		0.9	復4.1
	45	36	磁器	碗	2区	Tr6	4層	外・圏線 内・圏線	(2.9)			0.5	復4.8
	45	37	磁器	鉢	肥前系	2区	Tr6	4層	見・一 外・圏線	(3.35)		0.9	復4.2

第2調査区出土遺物観察表(2)

図	番号	器種	調査区	出土地	層序	文様	器高	口径	底径	高台高	高台径	備考
45	38	磁器 碗	肥前系	2区	Tr5	1層		内・四方襷	(3.5)	復10.4		
45	39	磁器 蓋	肥前系	2区	Tr6	4層		外・斜め格子、内・井桁	(1.5)	復5.0		
45	40	磁器 猪口	肥前系	2区	Tr6	4層		外・波、薊 高内・圏線	(4.4)		0.3	復5.8

瓦

図	番号	器種	分類	調査区	出土地	層序	刻印	表大径	裏大径	表大高	裏大高	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	備考	
46	1	軒丸瓦	巴	2区	Tr5	2層		7.1	10.8	8.1	1.9	(7.1)	(10.8)						(8.1)	(5.9)									
46	2	軒丸瓦	B	2区	Tr5	2層																							
46	3	軒丸瓦	C	2区	瓦溜	瓦溜		7.6	16.2	16.0	3.2	(7.6)	(16.2)						16.0	(11.9)		1.7							
46	4	軒丸瓦	D	2区	Tr5	1層																							
46	5	軒丸瓦	E	2区	表土	1層		12.2	11.2	2.1		(12.2)							(10.4)	(8.4)		2.1							
46	6	軒丸瓦	E	2区	Tr3	2層		13.2	9.8	2.7		(13.2)							(8.8)	(6.8)									
46	7	軒丸瓦	E	2区	瓦溜	瓦溜		7.0	14.7	9.6	1.9	(7.0)	(14.7)						(8.0)	(5.5)									
46	8	軒丸瓦	E	2区	Tr7	1層		13.5	9.5	1.6		(13.5)							(8.5)	(5.3)		(1.5)							
46	9	軒丸瓦	E	2区	Tr5	2層																							
46	10	軒丸瓦	L	2区	表土	表土																							
46	11	軒丸瓦	D	2区	Tr7	1層		3.5	12.1	9.2	2.0	(3.5)	(12.1)						(7.4)										
46	12	軒丸瓦	葵	2区	表土	表土																							
46	13	軒平瓦	C	2区	Tr3	2層																							
46	14	軒瓦	h	2区	Tr6	4層																							
46	15	軒瓦	n	2区	Tr7	2層																							
46	16	軒瓦	n	2区	Tr7	1層		10.5	14.9	6.9	2.2	(10.5)	(14.9)						5.0	2.8	1.7	2.5			4.2				
46	17	丸瓦		2区	Tr3	1層		29.5	17.7	8.0	2.9	(29.5)	(17.7)	3.3	(6.3)	8.0													
47	18	目板瓦		2区	Tr6	4層		13.5	14.9	2.0	1.9	(13.5)	(14.9)			1.9													
47	19	目板瓦		2区	Tr6	4層		18.8	16.7	2.5	2.1	(18.8)	(16.7)			2.1													
47	20	平or棧		2区	瓦溜	瓦溜		22.8	11.8	3.8	2.2	(22.8)	(11.8)			2.2													
49	21	平or棧		2区	Tr6	4層	四菱	17.4	16.1	5.2	2.0	(17.4)	(16.1)			2.0													
47	22	棧瓦		2区	瓦溜	瓦溜		20.5	18.5	5.5	2.1	(20.5)	(18.5)	4.9	3.9	3.5			2.1										
47	23	目板瓦		2区	瓦溜	瓦溜		20.1	14.6	4.7	2.4	(20.1)	(14.6)	4.6	3.0	2.4	2.3	2.4											
47	24	目板瓦		2区	Tr6	4層		26.8	17.0	4.2	2.4	(26.8)	(17.0)		3.1	2.1	1.7	2.4											
47	25	目板瓦		2区	瓦溜	瓦溜		30.1	28.5	4.3	2.2	(30.1)	28.5	3.2	3.0	2.2	1.5	2.2											
48	26	目板瓦		2区	Tr6	4層		19.9	12.6	4.5	2.1	(19.9)	(12.6)			2.3													
48	27	目板瓦		2区	瓦溜	瓦溜		24.7	16.8	4.1	3.8	(24.7)	(16.8)			2.1		1.9											
48	28	右袖瓦		2区	Tr6	4層		16.7	12.1	6.5	1.9	(16.7)	(12.1)																
48	29	角瓦		2区	Tr6	4層		21.1	11.6	3.1	2.4	(21.1)	(11.6)																
48	30	鬼瓦		2区	瓦溜	瓦溜		11.6	23.4	9.8	2.7																		
49	31	平or棧		2区	Tr6	4層																							
49	32	雁板瓦		2区	瓦溜	瓦溜																							
49	33			2区	瓦溜	瓦溜																							
49	34	丸瓦		2区	瓦溜	瓦溜																							
49	35	平or棧		2区	瓦溜	瓦溜																							
49	36	丸瓦		2区	Tr6	4層																							
49	37	平or棧		2区	Tr6	5層																							
49	38	丸瓦		2区	Tr6	6層																							
49	39	丸瓦		2区	Tr6	7層																							
49	41	丸瓦		2区	瓦溜	瓦溜																							

石

図	番号	器種	調査区	出土地	層序	種類	長	幅	高	厚	備考
50	1	温石	2区	瓦溜	瓦溜	石	6.1	5.9	1.3		
50	5	根巻き	2区	瓦溜	瓦溜	石	(19.5)	(11.3)	(9.8)	5.0	綠色凝灰岩

貝

図	番号	種類	調査区	出土地	層序	幅	長	備考
50	2	貝	2区	瓦溜	瓦溜	7.8	6.9	
50	2	貝	2区	瓦溜	瓦溜	7.7	6.8	
50	2	貝	2区	瓦溜	瓦溜	7.7	6.1	
50	2	貝	2区	瓦溜	瓦溜	8.8	6.9	
50	2	貝	2区	瓦溜	瓦溜	8.3	6.7	

金属

図	番号	器種	調査区	出土地	層序	幅	長	高	厚	a	b	c	d	f	g	h	i	備考
50	3	煙管(吸口)	2区	Tr2	3層	13.9	8.7	1.2	0.5									
50	4	煙管(吸口)	2区	Tr6	4層	7.7	6.8		0.1									

第3調査区出土遺物観察表(1)

土器

図	番号	器種	調査区	出土地	層序	文様	器高	口径	底径	高台高	高台径	備考
54	1	陶器 播鉢		3区	Tr1	5層				0.4	復5.2	15本/単位
54	2	陶器 皿?		3区	Tr1	5層		外・圏線 内・?	(1.7)		0.6	復13.6
54	3	青磁 香炉		3区	Tr1	5層			(3.2)		0.4	復1.8
54	4	陶器 壺	在地系	3区	Tr1	5層			(4.9)	復8.8		
54	5	陶器 行平	在地系	3区	Tr1	7層			(3.5)	復11.4		
54	6	陶器 鉢	越前系	3区	Tr1	5層			(7.3)	復26.0		鉄泥
54	7	磁器 碗	肥前系	3区	Tr1	7層		外・遠山、舟? 内・なし	(4.6)	復11.0		
54	8	陶器 土管?		3区	Tr2	瓦廃棄層?			5.1	復22.0		Tr1の5層と一連か
54	9	陶器 鉢	在地系	3区	Tr2	瓦廃棄層?			(7.05)	復16.0		Tr1の5層と一連か
54	10	陶器 杯	在地系	3区	Tr2	瓦廃棄層?			(1.6)	復6.6		Tr1の5層と一連か
54	11	陶器 蓋	在地系	3区	Tr2	瓦廃棄層?			1.5	復9.2		灰釉、Tr1の5層と一連か
54	12	陶器 土瓶	在地系	3区	Tr2	瓦廃棄層?			長5.1	幅7.5		注口径1.4、Tr1の5層と一連か
55	13	磁器 碗	在地系	3区	Tr2	瓦廃棄層?			(3.5)	復8.6		Tr1の5層と一連か
55	14	磁器 碗	肥前系	3区	Tr2	瓦廃棄層?		外・菊 内・なし	(2.4)	復4.8		色絵、Tr1の5層と一連か

Ⅲ章 調査の成果

第3調査区出土遺物観察表(2)

図	番号	器種	調査区	出土地	層序	文様	器高	口径	底径	高台高	高台径	備考	
55	15	磁器	皿	肥前系	3区	Tr2	瓦廃棄層?	見・虫文 高内・「〇四九」	(1.3)			0.3 復3.6	Tr1の5層と一連か
55	16	陶器	灯明皿	在地系	3区	根巻1・2付近	表土		(1.9)	復5.0			
55	17	陶器	碗	在地系	3区	根巻1・2付近	表土		(2.9)		0.5	復3.0	
55	18	陶器	碗	在地系	3区	根巻1・2付近	表土		(3.7)	復9.2			
55	19	陶器	鍋	在地系	3区	根巻1・2付近	表土		(8.5)				
55	20	陶器	徳利	在地系	3区	根巻1・2付近	表土		(7.5)	3.6			
55	21	磁器	大皿	在地系	3区	根巻1・2付近	表土		(1.3)		0.5	復16.4	
55	22	磁器	碗	肥前系	3区	根巻1・2付近	表土	内・点繋ぎ、圏線	5.3	復9.6	0.9	復3.8	
55	23	磁器			3区	根巻1・2付近	表土	外・圏線 内・なし	(3.6)	復7.2			
55	24	磁器	蓋	肥前系	3区	根巻1・2付近	表土	外・草花 内・なし	(2.5)				
55	25	磁器	皿	肥前系	3区	根巻1・2付近	表土	外・圏線 内・折枝桜文 高内・圏線	(1.5)		0.4	復9.4	
55	26	磁器	皿	肥前系	3区	根巻1・2付近	表土	外・唐草、圏線 内・桜	2.6	復13.4	0.8	復7.2	
55	27	磁器	鉢		3区	根巻1・2付近	表土	外・梵字 内・四方襟	縦5.9	幅5.85			

瓦

図	番号	器種	分類	調査区	出土地	層序	刻印	最大径	最大高	最大厚	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	備考		
56	1	軒瓦	i	3区	Tr2	廃棄層?																						Tr1の5層と一連か	
56	2	軒瓦	q	3区	Tr2	廃棄層?	「作」	10.0	17.1	7.8	2.5	(10.0)	(17.1)						(3.6)	(2.7)	(1.5)	(1.7)	(0.4)		(3.6)		Tr1の5層と一連か		
56	3	軒瓦	q	3区	Tr1	5層		6.0	16.9	6.4	2.2	(6.0)	(16.9)						(4.2)	2.8	(1.0)	(2.0)							
56	4	軒瓦	q	3区	Tr2	廃棄層?			9.6	4.3	2.6		(9.6)						(2.7)	(2.1)	(1.5)	(1.9)						Tr1の5層と一連か	
56	5	軒瓦	q?	3区	Tr2	攪乱層	「文卯」																						
56(6)	6(3)	軒瓦	q?	3区	Tr2	廃棄層?	「文寅」																					Tr1の5層と一連か	
56	7	軒瓦	s	3区	Tr2	廃棄層?																						Tr1の5層と一連か	
56	8	軒瓦	p?	3区	Tr2	廃棄層?		28.5	29.0	7.6	3.9	(28.5)	(19.0)						(4.7)	(2.5)	(1.9)	(2.6)	1.5	2.5	3.2	4.1		Tr1の5層と一連か	
56(6)	9(5)	平or棧		3区	Tr2	攪乱層	「作」	16.8	16.6	4.8	1.9	(16.8)	(16.6)																
56(6)	10(3)	平or棧		3区	Tr2	廃棄層?	⊖	17.9	11.9	3.3	2.0	(17.9)	(11.9)																Tr1の5層と一連か
57	11	平or棧		3区	Tr2	廃棄層?		25.5	16.3	5.0	2.1	(25.5)	(16.3)																Tr1の5層と一連か
57	12	平or棧		3区	Tr2	廃棄層?		29.1	17.9	5.3	2.1	29.1	(17.9)	3.7	3.5													Tr1の5層と一連か	
57	13	棧瓦	軸	3区	Tr2	廃棄層?		15.0	20.1	6.1	1.8	(15.0)	(20.1)																Tr1の5層と一連か
57(6)	14(3)	棧瓦	軸	3区	Tr2	廃棄層?	「湖九」	18.4	13.9	4.7	1.7	(18.4)	(13.9)																Tr1の5層と一連か
57(6)	15(3)	棧瓦		3区	Tr1	5層	「文■」	15.0	17.6	6.3	2.1	(15.0)	(17.6)																
57	16	棧瓦		3区	Tr1	5層		19.9	25.6	5.4	2.3	(19.9)	(25.6)	(3.5)															
57	17	棧瓦	軸	3区	Tr2	攪乱層		22.2	12.9	5.8	1.8	(22.2)	(12.9)																
57	18	棧瓦	軸	3区	Tr2	攪乱層		13.1	15.2	5.2	1.5	(13.1)	(15.2)																
58	19	棧瓦		3区	Tr2	廃棄層?	□十	30.0	20.6	4.5	2.1	30.0	(20.6)	5.2															
58	20	棧瓦		3区	Tr2	廃棄層?		20.4	17.5	5.1	2.1	(20.4)	(17.5)																
58(6)	21(3)	棧瓦		3区	Tr1	5層	「文■」	17.1	14.4	6.2	2.1	(17.1)	(14.4)																
58(6)	22(3)	棧瓦		3区	Tr2	廃棄層?	「作」	18.9	24.2	5.2	2.0	(18.9)	24.2																Tr1の5層と一連か
58(6)	23(3)	棧瓦		3区	Tr2	廃棄層?	「作」	13.4	19.3	5.5	2.3	(13.4)	(19.3)																Tr1の5層と一連か
59	24	平or棧		3区	Tr2	廃棄層?		15.3	17.6	4.7	2.4	(15.3)	(17.6)																
59	25	製斗瓦	軸	3区	Tr2	攪乱層		15.8	19.0	4.0	1.7	(15.8)	(19.0)																
59	26	補瓦		3区	Tr2	攪乱層		21.5	15.5	5.3	2.0	(21.5)	(15.5)																
59(6)	27(4)	補瓦		3区	Tr2	廃棄層?	■大	30.1	20.3	6.2	2.0	30.1	(20.3)																Tr1の5層と一連か
59	28	補瓦	軸	3区	Tr2	攪乱層		19.1	13.1	5.0	1.9	(19.1)	(13.1)																
60	29	雁振瓦		3区	Tr2	廃棄層?	「作」	30.9	19.5	10.9	3.7	30.9	(19.5)																Tr1の5層と一連か
61	37	棧瓦		3区	Tr2	攪乱層	「作」																						
61	38	軒瓦		3区	Tr1	5層	⊕																						
61	40	軒瓦	s	3区	Tr2	廃棄層?	■大																						Tr1の9層と一連か

石

図	番号	器種	調査区	出土地	層序	種類	長	幅	高	厚	備考
62		礎石	3区	Tr2	廃棄層?	石	(21.1)	(17.9)	14.2	上面：12.0×11.7、ホゾ穴：3.2×2.9・深1.7	緑色凝灰岩

第4調査区出土遺物観察表

土器

図	番号	器種	調査区	出土地	層序	文様	器高	口径	底径	高台高	高台径	備考
66	1	陶器	甕	4区	Tr2付近	2層付近	(6.0)		復20.4			
66	2	磁器	碗	4区	Tr2付近	2層付近	外・鶴、雲、波、連弁 内・輪宝	4.3	復11.8			型紙摺
66	3	磁器	碗	4区	Tr2付近	2層付近	外・菊文 見・環状松竹梅文 内・輪宝	4.7	復9.8			型紙摺
66	4	タイル		4区	表土	表土	長21.2	幅22.3	厚3.4			

瓦

図	番号	器種	分類	調査区	出土地	層序	刻印	最大径	最大高	最大厚	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	備考		
66	1	鬼瓦	D	4区	Tr2付近	2層付近		14.8	13.9	3.9	2.4																		
66	2	軒平瓦	s	4区	Tr2	3層		5.0	9.2	4.8	1.8																		
66	3	丸瓦		4区		天端石間		3.8	4.7	6.1	1.7	(3.8)	(4.7)		6.1	1.7					4.1	(2.3)	1.8	2.3					
66	4			4区		天端石間		10.9	11.9	6.0	1.8																		

IV章 考察

1 太鼓御門周辺

(1)周辺状況

太鼓御門は大手登城路上、本丸入口にあたる門である。本丸である三ノ丸は幕末期の呼称であり、それ以前は二ノ丸の名で呼ばれ、現二ノ丸の位置にあったものが現在鳥取西高等学校のある位置へ移動するのは18世紀の前半のことである。

3代藩主池田吉泰はそれまで城の中核としては使われていなかった現三ノ丸部分の大拡張工事を行い、堀側方向へ前面部分を現在の位置まで広げた。享保元年(1716)に始まった工事は2年後の享保3年(1718)に完成し新たな本丸となる御殿群が建てられた。しかし、2年後の享保5年(1720)の石黒火事にですべて焼失してしまう。城下より出火は風に煽られ、城を含む町全体を飲み込み、城内も楯蔵等の数棟を残し、久松山頂の山上ノ丸までほぼ全焼であった。火事の際建物焼失だけではなく、石垣部分の崩落も多く、翌年より三ノ丸を中心に再建工事が始まり、火事より3年後の享保8年(1723)に完成した。城全体の再建工事はその後も続き、鳥取城の象徴的な建物であった二ノ丸三階櫓が完成したのは享保20年(1735)のことであった。以降、一時期二ノ丸の拡張なども行われたが、城の中核は三ノ丸にあった。

また、幕末期の万延元年(1860)着工、翌年完成の三ノ丸の大拡張工事が行われ、南東側が現在の位置まで広がった。この工事では門内部での登城路の変更が行われている。それまで門を抜けた後は右手に折れていたものが、左折し第22次調査区脇を上るルートへと変更されている。

太鼓御門は19世紀前半に書かれた鳥府誌(註1)によると「大手通りに御門にて、他邦の者は御用筋にて来れる者にて、御目付役よりの免なければ、此所に停るなり。又この渡櫓の上には大胴ありて、昼夜十二時の時を敲つ」とあり、厳重に警戒された門であることがわかる。また、その名の通り時を打つ太鼓のあった場所である(正確には櫓脇に付帯する時打小屋)。2層構造で建てられた門は2階部分が渡櫓、1階部分が門という櫓門構造をとっている。絵図上では17世紀台より櫓台状の石垣上に乗る建物がみられ、幕末期まで形態に変化なく描かれてはいるものの、先述の通り火事で焼失しているため少なくとも1度は造り替えられている。建物の具体的な寸法が確認できるのは18世紀代以降であり、代表的なものは下記の通りである。

■『鳥取御城之図』(第68図①) 享保～宝暦年間

渡櫓 「太鼓渡櫓御門 拾弍間弍弍間半 同石垣高サ壺丈壺尺」、
門裏側「幕番所 □間六間」

■『鳥府久松山御城積間図』 天保15年(1844)

渡櫓 「御櫓 二間半に十二間」

■『二ノ丸惣御絵図』(第68図②) 弘化4年(1847)

渡櫓 「梁間弍間半 桁行拾弍間」
門裏側「上番所五畳 幕番所十一畳」

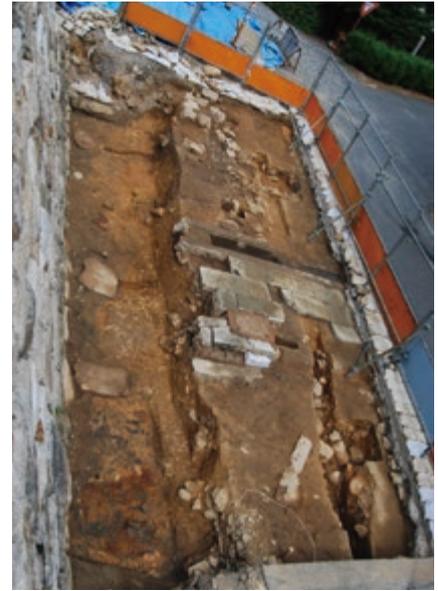
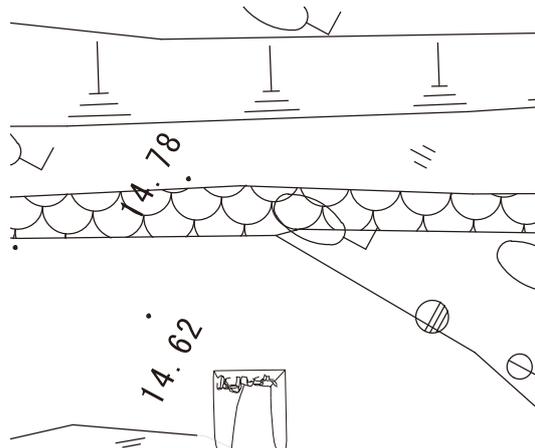
■『鳥取城三ノ丸絵図』(第68図③) 万延元年(1860)以降

渡櫓 「御櫓 梁間二間半 桁行六間 渡御櫓 梁間弍間半 桁行六間」
門裏側「上番所五畳 幕番所十二畳」

上記の資料をみると櫓の規模は2間半×12間であることが共通している。鳥取城での1間は6尺5寸(≒197cm)であり、櫓台部分の天端石間の距離5.0mと一致することから火事後の再建櫓は同じ規模であ

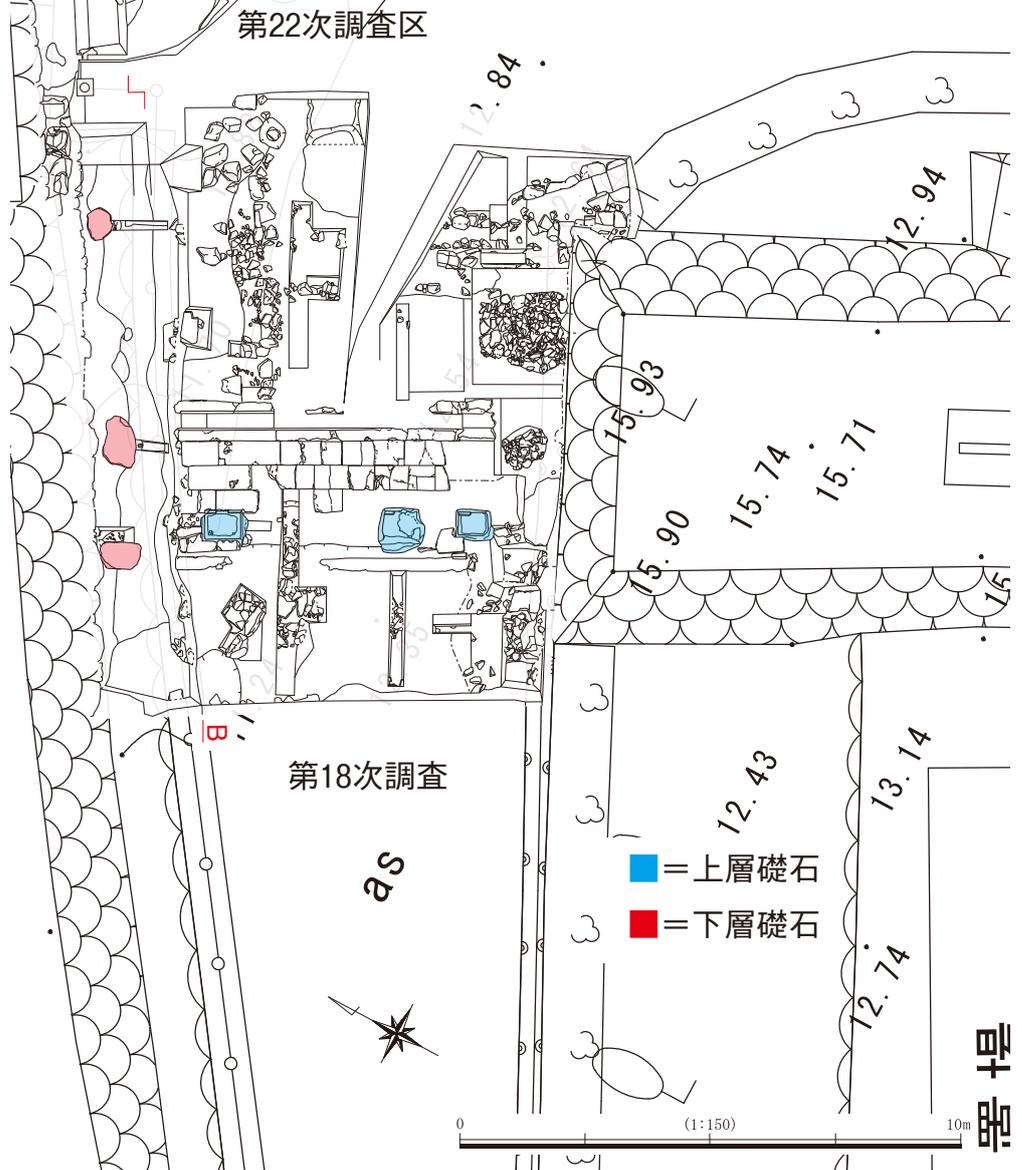


第22次調査 第1トレンチ



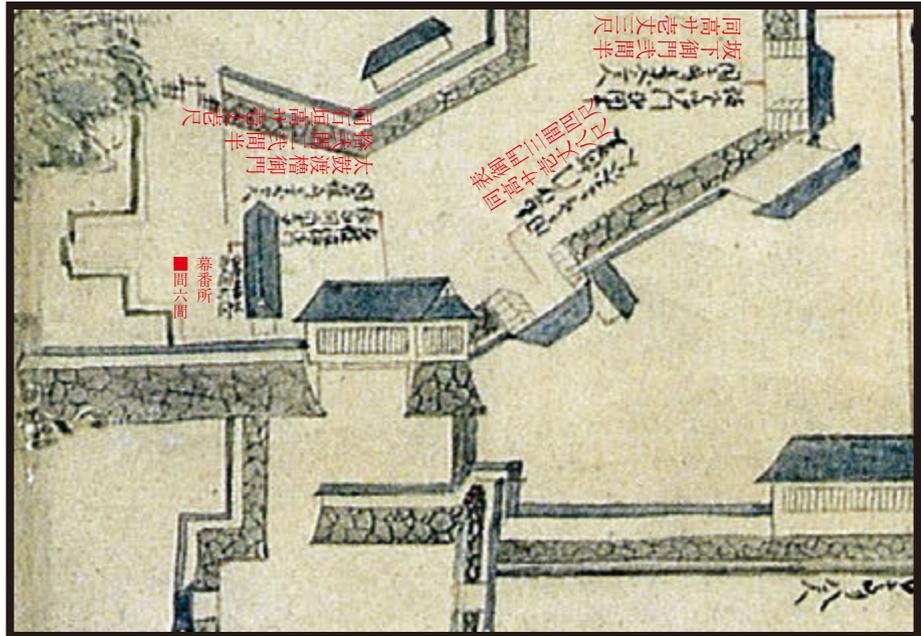
第18次調査礎石検出状況

第18次調査

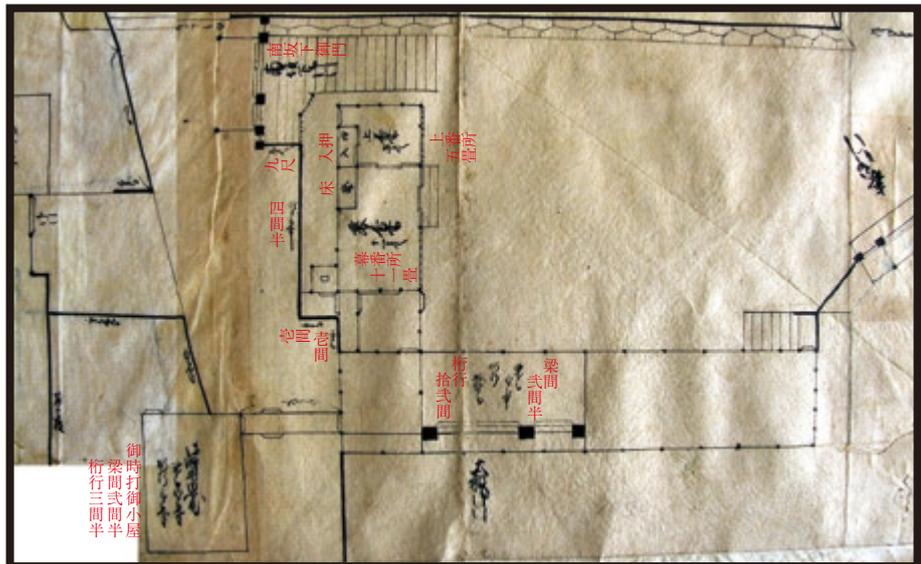


第67図 太鼓御門周辺遺構図(S=1/150)、土層断面図(S=1/80)

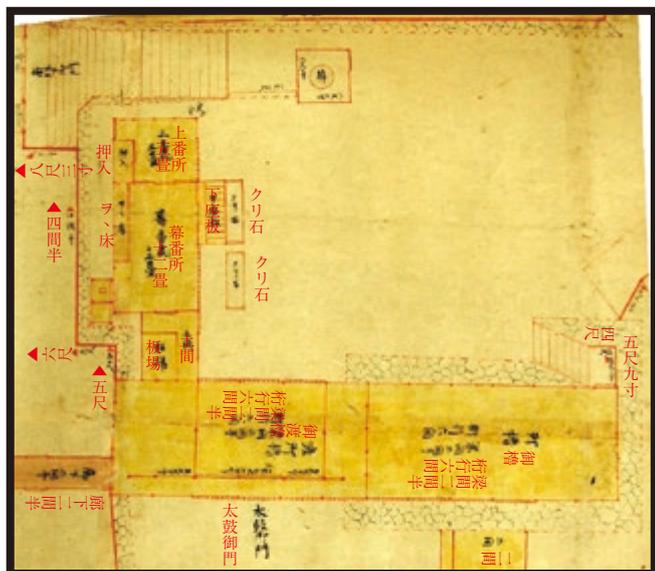
①『鳥取御城之図』
享保～宝暦年間頃



②『二ノ丸惣絵図』
弘化4年(1847)以降



③『鳥取城三ノ丸絵図』
万延元年(1860)以降



第68図 太鼓御門周辺絵図

ったことが分かる。『鳥取城三ノ丸絵図』には櫓部分6間、渡櫓6間の記載がある。12間の半分ずつの距離であるが、柱割をみると櫓台の端部辺りに柱が並んでいることから、何らかの区切りがあり、6間ずつの建物として表記されたのではないか。

門裏側については門を抜けた左側に番所が設けられていたことがわかる。19世紀の絵図には数値の記載こそないが、ほぼ同じ規模の上番所および幕番所の柱割りが描かれている。『鳥取城三ノ丸絵図』には押入れや土間等、詳細な記載がある。建物の前面には「クリ石」と描かれており、性格は不明であるがこれまでを含めるとかなり大きな施設であったことが分かる。また、番所奥には登城路付け換え以前にも階段が存在しており、改変前後で番所への影響はないとみられる。

(2)第22次発掘調査[第67図]

①番所跡

第22次調査では2つのピット状遺構と、落ち込み状遺構を確認した。ともに地山を直接掘り込んでいるため先後関係は不明であるが番所に伴う遺構である可能性がある。2つのピットはそれぞれ掘立状に深区掘り込むP1と礎石立のように浅い窪みのP2と、ともに柱基礎と関係すると推定される形状をみせるが構造が異なる上に周辺に連続するピットは確認できない。先述の火事後の絵図と比較するとピットの位置は上番所の北東辺に相当する。しかし、2つのピットを結ぶと、門や石垣に対し軸が異なっており、ピット自体の深さや作りも違うため、並列する柱基部になるかどうかは検討が必要である。

また、これら番所が同位置に建築が可能となるのは落ち込み状遺構が現位置まで埋められた後のことである。地山が露出する平坦部分が、埋め立て前に存在していたとなるとその空間は非常に狭隘であり、前面に100cmもの段差を持つこととなり、建物が建っていたとするのは困難である。平坦面および施設、P1・2ともに後の改変によってできたと考えるのが自然である。

②落ち込み状遺構

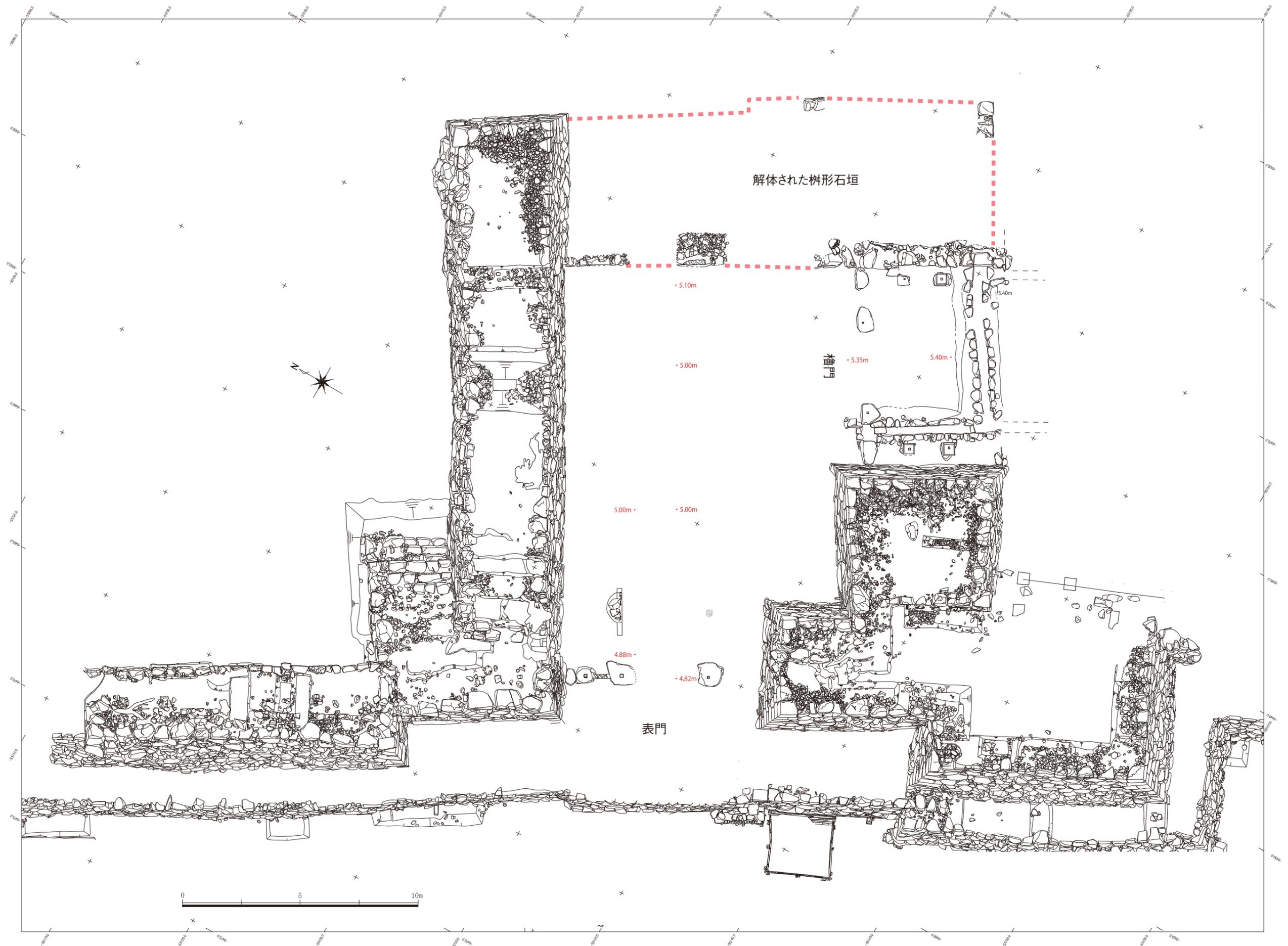
落ち込み状遺構は門側を向いて弧状を描く大規模な遺構であり、大規模な造成層とみられる。平面からみると何層もが互層状に重なり、上面は脇の地山剥き出しの面を揃える。落ち込み内の土は基本が地山由来のものであり、その状況はピット周辺の地山部分を削り出して前面部を埋めたような様相を呈す。Tr-1で確認した落ち込みの底は標高11.7m付近であり、地山上面との比高差は100cm程度である。

大規模な造成は太鼓御門跡の第16次調査でも確認しており、当初の太鼓御門が石黒火事にて焼失した後周辺地盤を70～80cmほど嵩上げし、新たな太鼓御門を立て直していることがわかった(註2)。この嵩上げ土こそ地山由来の土であり、太鼓御門周辺では僅か数層、ほぼ一度に同じ土で埋め立てられていることがわかった。この新旧太鼓御門のうちの古い方、焼土を伴い被熱により赤変した礎石は石垣沿い、現在の溝直下に3石を確認した。地形に合わせて旧登城路面も傾斜しており、礎石上面の標高は近接する前2石(下層礎石1・2)がほぼ同じ11.35mであるのに対し、若干離れた位置にある1石(下層礎石3)は11.55mでいずれも若干掘り下げた地山中に据えられている。下層礎石3から3～4m程度しか離れていないTr-2で確認した落ち込みの底は標高11.8mで地山に当たる。両者の標高は近く地山面はつながっていくものとみられ、上部に乗る土は太鼓御門付近と一連の火事後に周辺から持ち込まれて敷かれた造成層であると考えられる。

(3)第30次発掘調査第4調査区

①渡櫓柱割

先述の通り、梁間2間半、桁行12間という数値は正確であるとみられ、桁行の半分である6間が当調査区内、櫓台上にあったようである。絵図中の柱割をみると梁間方向に6本、桁行方向へ7本の柱が描かれている。あくまで櫓内の柱数であるため、この数が直接地面(或いは礎石)に並ぶ柱数とは言い切れ



第69図 中ノ御門周辺遺構図(S=1/150)

ないが、立つ場所としては同じ位置が想定される。この場合、柱は石垣天端石上に並んでいるため、上面が直接礎石の役目を担っていたと考えられる。しかし、建物解体後1世紀以上も経ちその間、露出していたため、現存石垣天端面上に柱痕は残ってはいなかった。

②焼土層と石垣修理

Tr-1の3層は一見してわかる程の焼土層である。赤変した土はこれまでの調査でも度々確認されている。また、同層からではないが第66図4のような被熱により変色・変形した瓦も出土していることから相当な被熱行為が想定でき、独立した櫓台では記録上石黒火事だけである。Tr-2側では確認できなかったが門側へ向かい広範囲に広がっているとみられる。

石黒火事では建物の焼失とともに周辺の石垣も崩落しており、火事翌年の享保6年(1721)に幕府へ提出された鳥取城修覆願絵図には櫓台を指し「処所石垣左右共高サ式間横四間崩申候」との記載があることから、大規模な崩壊であったとみられており、先の調査でもB面端部およびD面下層にて積み直しの痕跡を確認した。Tr-2の5層は外側へ向けた傾斜を埋めるように入っており、石垣修理に伴い敷かれた層であると考えられる。

石垣積み直し時にはこれらの火事層の上には新たな地面が敷かれてその上に太鼓御門櫓が再建されたとみられる。

2 中ノ御門周辺

(1)第30次発掘調査第1調査区

①堀

調査の結果2種類の堀の存在が考えられる。

- ・ A-H間にあった厚手の堀
- ・ その他の区間に使われていた薄手の堀

前者はA面石垣天端からI面石列までの間に作られていたとみられ、側面からみればB面部分を埋めていたとみられる。I面はH面へ向けて面を揃えており、石を積み重ねない石列は基壇状の様相を呈している。石列の上面は平滑ではなく高さにはばらつきがあることから、石直上には一旦横木を置いた可能性もある。A-H間の距離は平均して1.1m程度であり、厚手の堀が想定される。古写真をみてもこの部分の堀はC面のものより若干低くみえることから、構造が連続する一連の堀ではなかったとも考えられる。しかし、この堀も堀沿いに延々と続いていたわけではなく、B面から26m程の地点にあった段差までの区間のみに設けられたものであった可能性もある。これだけの厚みを持つとなると自立も可能であったとみられるが、根巻き状の石囲いらしき石もあるため控柱があった可能性は否定できないが、その場合なぜ緑色凝灰岩製の“コ”字形根巻きを使用しないのかという問題が残る。

後者の堀はその他の場所に使われていたとみられる基壇を持たないものである。石垣天端石上に直接建てられていたとみられる。古写真ではTr-6付近、表門裏の段差上には堀の妻部分が見えており、そこには板堀状の薄い堀が写っている。またC面上付近からは原位置はとどめていないものの緑色凝灰岩製の根巻きが出土しており、周囲での使用が考えられる。このことから『石垣天端石上の堀+根巻きをもつ控柱を用いて支える』というのが基本であったとみられ、第3調査区の状況が一般的であったと想定される。

古絵図上では堀沿いおよび柵形上の堀は近世前期から同じように描かれており、修覆願等に崩壊記録はみられない。しかし、火事による焼失や、石垣の修理に伴う建て直しなどは想定でき、何度か更新されていたことは明らかである。

②使用瓦

出土の多くは瓦溜と廃棄層からであり、明治8年頃に実施されたとされる中ノ御門周辺の建物解体時に出た破損品を廃棄したものと考えられる。D面上、堀のあった範囲には帯状に多量の瓦片が廃棄されている(第19図)。これまでも同様の状況がみられ、多くの地点で廃棄層を確認しており、大手門付近ということから、解体以前から存在していたとは考えられず、解体に伴うものであると考えられる。出土した瓦のうち軒丸瓦はD類とI類が多い。D類は比較的軟質な焼成であり、18世紀の前半には出現していたとみられる。一方I類は硬質で19世紀以降幕末期まで使用された最終段階の蝶文であり両者には明らかな時期差がある。また、17世紀の前半には存在していたB類もみられることから、幕末期にあっても使用できる限り古段階の瓦は使い続けられていたようである。当城の場合、享保5年(1720)の石黒火事にて建物はほぼ全焼しており、その時点で使用不能となった瓦は廃棄されているため、古い瓦の使用はある程度限定的であったとみられる。

一方、軒平瓦は16・17のような古相のものもあるが大半はl～n類であり中でもm類が中心である。この3型は基本的に文様構成がほぼ同じであり、同時期に製作されていたと考えられる。出土地点から堀または門のどちらかに使用されたかは断定できないが、ある時点周辺の瓦が変更され、最終的にm類中心となったようである。軒平瓦について言えば、ある段階から棧瓦へと変更となり、規格にそれほど違いのない軒丸瓦とは異なり、以前のものが構造的に使えない状況にあった可能性がある。

文様瓦以外をみると特徴的なのが目板瓦の存在である。“へ”の字形の棧瓦の出土数に対し、目板瓦および、その一部とみられる扁平な瓦の割合は3：1である。堀については棧瓦が主体であると考えられていたが、目板瓦葺きも想定の一つとしなければならない。雁振瓦については、出土の大半に「文〇」「天〇」(〇部分は干支)などの年号を示す刻印がみられており、当調査区のものには「天巳」がみられ、天保4年(1833)を示すと考えられる。この時期に一度に葺き替えられたものであろうか。

また、瓦溜から出土した「寛政四年」(1792)の銘を持つ鬼瓦はおそらく門に使用されていたものとみられるが、享保5年(1720)、石黒火事にて焼失した中ノ御門のうち表門については大手門であることから同年中に再建されて以降、建て替えの記録自体はないが、石垣自体の修理は何度か行われていることから、その際に葺き替えられた可能性がある。

③近世最終面

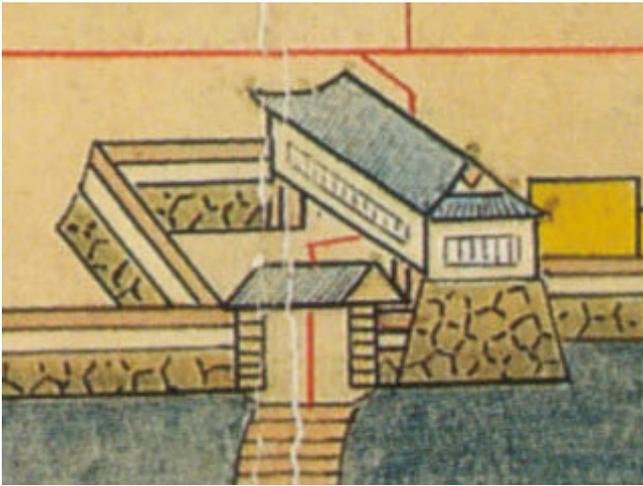
石垣上については、おおよそ天端石のレベルが旧地盤面となる。堀沿いについては現表土の直下10cm以内に広がる硬く締まった整地面が地盤である。Tr-1の断面の観察から、他調査地点の平地部分でみられた薄く何層にも重なりあう整地面はみられなかった。

榊形石垣、D面上についても同様である。Tr-4～6をみると、現在石垣上には山なりに土が盛りられており、これらを除去すると下には瓦の廃棄層がみられる。この瓦は標高8.3m前後にある石垣天端へと続く水平方向の整地面上に堆積していることから、この面が旧地盤であることがわかる。この面もまた、複数面が重なるものではない。

一方平地部分については他調査地点同様、地盤面に変化がある。F面の石垣をみると標高7.0m付近で横方向に目地が通る。平石が連続しており、それ以下の石垣は被熱による赤変が顕著である。目地より上の石垣に赤変はみられず、積み方がやや雑であることから、ある時期に積み足されたことが分かる。

D面側は元から現在の標高(8.3～8.5m付近)であることから、目地との間に高低差があったこととなる。トレンチ調査では傾斜を持つ層がみられることから、この高低差部分は土羽であったとみられ、後にD面と同じ高さまで積み足しが行われたようである。

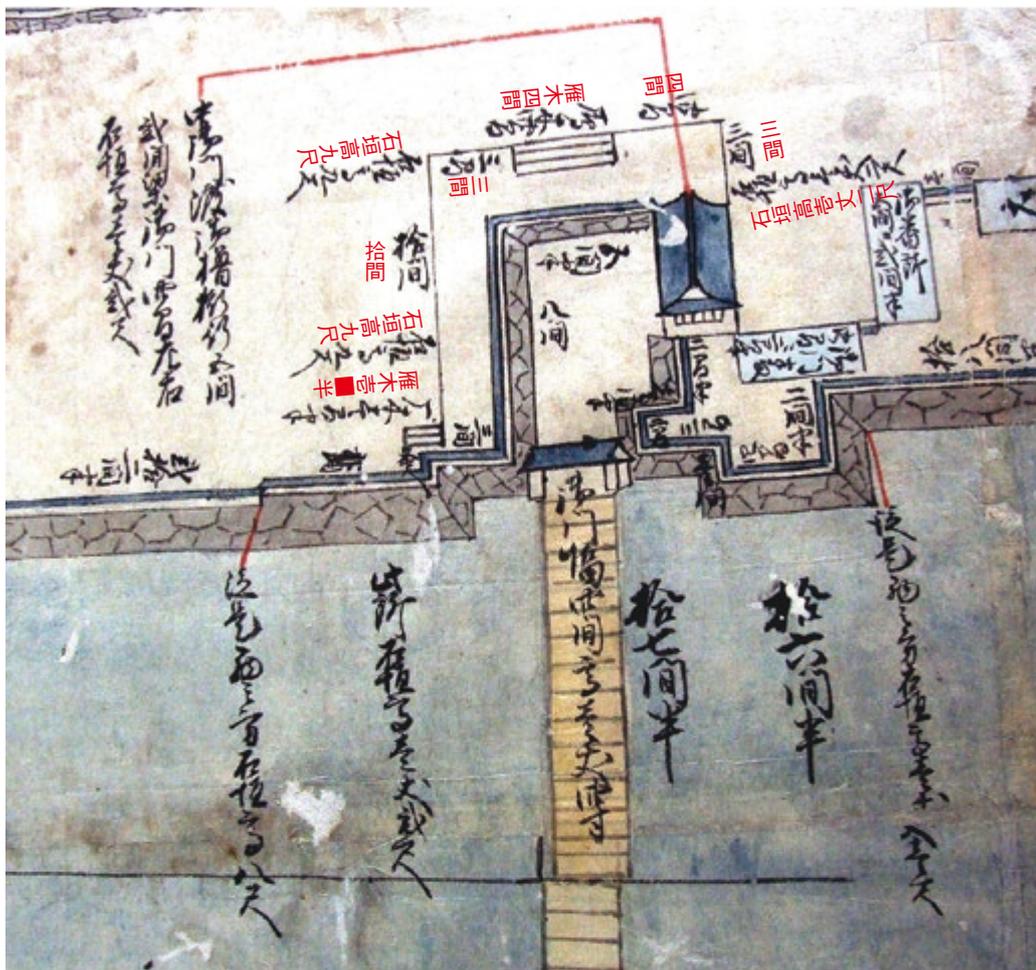
石垣の根石付近をみると、初期の地盤面は平成10年の調査および、今回再検出した石段最下部の状況から標高4.8m付近にあり、現石垣天端まで比高差は3.8m前後ある。同地点の高さを示した文化・文政期の鳥取御城内手配之図(第70図)には「石垣高サ九尺」とありその差は1m以上になる。地盤面から横



①鳥取城破損御修復願絵図〈天和3年(1683)〉
櫓門は堀側まで伸びる



②鳥取城修復願絵図〈万延元年(1860)10月〉
櫓門の幅は短くなる



③鳥取御城内手配之図(文化・文政期頃)

第70図 中ノ御門周辺絵図

目地までの差とも異なる。一方階段をみると、上下3段ずつで傾斜が異なり、3段目の上面5.6mから4段目の上面5.9mまでの間に変換点があるようである。平成25年度に実施した周辺の調査では標高5.7m付近に近世最終面とみられる整地面がある。そこから石垣天端までの距離は丁度九尺となることから、下層から順次嵩上げが行われていたこととなる。

(2)第30次発掘調査第2調査区

①堀

第1調査区側から門を挟み堀沿いに続く。写真にあるB・C・D面上については第1調査区とは異なり連続した同じ高さの堀であったとみられる。D-E面の角石上では、角いっぱいまで建っていたのではなく、僅かに控えた位置に堀角があり、角柱が露出しているのが分かる。その先については、明確に写ってはいないが、絵図上ではE面上沿いに続いていように描かれる。写真でも明らかなおと、表門と堀との屋根高はそれほど違わないことから、両堀に挟まれる形で門が作られていることがわかる。しかし、門裏付近では第1調査区同様階段状に50cm程の段がつくことから、これに合わせ堀も一段高い位置に築かれたとみられる。この段差自体の意味は不明であり、また、石垣面の観察からは後々に一段分が増積みされたものではないことは分かる。いずれにしても一段高くなった堀はF・G面に続き櫓門に接続する形で終わっていたようである。

第1調査区の一部にみられたような基壇状の痕跡は確認できず、直接的な堀の痕跡は検出できなかった。出土遺物には緑色凝灰岩製の根巻きがある。内寸15cm以上の柱を囲っていたようであり、やはり天端石上に立ち控柱を持つ形態の堀であったと考えられる。絵図中に修理履歴などを確認することはできない。

②使用瓦

第1調査区同様、門脇、階段状の段差下に瓦溜を確認した。同じく使用不能となった瓦を多量に廃棄したような出土状況である。D-E角の石垣を積み直しているため、同地点には残存していないが、本来は周辺一面に堆積していたと考えられる。

軒丸瓦については出土点数が少ないもののE類が多い。B・C類など古相のものが目立ち19世紀以降のものについては12の葵文があげられる。軒平瓦は出土例が少なすぎるが三葉文のn類がある。

その他の瓦については、棧瓦があるが、図化できていないものを含め目板瓦が非常に目立つ。この状況は第1調査区と同様であり、やはりこの瓦の使用をある程度想定する必要がある。

③中ノ御門櫓門[第70図]

F～I面に囲われた範囲は石垣天端面高が8.5～8.8cmであり、7.5m程の堀沿いより1mも高い。絵図のうち石黒火事以前ののを見ると、櫓門の端部は堀沿いまで延びている。一方火事以後は幅が短くなり、堀沿いには堀が描かれる。再建後の寸法を確認すると表門同様石垣間に挟まれて建てられた建物となり、わずかにI面天端石上に乗る程度の規格へと変更されたようである。

3 登城路沿い

第30次調査第3調査区

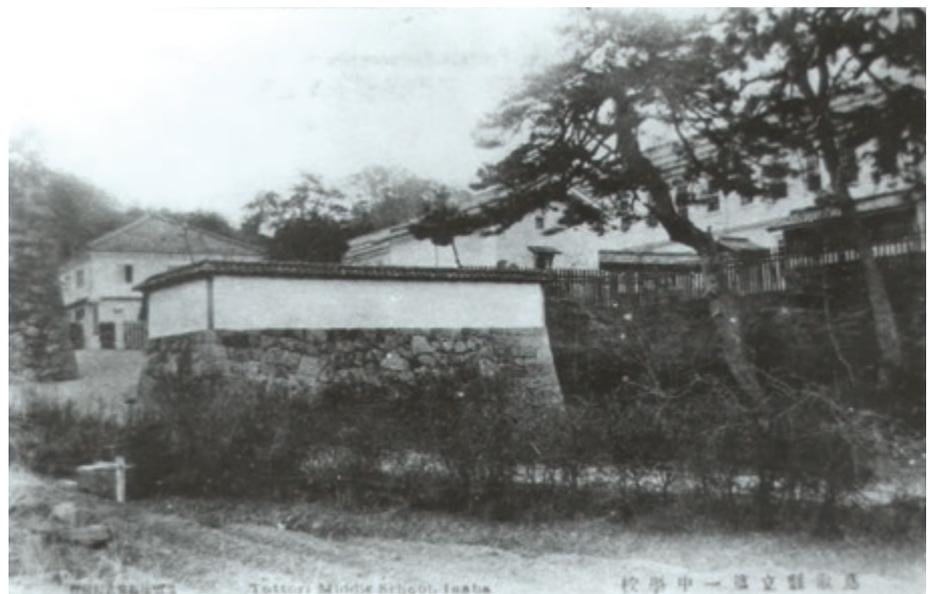
①堀

控柱根巻きの良好な残存により全体像が明らかとなった。“コ”の字形に加工した緑色凝灰岩を向かい合わせて使用するこの根巻きは柱根元付近の腐食などの劣化を防ぐために設置されたものである。これまでの調査でも出土しており、鳥取城に特徴的な工法である。規格は柱に合わせ様々であるが、高さは20cm内に収まるものが多く、当調査区のように30cm以上となるものは現在のところ確認できていない。

堀自体は石垣天端面上に収まっていたとみられるため、根巻きはその控柱を保護するものである。ま



①鳥取城修覆願絵図(嘉永3年(1850))
石垣の崩壊状況を記す



②堀残存状況 大正期頃か

第71図 第30次調査第3調査区周辺状況

た、石の形状より控柱は垂直に伸びているため、塀と控柱との間にはさらに横方向に伸びる支柱が存在していたこととなる。また、根巻き間の距離は200cmであり、鳥取での一間(六尺五寸≒197cm)の規格で据えられていることも特徴的である。

鳥取城の建物は明治12年までに解体が完了しており、あらゆるものが撤去されたと考えられていたが、近年の古写真解析の結果、塀に関しては三ノ丸を中心として、近代以降も残存していることが明らかとなった。城解体後、三ノ丸には陸軍が入り、明治22年には尋常中学校が移転開学することとなるが、学校写真には随所で校舎建築とは異なる塀が写されている。第71図の当調査区を写した明治期の絵葉書にも塀が写り、現在のところ大正期までは存在を確認出来ることから、或いは昭和まで残存していた可能性もある。塀の形態は堀沿いの正面石垣上にもみられた塀角に柱を見せる形のもので、前面を石垣面と合わせ、屋根には棧瓦とみられる瓦を葺く。

根巻きの多くは地面上への置き型が多いと考えられるが、ここでは根元が裏栗石中に埋め込まれていることから石垣と一体的に造られていることが分かる。当塀は太鼓御門正面の枡形の一部であり、16世紀台より太鼓御門が描かれる絵図には一体となって描かれている。ほぼ同じように描かれるため絵図より形態の変化を伺うことはできないが、隣接地で実施された享保期の三ノ丸拡張、石黒火事での建物焼失等により何度か更新されていることは確実であろう。

②使用瓦

写真でも明らかなおおり、塀に使用されていた瓦は棧瓦である。出土瓦をみても棧瓦が中心であり、古相のものはみられない。軒平瓦はq類が目立っており、第1・2調査区で多く出土した目板瓦は確認できなかった。また釉瓦もある程度入っている。塀は近代に入っても存続しており、近世末には生産が始まっていた釉瓦は修繕などに伴い、部分的に入れ替えられていたとみられる。

③切石積み石垣および溝

写真に写り最終的に近代まで残存したこの塀の築造は嘉永期である可能性が高い。嘉永3年(1850)に幕府に提出された絵図(第71図)には石垣部分を指し「処所塀下石垣損五間余 高サ壱丈計崩申候」「処所塀覆並石垣共折廻り 四間半高サ壱丈程間崩申候」とある。この絵図は地震による被害の復旧を願い出たもので、塀下この付近の石垣が大規模に崩れたことがわかる。

この復旧のために積まれたのが現在正面～側面へと続く切石積みの石垣とみられる。鳥取城内でもここだけの精緻な積み方は、大手登城路沿いで最も目立つ場所に位置する高石垣であったため、視覚効果を狙ったものと言われている。この後積まれた他所の石垣にもこのような工法はみられないことからその特殊性は明らかである。これだけの石垣崩落であったなら、当然上面の塀もまた崩壊したと考えられ、また、石垣積み直しを行うにしても塀をのせたままでは困難であるため、石垣の積み直しに伴い塀も新造されたと考えるのが妥当である。

この崩落の直前、天保15年(1844)の『鳥府久松山御城積間図』には塀裏に雁木が描かれているが、調査では確認できず、代わりに緩やかな勾配を持つ路盤面であったことが分かった。また、太鼓御門櫓台下より石垣伝いに続く溝については、以前の調査時は近代溝との想定をしていたが、登城路面との関係から近世溝である可能性が高いと考えられる。

註

(1)岡島正義「鳥府誌 上ノ天」『鳥取県史』第6巻 近世資料 1974

(2)鳥取市教育委員会『史跡鳥取城跡太鼓御門跡発掘調査報告書』 2009

写真図版



第22次調査区全景(南西から)



Tr-1 E面土層(北西から)



Tr-1 F面土層(北東から)



Tr-2 落ち込み状遺構断面(北から)



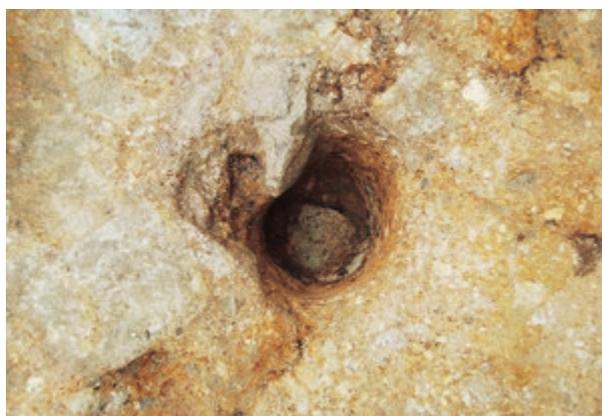
落ち込み状遺構検出状況(南西から)



Tr-3 F面土層(北東から)



調査区遠景(北から)



P 1 完掘状況(南西から)



旧石垣検出状況(南西から)



P 2 検出状況(南から)



石垣検出状況(南東から)



大手登城路空中写真(南から)



第1調査区遠景(南から)

第30次発掘調査第1調査区1



Tr-1 全景(北東から)



Tr-1 南東面土層(北西から)



Tr-3 A面土層
(南西から)



Tr-3全景(北西から)



Tr-6北東面土層
(南西から)



Tr-5瓦検出状況
(南西から)



階段検出状況
(北東から)



階段検出状況2
(北西から)



Tr-4・6瓦廃棄状況
(北西から)



Tr-3・4間瓦廃棄状況
(北西から)



土塀基礎状遺構
(北西から)



階段状遺構
(南西から)



第2調査区全景(西から)



第2調査区H面(北東から)

第30次発掘調査第2調査区 1



石垣修理状況
A面上面(北東から)



Tr-1 C面土層
(北東から)



Tr-4 A面土層
(北西から)



Tr-2 A面土層
(北西から)



Tr-3 A面土層
(北西から)



Tr-5 A面土層
(北東から)



階段状遺構検出状況
(南西から)



J面石垣検出状況
(南西から)



Tr-7全景(北西から)



E面石垣上瓦廃棄状況(北西から)



E面石垣上廃棄瓦除去後状況(北西から)



第3調査区全景(北西から)



第3調査区全景(南東から)

第30次発掘調査第3調査区 1



溝状遺構検出状況(北西から)



Tr-3全景(北から)



Tr-1 南東面土層
(北西から)



G面石垣検出状況
(南東から)



控柱根巻き検出状況
(東から)



控柱根巻き 1 設置状況
(北東から)



控柱根巻き 3 設置状況
(北東から)



控柱根巻き 8 設置状況
(南東から)



第4調査区遠景(北西から)



第4調査区北西半遠景(東から)

第30次発掘調査第4調査区1



第4調査区南東半遠景
(北から)



Tr-1 西壁(東から)



Tr-2 西壁(東から)





報告書抄録

ふりがな	しせきとっとりじょうあとつきたりたいこうがなるはっくつちょうさほうこくしょ								
書名	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅱ								
副書名	第22・30次発掘調査								
巻次									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	坂田邦彦								
編集機関	鳥取市教育委員会								
所在地	〒680-8571 鳥取県鳥取市上魚町39番地 TEL (0857)20-3367								
発行年月日	西暦2014年(平成26年)3月28日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間		調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号						
しせきとっとりじょうあと 史跡鳥取城跡 つきたりたいこうがなる 附太閤ヶ平	とっとりし 鳥取市 ひがしまち 東町 ちようめ 2丁目 ちない 地内	31201	2-0211	35° 30' 22"	134° 14' 15"	22次	20090908 ～ 20091001	35	史跡鳥取城跡 復元整備事業
						30次	20120628 ～ 20121001	第1調査区 150	
								第2調査区 130	
								第3調査区 75	
						第4調査区 70			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
史跡鳥取城跡 附太閤ヶ平	城郭	江戸		石垣 堀跡 溝 階段		陶器 磁器 鉄器			

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅱ

— 第22・30次発掘調査 —

発 行 平成26(2014)年3月28日

編 集 鳥取市教育委員会
〒680-8571 鳥取県鳥取市上魚町39番地
電話 (0857)20-3367

印 刷 株式会社鳥取平版社
